婦人文藝

女子文壇



明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可
大正二年四月十四日印刷納本（毎月一回一日發行）

四月増刊 第九年第六號

東京 女子文壇社

女子文壇第二増刊 婦人文藝（目次）

口絵

小説

横瀬夜雨先生著

夜雨集

再版

製本既成

好評

全一冊洋装本綴
紙數三百三十頁

特製色クロース天金雅製
正價八拾錢
送料六錢

並製色美箔入装
正價五拾錢
送料六錢

著者は我邦に珍しき郷土詩人なり身は筑波山下の一閑村に寂靜なる孤獨生活を送れと其文名は天下の青年男女に渇仰されて驚くべき潜勢力を有せり殊に『夜雨集』は自己の生活を描くこと最も眞實にして其文、人を動かさずんば已まず而かも此書の如く男子より婦人を觀、婦人より男子を觀るに濃かなる感情の籠れるものは他に尠し蓋し本書は出來合の出版にあらず當然永遠の生命を有すべき眞面目なる著述なり

發兌元
東京京橋區大鋸町
女子文壇社
（振替口座一七二九番）
◀全國書店取次販賣▶

蝶



通俗繪入 月刊雜誌 好評

四月號 (增刷三版)

● 面白い浮世の娯樂恐ろしい社會の裏面 ●

うきよ

▲『不如歸』以上の悲劇!!!

▲芝山内の血鬪

▲女郎の秘密函

▲悲慘なる六區の白首

▲上野丸萬樓化物の正體

▲復活せる愚連隊の落武者

▲東都女髮結總まくり

▲恐ろしき電車內の色魔

▲毒藥を仰ぎしわが告白

▲淺床の落花狼藉

▲女か飛行機か

▲第一福寶館活辯の艶聞

▲文藝協會女優の渾名

▲贋札使ひの惡手段

▲女學生の艶書

▲田中樓の內幕

▲女郎捨場淨閑寺

●地獄の一丁目にある未決監

▲救世軍に救はれたる娼妓

艶衣

▲お妾案內

▲貴族と僧侶と淫婦

▲落語江戸子(むらく)

● 本誌獨特記事悉く現狀寫眞挿入す ●

一冊 拾錢 送料壹錢 振替(二三七九番) 東京京橋 樂文社

▶最寄書店品切の時は本社へ申込あれ◀

花の枝



公爵岩倉令弟夫人濱勇子



子爵青山幸宜氏夫人愛子

微笑



宮本けい子　齋藤つる子

霞の衣



山口滿壽子孃



松本もと子孃



山崎その子孃



山下喜美子孃

誌友の面影



(岡山)池田敏子孃
(石狩)本間佐倭子孃

(上毛)小澤竹子孃
(奈良)村田梅野孃、岡山龍子孃

(福岡)三井靜枝子孃
(岡山)野崎輝子孃

女子文壇　一月增刊

現代婦人

▲新しき女とは何ぞや……巖谷小波

◎町より村より　全國よりの通信にして地方の文明は女子の手に描かる

▲若き女の人々……水野葉舟

▲二階の朝……澤村胡夷

◎顔の描寫　兄さんの顔あり女優の顔あり凄い顔あり千種萬様の顔

▲一喝　羅羅襄とは何者ぞ！玄の又玄摩訶不思議！

◎自己に對する愛……長曾我部菊

◎濱ちりめん……山田邦枝

◎無言のあひだ……太田喜志

◎深夜の入浴……粒木つね

◎貧しき生存……白木絲子

現代の婦人に與ふ……なのりそ

▲驚くべき新説にして其實は動かすべからざる眞理なり▼

▲明治の小説に現れたる婦人の顔……外島涙之介

▲歌謠と東海道……前田林外

◎帝劇總見記……あやは

◎街になる村……平塚白百合

◎初奉公日記……龜岡みつゑ

◎職業を求めて……松並紫花

◎有髪の尼……水香

◎南國の福音……石井とし子

◎小學教師……波の香

◎お裁縫の師匠……大橋榮子

◎武藏野の戰ひ……笹本多美子

◎短草怨……日かげ草

◎朝の出がけ……櫻木雪江

◎一日の仕事……加藤萩香

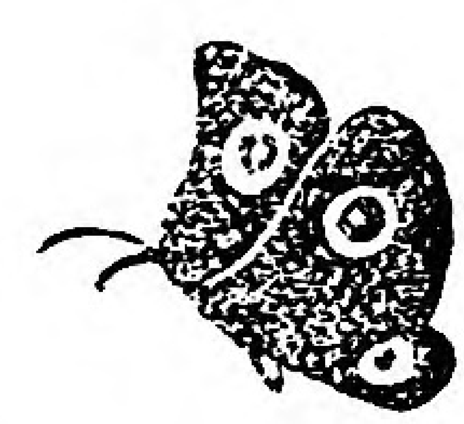
口繪　太田三郎筆（彩色石版）

定價一冊　金拾五錢

女子文壇社發行



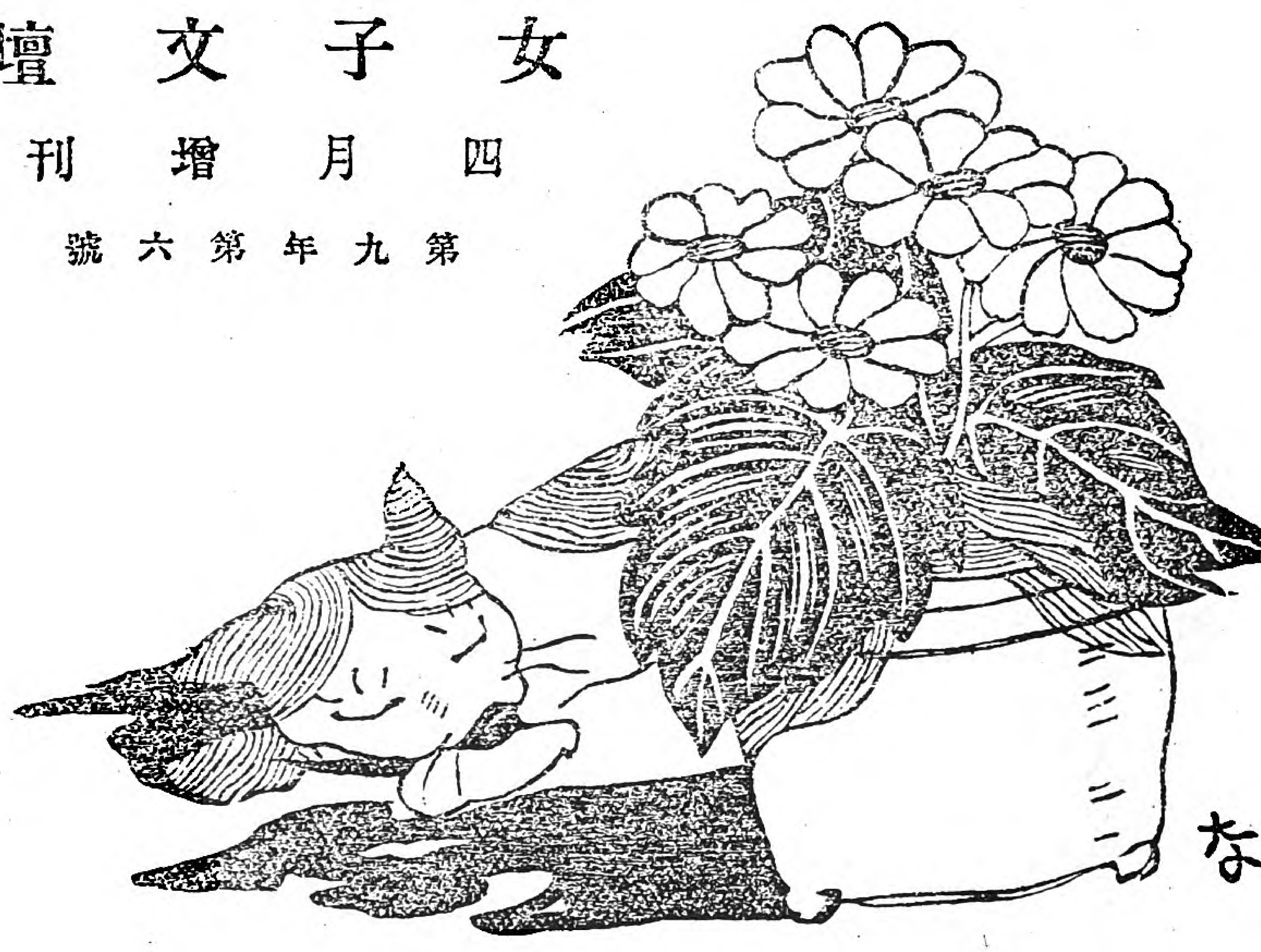
婦人文藝

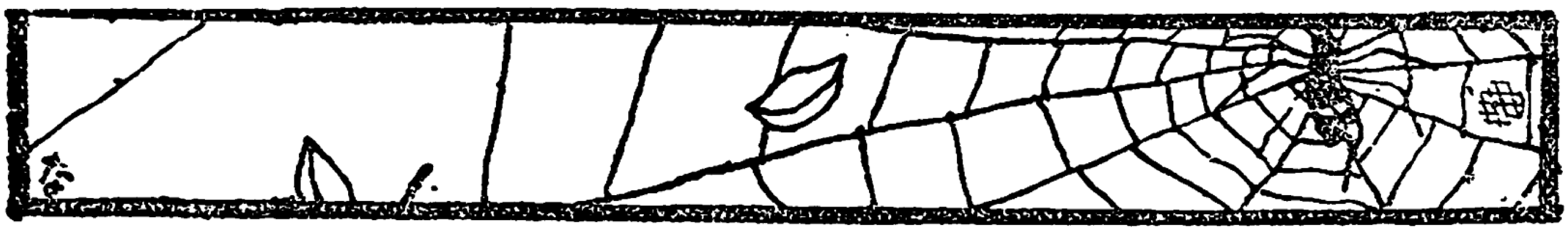


女子文壇

四月増刊

第九年第六號





濁血

小笠原さだ子

空には水々しい乳色の雲がひろがつて朗かな日の光をさへぎつて居るので地の上は薄もやのかゝつた樣な柔らかな光がどんよりとたゞよつて居る。

花はもう色があせて終つて少しの風にも粉雪の樣に散つて行つた。其小枝の尖にはもゆる樣 淺緑の新芽が茶褐色の木の皮をやぶつてさえ〴〵と伸び出して居た。

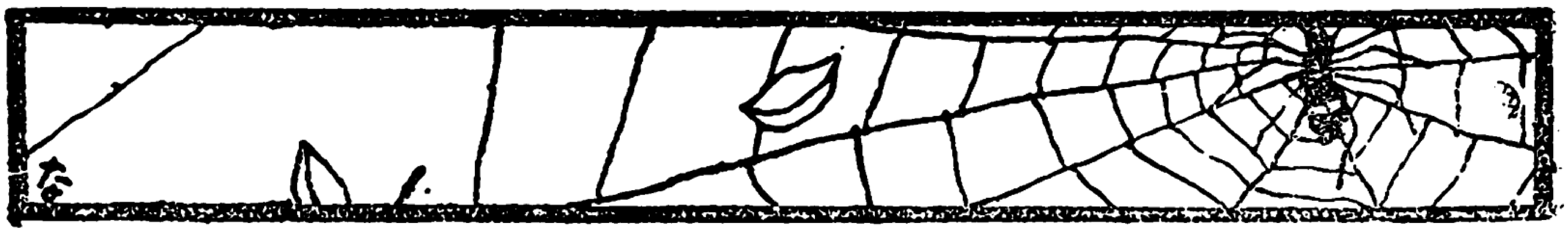
毎日生ぬるい濕氣をふくんだ南風は輕るい花瓣にもつれたり障子の隙間から忍び込んで人の膚をくすぐつたりしては妙に心を苛だゝせるのだつた。

弱々しいおことの神經は險惡な此頃の天候にも堪へ得ないのかます〳〵物狂ほしくなつて來た。東京の伯母の家に落ちついてからは一日一日と目に見えて惡るい方に進んで行く樣に思はれた。

「あゝ嫁にやつたのが一生のあやまりだつた」娘につき添つて田舍から出て來た母親は毎日こう云つては浮かない顏をしては茶の間に許り座り込んで居た。見物處では無かつた。

主婦も幾晩も〳〵眠らないかして青くむくんで居る樣な姉の顏を見ると自分の胸もむすぼれてくる樣でなぐさめる言葉も出なくなつた。早やく主人に死別れた此所の家には母一人娘一人で男氣もない靜かな家であつた。

此家の主婦はおことの母の妹で早くから東京に住んで居るのだつた。



おことは今朝も明方から泣いたり憤つたりしてすつかり感情が逆立つて終つて家中の人をハラハラさした。九時頃にやう〳〵眠藥を飲ましてだましたりすかしたりして床の中に寢せつけたのであつたが、其後はお午近くになつてもよく眠つて居るかして靜かであつた。

「昨日お醫者の處につれて行つたりしたので却つて氣持をわるくしたのぢやないかねえ」

母親は昨日博士の宅に行つた歸る途中で道普請をして居た工夫等にからかはれたりしたのをひどく氣にかけて夕べも始終其事許り口惜そうに憤つて居たのなどを思ひ出して居る。

「そうね、昨日から少し樣子が異つた樣ですね、昨日は歸つて來ると妙な悲い目つき許して口もききませんかつたわね…あれでも未だ正氣の處があるのですからうつかりした事は云はれませんよ…で博士は子宮には故障がないつておつしやるのですか」

「あゝ何とも故障がないつて云つてるんだけれど大學の方ぢや頭は惡くないから子宮から來るのだつて云ふし昨日はまた子宮の方ぢやない頭の方からだつて云ふし…博士だつて何だつて解るもんぢやありやしない」

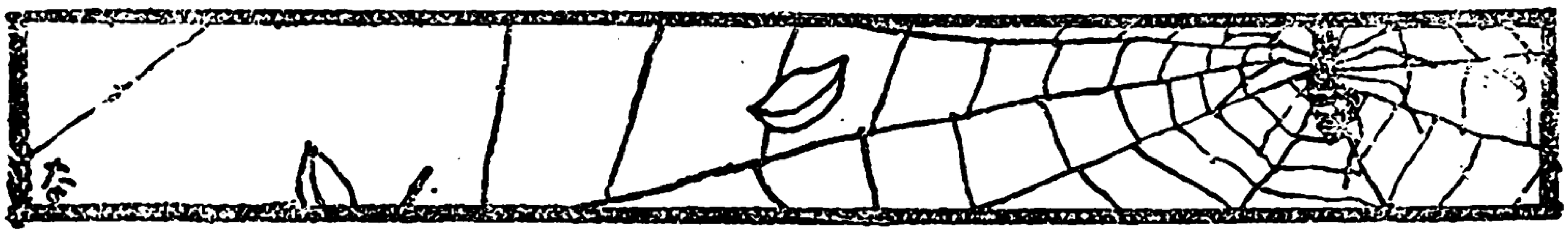
母親はこう云ふとやけに兩手でこそ〳〵した顏をさすつた。

「伯母さん、おことちやんはね机によりかゝつて何か一生懸命で書いて居ますよ。そして一人でお話してゝよ」

奥の間をこつそりのぞきに行つた娘は戻つてくると首を伸してこんな事を云つた。

「オヤ、おきて居るの」

妹は氣づかはしそうに云ふのだつた。



「國に居る時も毎日の様に手紙をかいて居たつたけれどね、始めのうちは病氣だなんてほんとうに思ひもよらない事だからね、うつちやつておいたのが、其うちに月やくが始まると急に變な風になつて終つたんでね」

母親はむづ〳〵した口調で云つた。

「そう、おや姉さん、吉井さんに逢せて見たらひよつとして直るつて事もあるんぢやないでせうかあんまり思ひつめたんぢやあないのでせうか」

「だつて婿は一週間許しか一所に居ないんだからね、あの樣子を見たら驚いちまうだらうさ、第一親の妾が顏が逢せられやしないやね」

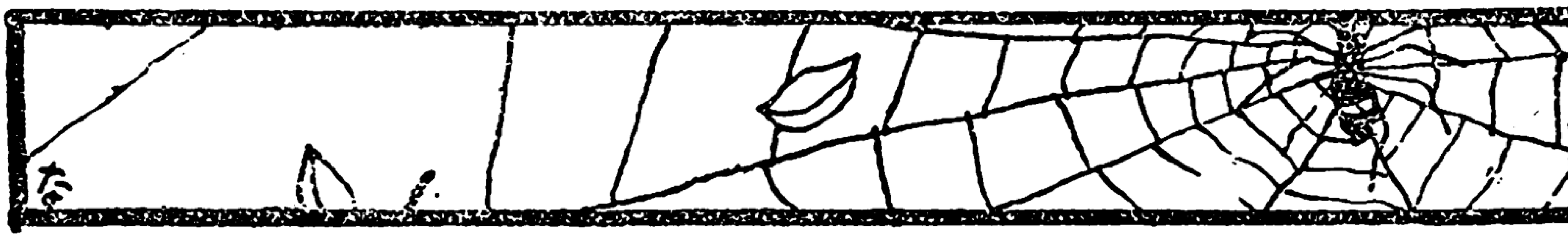
「それもそうですね」

二人はまた深い吐息をするのだつた。

おてとの良人は同郷の人で今は東京の或會社に勤めて居る。親も兄弟も無い一人者で此正月に國に歸省して居るうちに急におてとゝの緣談が始まつて其がわけもなくまとまつて終つた。

結婚式がすむと一週間許は良人はおてとの家に宿つて居たが直ぐ上京しなければならなかつた、そして今は靜かな郊外に一軒家を借りてばあやなどを使つておてとの上京を待つて居てくれるのだつた。

「婿に對して何と申譯をして好いのだか私はもう此事を知らせ度にも手紙の書き樣がないのだもの…親が承知であんな病氣のある娘を嫁にやつたかと思はれるかと思ふともう私迄が氣が狂ひそうになつてくる」



母親はそんな事を思ふともうどうして好いか解らない程氣が苛々してくるのであつた。

「なほるお藥はないのでせうかね」

妹もこんな事を云ふより外は無いのだつた、おことは結婚の當座は何事もなく暮して居たが、夫の上京後は殊によくはしやぎ切つていつものぼせて居る樣に頰を眞赤にして居た。そして母親に向つて良人の事などを耻かしそうな風もなく語つて聞かせたりした。

毎日の樣に机に向つて東京の良人の處へ長い〳〵手紙を書いたりした。

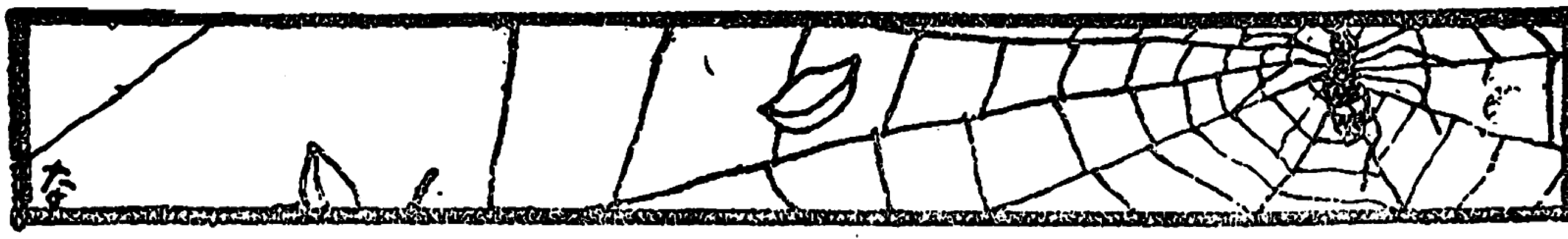
兄一人で一人娘同樣に育てられたおことは極く內氣な氣弱な子で學校の成績もあまり好い方では無かつた。

未だ年弱の十八になつた許であつた、其後おことはおかしい程陽氣な娘に變つてわけもない事に大聲をあげて笑ひこけたりする樣になつた。東京の良人の事を口にしない日は無い程であつたが子に甘い兩親は笑ひ〳〵おことの話相手になつて居た。其を年の若い女中等はクス〳〵笑ひをしながらそつと立ち聞などをして居る事もあつた。

其うちにいつもの樣におことは月のものを見ると同時にすつかり上氣して終つた樣に取亂した事許口走る樣になつた。

長い間娘の體のうちにかくれて居た恐しい或變化を少しも知る事の出來なかつた兩親は娘の心の走つてゆくのを只々身を慄はして眺めるより外はないのだつた。

經水期がすむと娘はまた惡夢からさめた樣におとなしい子に返つた、然かしまた次の月がくるとまた同じ樣に發作が起るのであつた。



一月毎に其發作ははげしくなる樣子も思はれた。花の咲く頃にはもう平常でも少し變つて居る樣になつた——。

一間おいた奥の間に寢かしつけられたおことは藥の利目かかすかな寢息の音をたてゝがつくりとくづれた花の樣に眠つて居るのだつたが、いつか知らぬ間に床をぬけ出して何でもない當前の娘の樣な顏をして從姉の机によりかゝつて居るのであつた。

昨日博士の家に行く時伯母と母とでやう〳〵結んでやつた束髮は、もう夕べのうちにぐづ〳〵にかきむしつて終つて肩のあたり迄も髮の毛がさがつて居た。

ふつくらとした頰には未だ子供氣が失せ切らないで處女々々して愛らしく見えるのだつた。健全に發達し切らない若々しい筋肉の細胞は強い急激な心の變化には堪へ得なかつた。

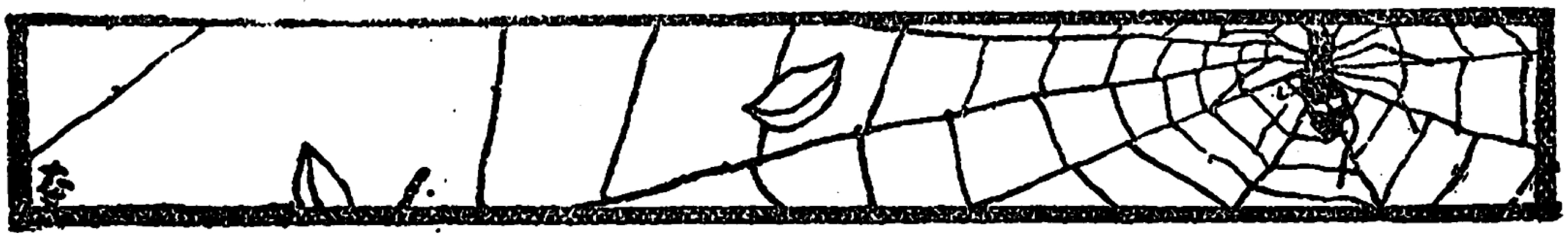
透き通る樣な美しい少女の血汐はさめる事のない惡熱に取りつかれた樣にすつかり濁されて終つた。

黑味がちなおことの目は一層黑く人形の目の樣に見えて居るが活々した表情は影をかくしてじつと動かなくなつた。

おことは手足を動かす度に體中がキリ〳〵と痛んで耐らない、知らぬ間にひどくぶたれたりたゝかれたりでもされた樣に苦しくうづいて居る、そして耳の中では色々な人聲やらうなり聲やらまたオルガンの音に似た細い音樂の音やらがごつたになつてグワン〳〵と鳴りひゞいて居るのでうるさくつて眠る事が出來なかつた。

色々な不思議な幻影が數知れぬ程消えたり現はれたりして居るので少しも落ちつく事も出來なくて絶えず心忙しい思がして居た、其幻影は非常に遠い處に表はれる樣でもあり、また直ぐ目の前の樣でもあつた。

心持が晴々としないのが苦しかつた。



ジッと机によりかゝつて壁の面を見つめて居る、ともう此せま苦しい室の中に居るのが不愉快で耐らなくなつた、壁でも障子でもすつかり取りはらつて終つてひろい〳〵野原の樣な中に晴々として座つて居たいと思つた。

「あら！」

おことはもや〳〵した人影が此うす暗らい室の中や壁や障子に一杯に見え、居る樣に思はれたがフッと見覺えのある人がこつちをむいて居るのに氣がついた。

「まア否だ、私ちつとも知らなかつた！」

こう心の内に思ふと花瓣がかすかに慄える樣に自然とうれしそうな笑がおことの頰に上つて來るのだつた、と頭の痛む事も息苦しい事ももや〳〵した人影も消えて終つた。

「おことちやん！」

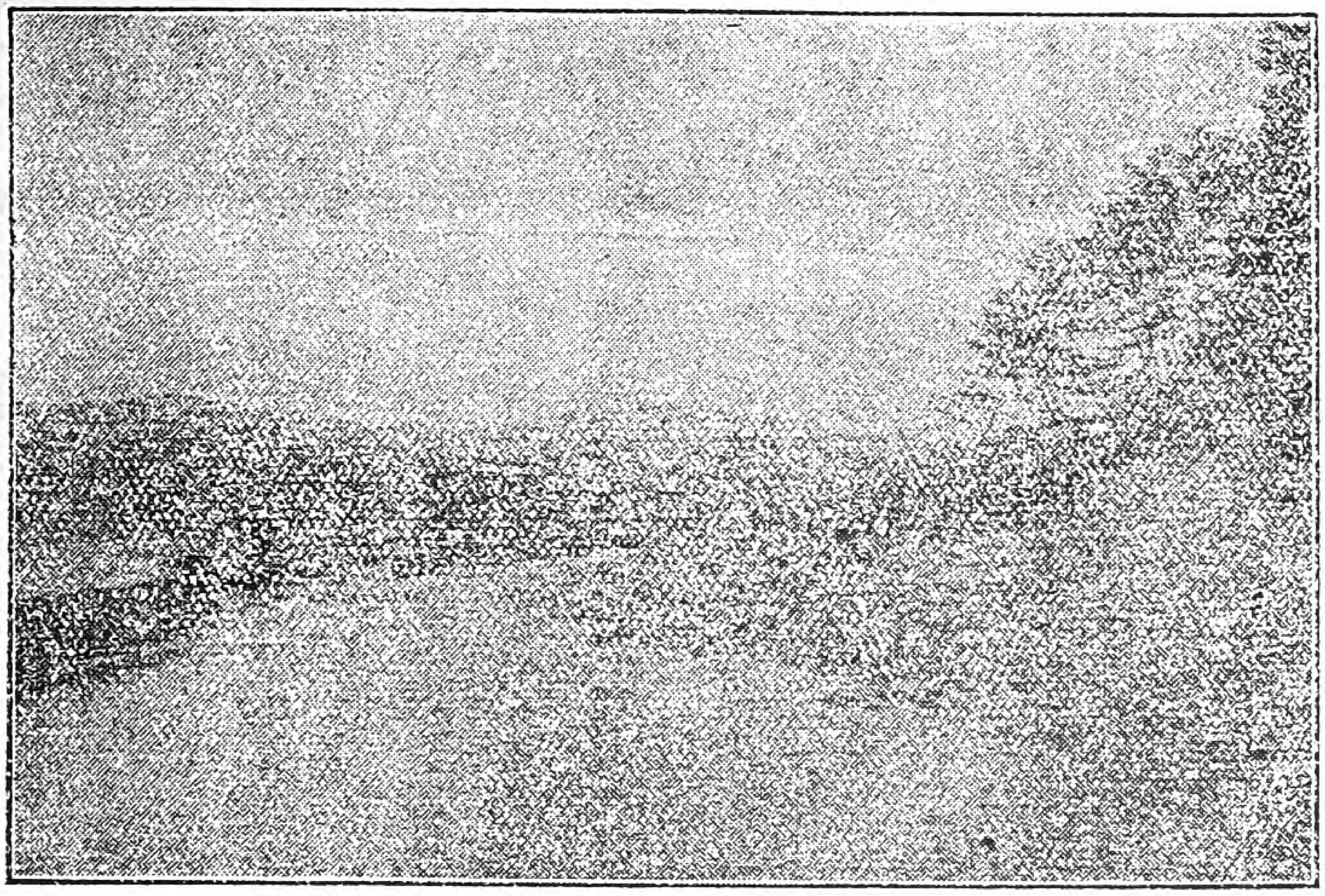
良人は二人限になるとおことを子供の樣にだき上げてやさしくこう呼びかけては強よく接吻をしてくるのだつたが不意におことの耳にはきゝなれた呼聲がきこえた樣に思はれた。おことはまたうれしそうにニッと笑ひかけた。耳元で甘いさゝやきを聞かされてゞも居る樣におことは首をかしげて目を細めてうつとりとして居るのだつたが突然何となく胸をしめられる樣な苦しい氣持になつて來た、何だか良人にしきりに攻められて居る樣な氣持がして耐らなかつた。

「妾は、初めてよ、初めてよ、初めてよ」

おことの口からは急にすべる樣にこう大きな、かん高い叫聲が出たのであつた。

茶の間に居た人等はおことの叫聲をきくとハッとして口をつぐんで終つた。

母親が入つて行つた時にはもうおことは目じりをつり上げて恐しく口惜しそうな顏をして母の顏を睨んで居た——。



芽生

山田邦子

偶然にたてし此家いつか又はたとたほるゝ時ある如し

妻と言はれ母と言はれて此家に起ち居る吾れが姿悲しき

愛せしと唯一言明し給へかし、別れゆくべき淋しき生命に

大佛や觀音や公孫樹や「鎌倉」のさびしき跡をながめてしかな（以下三首かまくらにて）

いつの間に衰へたりし吾が肌の淋しさ見せて悔のかゞやく

斷崖に寄せ打つ浪の淋しさをしみ〴〵見せて松匂ふかな



日向ぼこ心淋しく大空にあがる繒凧を見てありしかな

女主人の怒りし後の淋しさに吸はるゝ如く泣ける婢よ

かゝる日のなほもつゞかば子よ母は淋しき故に死にはつるべし

紫の傘の匂ひてサラ〳〵と降る夜の雪も身もはかなけれ

猪熊など時に峰よりあれ出でゝ深雪ふるらし信濃の冬よ

濁りたる此暗き惱、何事も成るがまゝに吾れをさいなめよかし

濁りはてなやめる腦の暗きかげ地に印し出よ冬の太陽

世の中のあらゆるものは吾が爲にあらざるが故に面白からず

子よ呪へ母が心の底の底に沈める小さき一粒の種

芽生



なつめ

廣江曉子

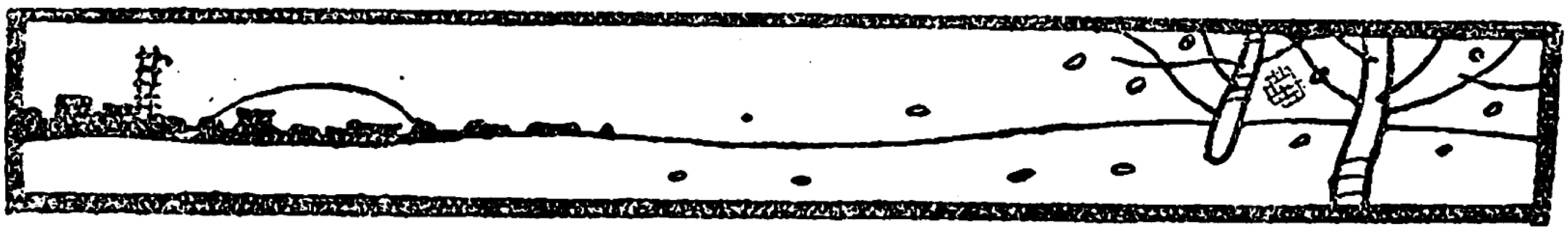
維新前の世は麻の如く亂れて、人々の眠りも夜となく晝となく門を馳せゆく早打ちの勇ましい物音に驚かされ勝なる、母が十二三の頃には、九州路の某藩の倉屋敷に仕へた。

大河端に限りなく立ちつゞく屋敷々々の大門の兩側に袖を廣げたやうに、お長屋の高い出格子がならんで居て、どうかすると長閑な日の晝過ぎ等、その間から圓い鏡がつきいだされて、まだ下駄の音の遠い時分から、歩みくる女の姿を映さうとする。

廣い河端は、人氣の少い屋敷町の晝を風のまゝに砂ぼこり上げて果てなくつゞく丸葉柳の葉を白う染める。

大門を入ると、こゝはまた全く人氣の絶えたかと思ふ程に靜かである、御殿のめぐりは廣場で、それをめぐつて三十戸前の長庫がつゞく、その庫のめぐりには、白楊や椋の老樹がしげつて晝なほ暗い蔭をつくる。その間をぬけて、廣い〳〵お舟入れの岸に出ると、こゝはまた深く沈んだ水の色も凄く、岸につないだ御座船の閉ぢられた中には恐ろしい變化でもひそんで居さうに思はれる、風の日は又岸の並木の高い枝から、ぱさりと音して、小蛇等が落ちてくる。

そのうらさびしい物凄い處も、國表から、産物の荷の着く頃は想像も及ばぬ程のにぎやかな快い處となる。毎日々々、大河を上つて幾十艘の船は船入れへと入つてくる。そうして荷上げの歌も勇



ましく立ちながら長庫に納められるのである、表には羽織袴に一本さした、御用達の出入りしげく、急に廣い屋敷の中は色めき渡るのであつた。

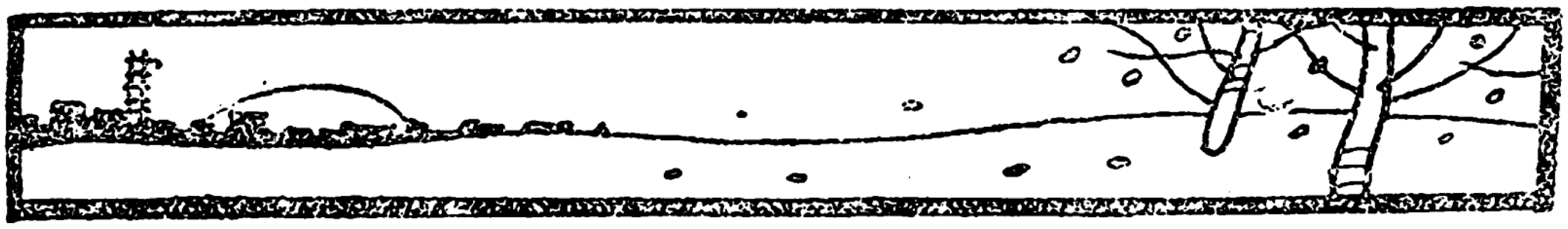
お留守居に愛せられて母はそうした空氣の中に二三年を過した、その間に見聞きした樣々の出來事の中に忘れるも忘られぬ強い記憶をのこしたと語る、この話には私も熱い涙をしぼらずには居られなかつた。

お國のお殿さまの、お江戸詰めになる時である、國表よりは船で御着一泊の上あくる朝早う御出發になつた。常は閉めきりの御殿の雨戸が一枚も殘らず開かれて、千の燈の花と降るやうに思はれたのも只一夜。またひつそりと沈まり返つた寂しさ、その夜ふと見當違ひのこんもりと庭樹の森になつた下蔭の御用席にさびしく燈火の影の動くのを見つけた、滅多に夜は用のない處なのにとあやしみつゝ眺めやる後より。

「お召しになります」と聲をかけたのは淸と云ふ女中であつた。母は淸と共に、奥へ急ぎながらもふり返つて、何故あんな處に燈がともつて居るのだらうと尋ねた。すると淸は聲をひそめて、其處には今度のお供の中で罪を犯した若い大身の子息が入れられて居るのだと話した。

母の呼れた用は思ひもよらぬ大役であつた、今日から御用席に押しこめられた罪人の許に大切に仕へよとの事であつた。そしてもしどのやうに賴まれようとも、小刀はおろかたとへ錐一本でも渡してはならぬ、と云ひ渡された。それはもう初秋の單衣の袖のうら寒い夕暮であつた、母は恐る恐る夕飯のお給仕にと行つた。

八疊の間の敷居際から縁側にかけて見るさへ胸の塞がるやうな荒格子をめぐらして、一間へだて



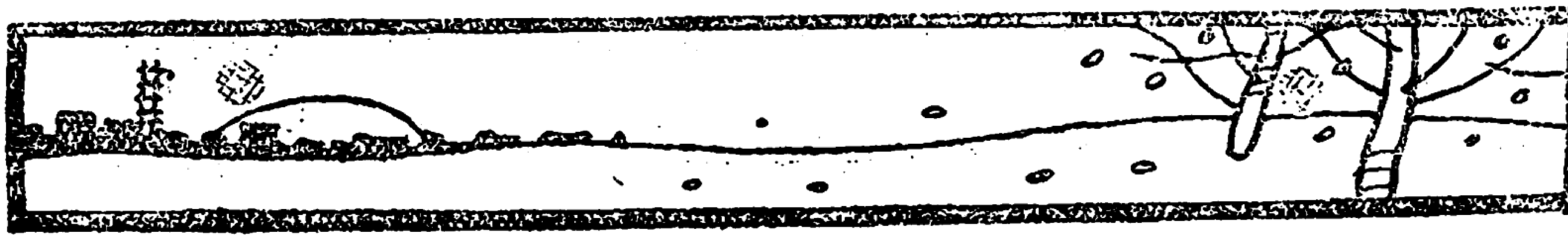
た四疊半には、二三人の仲仕たちが詰めて居た。こんな恐ろしい格子の中に押しこめておかねばならぬ罪人は、どんな人かと胸も慄へてしばしためらふた末、次の襖を明けた母はまづ驚ろかされた、意外にも格子の中なる人は廿歳にたらぬ眉目淸秀の若侍であつた。荒格子の外から食事を進めながら、どうしてこんな人が惡い事をしたのだらうかと母はつく〴〵不思議に思つた。退がる時わづかに御苦勞と云はれた聲はおだやかに澄んで居た。

一度よりは二度、一日よりは二日と馴れるに從つて幾分か心安う、子供の事とて、むかふでも遠慮なう物を云はれるやうになつた。

紫がかつたお納戸の紋付に何時も織物の袴をはいて一絲みださず机にむかうて書見に餘念なかつた。書物は山程積んであつた、その中に何時の間にやら名を呼ばれるやうになつて、お給仕の度毎に手づから、朱塗りの箱のお菓子を紙に分けて呉れるのであつた。荒格子こそめぐらしてあれ、あつかひは非常に丁寧で、食物は申すに及ばず、一切の身邊の物は何不自由なくとゝのへてあつた。

初は（母の名は初とよんだ）こうして朝に夕にこの美はしい氣高い人に仕へた。折々、次の間から格子の外に呼びよせて、罪のない事を云つて笑はせたり、年はいくつか、父母はあるか、お前は何が好きか等と尋ねられるのであつた。逃げる憂ひのない囚人を見張りして居る退屈さに、そろそろと若い仲仕連は廓の女の話し等をはじめては少し聲高になるのをも氣がつかぬ。その中には指相撲はまだよいとして足相撲がはじまる、果てはそれにも飽きて、庭に下りて棒押し等をやりだすのであつた。

何事もつれ〴〵の慰みとて美しい人は片頰にぢつと笑みをふくむで、その物音を聞いて居た。



或日の午後、近ごろ親しくなつて、友だちのやうな氣のする、その人の餘念なき書見にふけつて見向きもせぬつまらなさに、初は一人庭にで丶邊りを眺めた、と昨夕の嵐に高い梢のなつめが落ちて、しつとりとした庭の苔の上に美くしくひろがつて居る。初はそれを一つ〳〵ひろひはじめた。左の袂の大分ふくらんだ時分、思ひがけない頭の上から、私にもおくれと優しい聲がした。驚いて顏を上げると横手の高い窓から、何時の間にやら書見に餘念ない筈の人が、笑つてのぞいて居る。ふと見上げた初はその小さい窓にも太い格子の打つてあるのに氣がついた、袂を抱へてはせもどつた母は、袂を格子の中へ入れて、あるだけをそこに打あけた。

笑ひながら、お菓子と代へようぢやないかとその人は云つた、そしてお好きでございますかと尋ねると、笑つたま丶うなづいて見せて食べかけた。

「また何ぼでも取つてあげますわ、」と云ふと

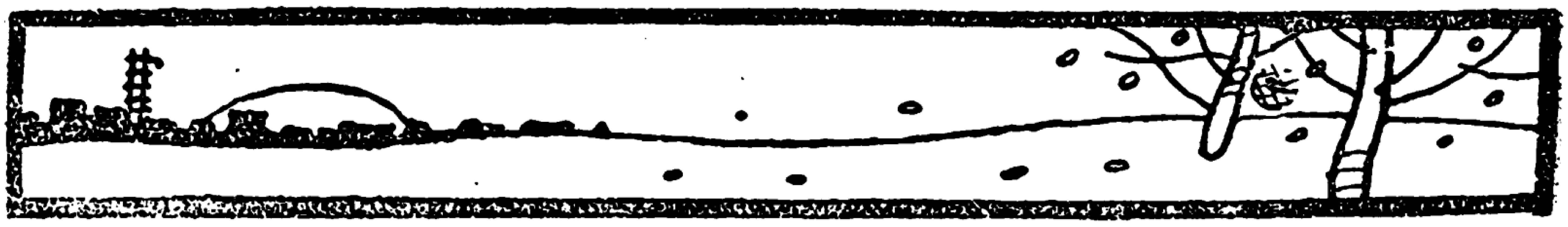
「手がとゞくまい、」と云ふ。

「竹を持つてきたらとゞきます、」と聞いて聲を立て丶笑はれた。

それからは毎日机の上に二つや三つの棗のない時はなかつた、ある時は袴の膝にまろばして、白い指先きで弄びながら、いつものやうに格子の外に、く丶り髮の初をすわらせて、お前のお父様はどんな人かと尋ねた。家へ歸りたくはないかと云はれて、初はあなたこそ、お歸りになりたうございませうと、心から云つて顏を見た。

「い丶や」とかぶりをふつて「私は歸りたうない」と云ふ

「ではお江戸の方へ行きたうございませう」と云つても矢張りかぶりをふつて



「江戸へも行きたうない、私はもつと〳〵遠い〳〵處へ行きたかつたのぢや」と云つて淋しい笑みを洩らした、お江戸よりまだ遠い處があるのか知らと思ひながら、その心をはかりかねてぢつとその顏を見つめて居た。

「けれど近い中には何處かへ歸るよ」と今度は投げ遣るやうに笑つた。

「お國へではございませんか」と尋ねる。

「あゝ」と答へて、子供らしく、遠い〳〵處と云ふ、その時ふと秀でた眉のあたりに何となうさびしい影のひそんで居るのを、子供の眼にも見とめたさうである。それから二三日してからの夕方、何時ものやうにお夕飯のお膳を臺所へ取りに行つて歸ると、その人は入浴中であつて、同じ年頃な仲仕の息子が背を流して居る。

「今日は十分みがいてくれ、少しでもあかの殘らぬやうに」と、云はれる。

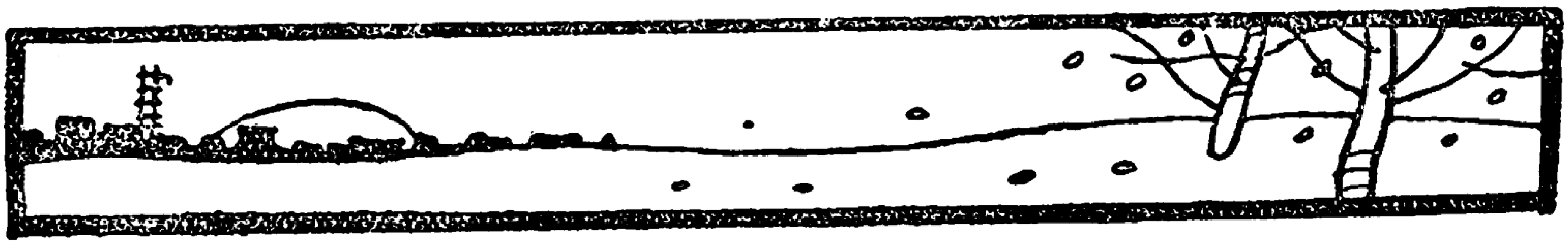
「かしこまりました」後から答へながら初の顏を見て。

「御飯のお迎ひですな」と笑ふ、と

「おゝ今日は御馳走だらう」と、顏は見ずにその人は俯むいたまゝ云ふ。初めて氣がついた、ほんに今日は何時もの倍も御馳走である。

その中に湯あみを終つて着物をきる、今日は黒の着付になられた、やがて仲仕は櫛を持つて後に立つた。水のたれるやうな男わげを惜しげもなくほどいて、丁寧に梳た後、さて何時ものやうに結ばふとすると。

「今日は十分強くしばつて後へ下げておけ」と、云はれる。



「妙な事をおつしやいます、やつぱり當り前に結ふた方がよろしうございませう」、と云つたが、「いや下げておけ」と云ひはつて聞かれない、仕方なしに云はるゝまゝにしておいて仲仕は退つた。

湯殿を出た着流しの姿は、水ぎわ立つて美しく、常よりは背も一そう高ふ見えた。

「よくなつめをとつてくれたが、私はもう歸るよ」と食事しながら話された。

「まあ何時でございます」と驚くのを、可愛げに見て「明日の朝早くきて見てでらん、きつともう居ないよ」

「お國へでございますか」

「あゝお國へ、遠い〳〵お國へ」と云つてさびしく笑つた。食事がすむと何時になく、

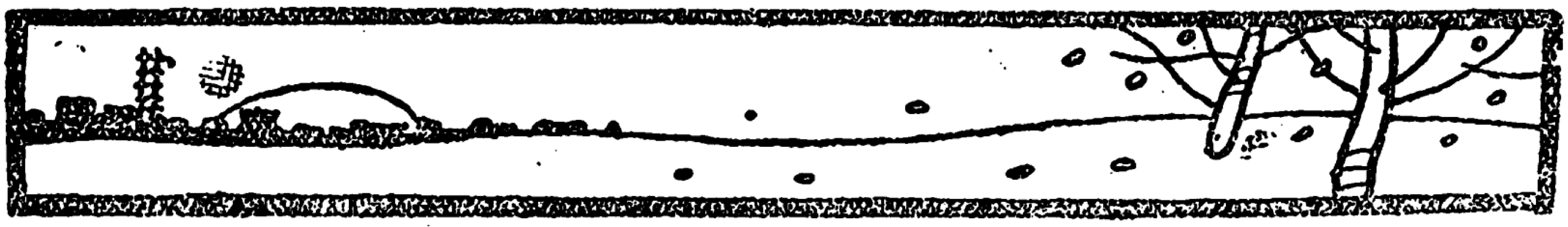
「もう退つて宜しい」と云ふ「さよならできげんよう」とは云つたが何となく名殘り惜しさに次の間に敷居を出しなにふり向くと、むかふもぢつと見て居られた。

そして思ひだしたやうに呼びとめて、お菓子包みを格子の間からさしだして手より手にわたされた。

まてとやそのあくる朝、人はすでに居なかつた。

胸も塞がる格子の中は空しくとり片づけられて、小鳥は籠をぬけて何處へ飛び去つたのだらう。只不思議な事には眞中の疊が一疊だけかへられてあつた、母は幼な心にもおぼろげながらも、ある恐ろしい事を意識せずには居られなかつた。

その朝、屋敷中は何となうしめやかに沈みわたつて、ひそ〳〵と一人二人程づゝ何事かを悲しげにさゝやき合うて居た、どうもあの若い囚人の事らしい。



母は、とう／＼番人の一人であつた仲仕をとらへて、やうやく昨夕の出來事を聞く事ができた。かの人は御家老の一人息子として殿の御おぼえもめでたかつた。まだ若年の身ながらに文武兩道に達して風雅心も深かつた。

それがどうした事やら、早くから聞くも忌はしい異國の土にあこがれて、殿のおん前に思ひもよらぬ事を願出でた事もあつたとやら、元より御きゝ入れのありさうな筈もなく、そのまゝになつて居られたが、今度のお供に加はつて、兵庫の宿まで着いた時、ふと姿をかくしてしまつた。しかし遂々たづねいだされて、この倉屋敷に押しこめられたのである。

其處に隱れて異國の船のくるのを待つつもりであつたとも云ひ、長崎へはしる心であつたらうと云ひ、人々は樣々に噂した。

殿の御心にそむくのみか、お供の途中から逃げた罪はかろからず、遂に昨夕、切腹を仰せつけられたのであつた、惡びれし樣もなく、白さやの九寸五分ぬく手も靜に腹かき切た美事さ、そればかりか、泣く／＼介錯の役をつとめた家中の某氏は、中々の手利で決して後れをとるやうな人ではなかつたけれど餘り氣高く雄々しい姿に心みだれてか一太刀を打ち損じたと同時に、刄の下から「しつかり」とはげまされた凜としたその聲のひゞきは隣室に控へた人々の肝を寒からしめたさうである。その夜の月は美しかつた、今も母はなほその面影を忘れ得ぬと云ふ。

そして何故かその姿も顏も祖父に何處やら似通つて居たとやら、祖父を思へばその人を思ひだしその人の事を思へば祖父の若き日をしのぶと云ふ、語り聞かさるゝ程に私の心にも、かなしいなつかしい面影となつて宿るやうになつた。

一年ぶり

前島優梨子

とう〳〵また花が咲く樣になつて終ひましたネ、濟まないと思ひ〳〵しながら御無沙汰して居る間に――、たまには思ひ出して待つて居て下さるんですか。

四五日前、一年振りで懷しい實家へ歸りました、…の爲に、どうぞ其事は私に深く思はせないで下さいまし、よろこびといふよりも私には酷く不安で堪りませんから。生り年だつた杏の木が、藥玉の樣に美しい桃色の花を咲かせて居た去年の其嫁く日、品位でないからと云はれて置いて行つた半襟掛けの銘仙に着變へて、あわたゞしさうにはしやぐ小僧達の聲や、聞き馴れた十呂盤の音が氣持ち好く聞える中帳場の次の間に、凝と氣を落着けて坐つて居ますと、もう總てのものが懷しく思はれて、斯うした空氣の中に誰に探まれもせずふつくりと生ひ立つた去年までの自分の姿がありありと思ひ出されて、一年過ぎた今日の心持ちがあまりに世帶じみた、そして世間馴れたのが、涙ぐまれる程情けない樣な、けれどもまた斯う何かに勝ち得た樣な云はれない氣がします。

花柳の街に近い、何時も春の樣な氣分の漂よつて居る處で、賑やかにそして割合に派手に生活して居た私には、町はづれの靜かな小じんまりした新生活はあまりに淋しうございました。あまりに空氣の色がかけ離れて居ました。實際嫁く時の私の心持ちはそれは可笑しい程單純なものでした。半襟のかゝつた幾枚かの着物や、柄の好いお召の前掛けを置いて嫁かなければならないのは悲しか

つたけれど、小さいながらも一軒の家計が自分の手で思ふ樣に出來るといふ事が、奥向きの入費さへ一月どの位ゐ入るか知らない私には、只もう嬉しかつたのです。笑つて下さい。嫁くもう二月も三月も前から女學校でしたあの應用のまかなひ家計簿記を引張り出しては、好い加減な豫算などを作つて見たりしてそつと莞爾して居たものでした。そしてぢきに歸れるお客にでも行く樣な氣ばかりして居ました。

けれど二十里離れた××市の新らしい家の生活は、只淋しさと實家戀しさに泣かされるばかりでした、生れて二十日と母親の許を離れた事のない世間見ずの私には、知らぬ土地に、しかも一度逢つた事さへもない人に侍いて居るのがどんなに淋しく辛かつたか知れませんでした。もう家計の自由になる事の喜ばしさなどは陰もなく消えて終ひました。

新家庭は停車場から一里も離れた町の一番端れで、××川といふ奇麗な大きな川端でした。可成り廣い庭の前はもうすぐずうつと廣い田圃で、向ふの方に林檎畑らしいものが一所ばかりに見えて居ました。

新らしい家といふのが物珍らしくて嬉しさうにそわ／＼して居たのは、まだ實家からの客や、手傳ひの人達がごた／＼して居て賑やかな間だけでした。

「靜かで好いだらう？淋しい！」と夕方電燈がついてからやう／＼、疲れた樣な顏をして役所から歸つて來た良人に、少しは馴れた調子で斯う聞かれる樣になつた頃は、もうさう云はれるとすぐ胸が一杯になつて涙が止め度なくこみ上げる程待つ間の一日が淋しくて辛うございました。歸つたからつてさう嬉しいとは思ひませんでしたけれど。好い加減耳の遠い婆やに給仕をさせながら、良人

は別に話もせずに默つて毎朝朝飯を濟ませます、私も何だか一緒に食べるのが極りが惡い樣で忙がしく片附けて朝茶を出しますと、煙草も吸はず手持ち無沙汰さうにして二三杯茶を飲むと、きまつた樣に簞笥の上の小さな置時計を見ては出て行きました。

「行つて被入いまし」とよそ〳〵しく謹しやかに玄關に手をついて良人を見送りますと、急に獨り取り殘された樣な氣がして、凝と耐へてももう睫毛には零れる程淚がにじんで居ました。

言葉の違つた、それに可成り高い聲を出さなければ聞えない婆やなどは、少しも私の氣をまぎらせては呉れませんでした。

大きな八重櫻の木が、蠟を塗つた樣な奇麗な可愛い若葉と澤山な蕾をつけて、一杯に枝を廣げて居る中庭の緣に茫然立つては、考へ〳〵して私は意氣地なくもそつとすゝり泣きして居ました。裏の川の音が騷々しく氣になつて、何かで止めて終ひたい樣な氣がしました。

「姉さん、お湯なの？」などゝ私が湯道具を持つて橫の路次口から出るのを見附けて、よく家へ使ひに來る顏馴染のお雛妓達が、馴れ〳〵しく言葉をかけた、其可愛い聲の聞かれないのも物たりない一つでした。馴染客に片端から綽名を附けて置く義太夫の上手い梅三好の千代香姐さんや、お琴でいつも一緒になるまるで婚の樣な溫順しい春廼家の澄ちやんや、それから

「さ、其處へちやんとお坐りなさいよ。妾が新內を敎へて上げるから、

……其方も共にと云ひたいが、愛し其方を手にかけてどうなるものぞ……

なんて、十九にもなる私をすつかり小供あつかひにして、それは振ひつきたい樣な好い聲で新內の明烏などをかたつたり、壺坂や辨慶上使のさわりの處などをよくかたり出しては、急にふいと何

な

か思ひ出した樣に止めて

「あら御免なさい、妾や柳家だと思つた」なんて呑氣な事を云つて居た私の大好な柳家の梅次さんなどが

「今日は、お遊龜さん又來てよ」とはしやいだ聲で路次口から庭の方へ廻つてよく遊びに來た藝妓達の、いつまで待つても來る筈のないのもどんなに私には淋しかつたか知れませんでした。しめやかな雨の夜に相應しい樣な好い音締のが戀しう御ざいました。

上調子な花柳の街にも、どこか美しい詩を想はせる樣な、しつとりした好い氣分が漂よつて居るものです、私はそれが限りなく懷しく思はれてなりませんでした。けれど私は決してそんな心持ちを良人には見せませんでした、何となく自分といふものを見透される樣で嫌な氣がしましたもの。

どうしても氣づかはしい他家の人の樣に思はれてならなかつた良人には、馴れ〱しく親しむ事は出來ないで、主の樣に隔てのある謹ましい心持ちで仕へて居ました。

堅苦しい程眞面目な性質らしい、そしてそれに故應しい無口な良人は、なか〱優しい言葉などかけては呉れませんでした。ましてくだけた冗談などは云ひさうにもしないのが、私はどんなにいら〱する程物たりなく思つて居ましたでせう。

お銚子の一本附いた夕飯を、なるたけ離れて所在なさゝうに困つた樣な風をして小さく坐つて居る私に酌をさせながら、それでも少しは打ちとけた樣にたま〱何か云つては、そんなに甘味しくもなさゝうな顏をして幾杯か盃を重ねると

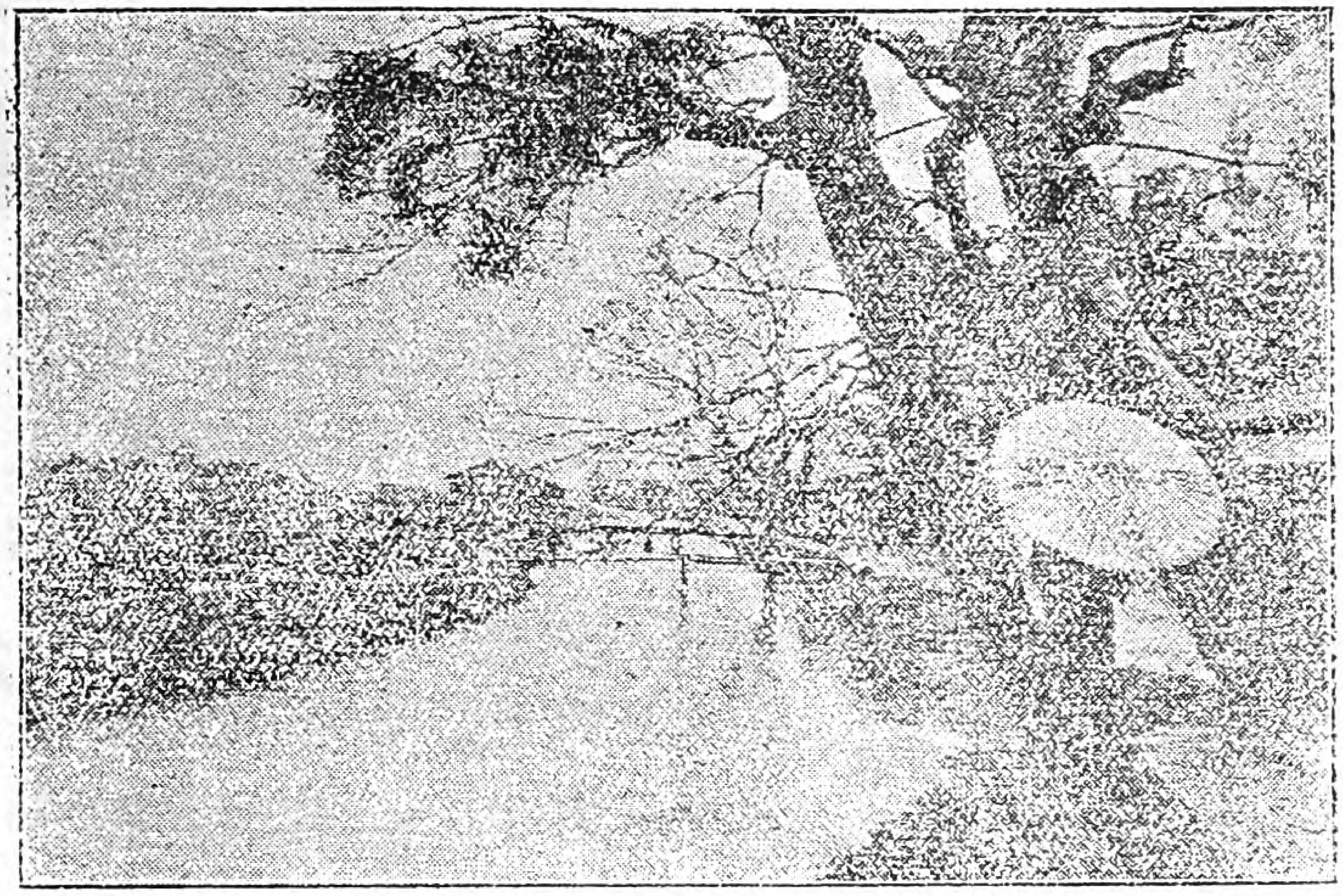
「さア御飯にしよう、お前もおあがり」と毎晩きまつた樣に斯う云つて

な

「婆や汁が少し鹽辛いネ」なんて云つても、知らん顏して居る聽神經のにぶくなつた婆やに、別にまた云ひ返さうともしないで、一寸笑つたまゝ、默つて給仕をさせながら濟ませると、すぐ今朝の新聞の見殘りに目を通し始めて、私が傍に見倦きた雜誌の口繪などを、またぱら〳〵と見返したりして居ても、打ち解けた世間話などは仕樣とも思はない樣な風でした。だから私の方からも管らない事を云つては惡いか知らと氣を兼ねて、どうしても話かけ得ませんでした。

新聞を讀み終るとすぐまた何か知ら專門の書に讀みふけるのでした。それでも「茶を一杯呉れないか」なんて一時間も二時間もしてから思ひ出した樣に云ふ處を見ると、傍に私の居る事だけは知つて居る樣でした。

澤山もない勝手の洗ひ物を濟せて來た婆やは、毎晩目がとぼ〳〵するからと云つては雜巾さへさし得ないで、薄い菊石のある艷もなくゝすんだ顏を、惜げもなく明るい電燈に照させて目をつぶつては、其内にきまつた樣に居眠りを始めるのでした。そんな時私はいつもお坐附きらしい三味の音が、瓦斯だけ青い色に見える梅ヶ枝亭の二階から、聞えたり聞えなかつたりする實家の其時分を思つては、宵から色づくお茶屋からの電話で、ベルがひつきりなしになる店の忙がしさなどを思ひながら、まださう汚れもしない襦袢の半襟を掛け變へたり、赤い襷の紐を絎けたりして居ました。さうして居る間に時計はゆるく八時九時と鳴つて行きました。其間たえず裏の川の水音は、丁度雨の降つて居る樣に聞えて居ました。あの川の音が止まつて、そしてそれが身ぶるひする樣な絃の好い新內流しに變つて呉れたら、なんてこんな他愛もない詰らない事を考へた事もありました。



よく泣く少女

原田琴子

君王の少女といふもあぢきなしわが品こそはさだまらであれ

七日ほど泣きくづをれてあらんとす二人ばかりもわれ抱きに來よ

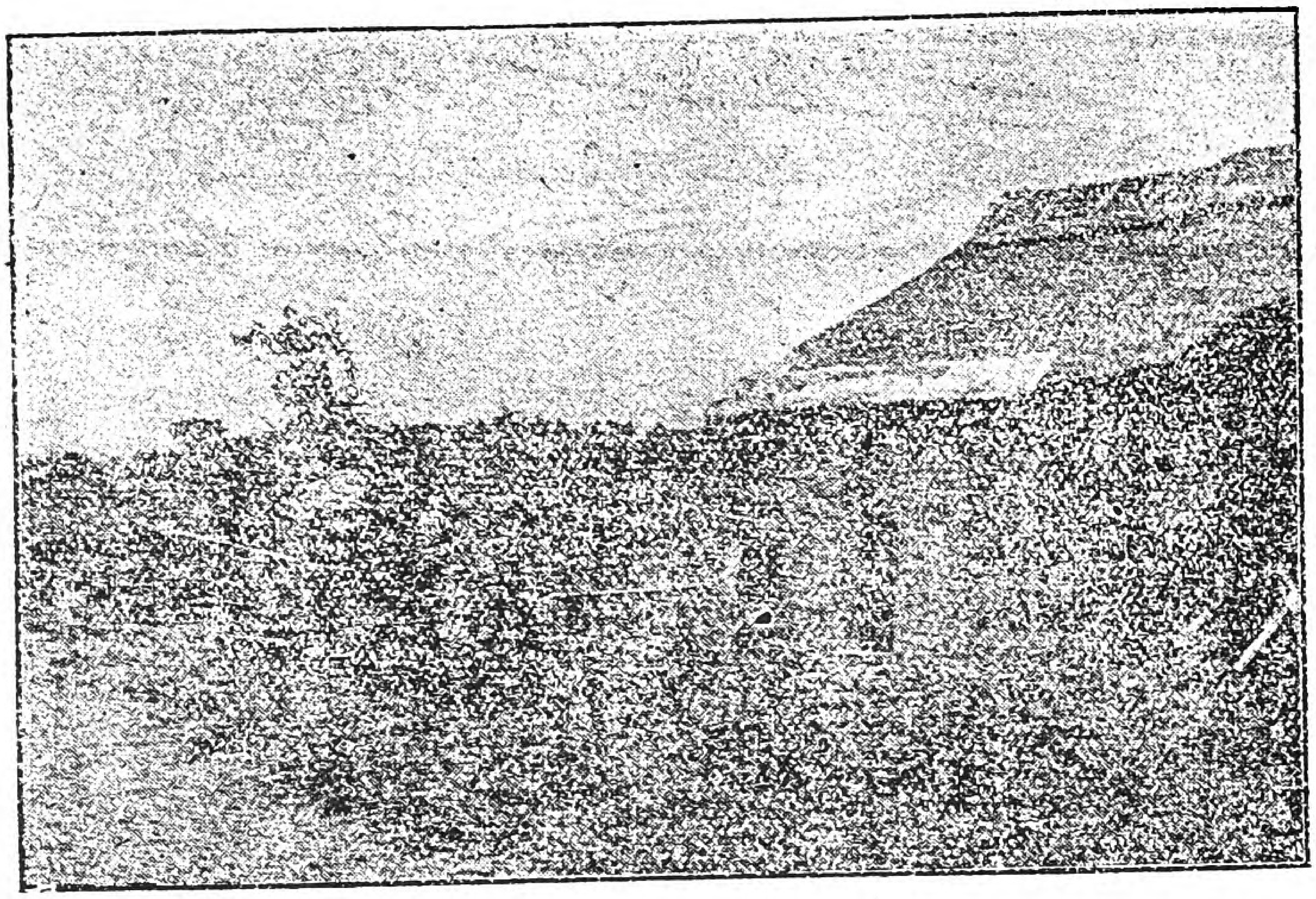
泣くことのいともたやすき少女をばえりて君さへ泣き給ふかな

來る子はみな青ざめてかへりけりまづ死なましと我の迫れば

行く時に手をとる君ぞ泣く時に抱く君ぞと許したるかな

ゆるし給へ戀しき君といふことも好める衣を着るほどにしぬ

おろかにも袖をとらへて何かいふ長き袖なり斷ちて與へん



よく泣く少女

とこしへに二人三人はわすれじなわがよき姿うつしたる君

わが戀も時に冷しあぢきなし謎の君ゆゑ人の君ゆゑ

天地の變事とさても思はずや少女の影の淋しき夕

むづかしき人よといひてぬれし頬をくちづけられて心狂ひぬ

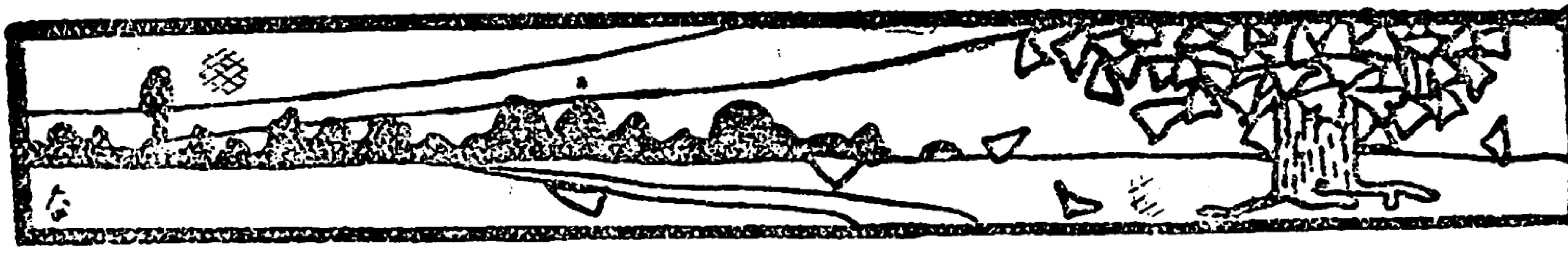
蒼白き戀人の頬をくちづけて氣を失ひし人にやはあらぬ

なほしばし門の柳に身を投げてわが泣くさまを見てゆき給へ

戸をたてゝ椅子にかへりてわれも泣く松原あたり君が泣くらん

大方の人と並びてあるものか夢より知らぬこの少女さへ

いざ舞はんいざ歌はんと起てる時あはれわが世の花のとぼしさ



試み

加藤筆子

善く藝人なぞはすべて、男を弱く觀て居るらしい。

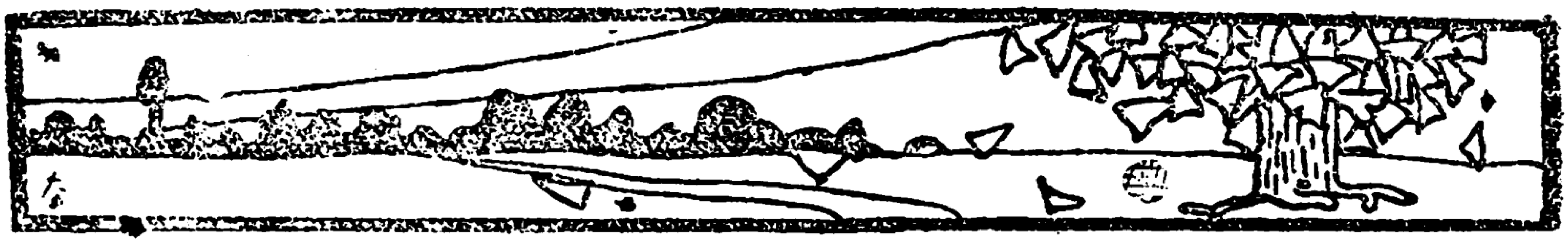
綾壽は其贔負客が悉皆自分に、屈服してるといふ自信があつた。それで濱田や松木といふ男が酷工面をして迄、自分の鼻息を伺つて居るといふのも又一つの誇であつた處へ、同じ贔負の林が其れを攻擊する激烈な手紙を送つた、其後の話で——

綾壽が二洲亭を了つて、廣小路の角迄來ると、矢張り例の通り林が待つて居た。いろはの軒燈の光で顏を見合せると、綾壽は鳥渡氣おくれがした樣にたじろぐと、男は何も云はずさつさと、柳原の方へ歩き出した。

綾壽は男の長い影法師を追つて行つたが、偶と此まゝ一人で淺草橋の方へ、反れて遣らうかと考へた、けれどそれは思つたばかりで、矢張り駒下駄の音は低く、林の雪駄と同じ道を踏んだ。

街はしづかに眠つて居る。薄灰色の靄が下りて、今迄濁つた寄席の空氣を吸つて居た、二人の頭は茫として夢の樣な氣分の中に、大戸を閉した商店の軒燈の火や片側の倉庫の赤煉瓦が、浮き出した樣に見える。

綾壽は可加減に男が、何とか物を言ひ相なものだと思つた、で鳥渡ショールをたくし上げながら顏色を讀むと、林は屹と口を結んだ儘、分別らしく寄せた眉の邊には中折帽の濃い影を造つて居た男の心持が奈何も解らなかつた。默つてゝは詰らないと思つたけれど、自分から今になつて口を



切るのは何だか、不權式の樣に感じられるので、暫らく男の衣摺れの音を聞いて居た。
まだ何處か底寒い風が、ひた〳〵と吹いて居る、電車の轢る音ばかりが、けたゝましく眠つた街を震動させる。
今夜の語り物は、男の好きな湊町であつた。例なら何とかかとか、批評をするのだのに……と綾壽は急に苛々して來て、
「何だつて那麼に默つてるの、ちつとも口を聞かないのね」
と云つた、すると、ぶつきら棒に
「當前さ、江戸ッ子は矢鱈に無駄口なんか聞くものかい」
綾壽は茶化す樣に、眞白な齒並のいゝ齒でにやりと笑つたが、直ぐにお腹の中で、私はこの人から怒られる理由はないと強く思つた。
「へえ……江戸ッ子は無駄口は聞かないんですか」
手紙の意味は難かしい字ばかりで、悉皆と解り兼ねたけれど、詰り藝人として贔負といふものは必要でもあらうけれど、濱田や松木の樣な憐むべき境遇に立たせ、飜弄して居ると云ふのは、女性として餘り冷酷ではないか、猶彼等を籠絡して居るといふ事は、天賦の女性の柔しさを缺いて居るではないか……それほどにして生きねばならないか、お前の藝術は那麼價値のないものでは無い……と這麼意味が繰り返されてあつた。
今では三味線の方にばかり廻つてる、伯母に是を見せたら、林さんも隨分お坊ッちやんだね、と綾壽の顏を見て、えへゝと意味ありげに笑つた。綾壽は未通女の樣にポッとなつたが、林さんも矢



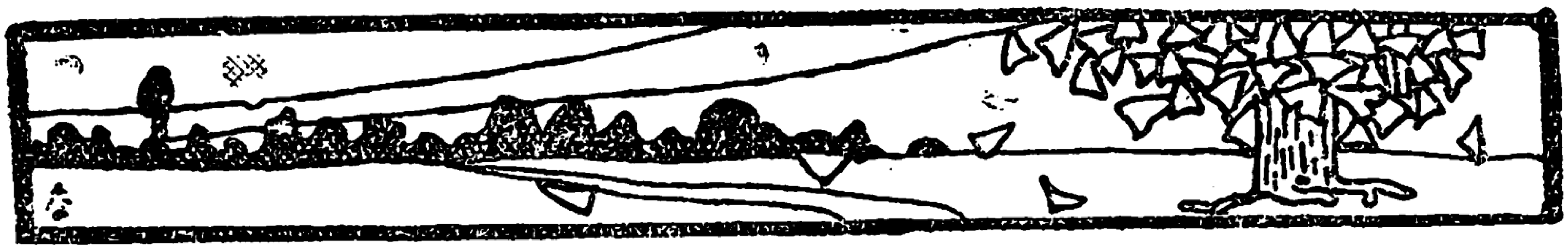
張り平のお客かと思ふと、詰らない樣な氣もしたが、一方にはまたそれなら組し安いと思ふと、例の誇がパッと光つて、以心傳心伯母の顏を見て高慢つた樣に笑つた。

實をいふと林は妙に氣の置ける人であつた。今夜高座から、來て居るのを見ると、綾壽は殊更にお夏の言葉を託つけて男の方を見た、而してある意味を以つて一緒に歸りませうと言傳てたが、さて相變らず生眞面目な男の態度を見ると、綾壽は鳥渡戸まどひをした形で、男の思わくが計りかねた。

煉瓦の建物と建物の間から、堀割の水が暗色に光る。南京蕎麥の唐笛の音が、一種の哀調を帶びて聞える。濱田や松木なんぞを有難がつてると、男に思はれると、如何にも自尊心を疵つけられた樣で口惜しい、さつぱりと隔離して了つたとて、何で自分が痛傷を感じるものか……綾壽は男に向つて、から口を切らうとしたが、いや待て……あの人達と別れて了ひましやう、と斷言するのは、何だか林に服從して了つた形勢となるので、それもいま〳〵しい。自分は強い女だ！と胸に叫んだ

それでも二人は、放ればなれにもならないで、肩を並べて歩いた。綾壽の袖と男の二重廻しの袖と思ひ出した樣にふれる。男は空々しいほど澄まして居た。あの手紙に就て何か云ひ出すかしら……と冒險的に其返答を考へて見たが、でも默つて居るので、綾壽の頭はいつのまにか倦怠くなつて彼は見得もなく生欠伸をした。少しばかり涙が染んだ眼で四邊を見ると、他に男女の影が柳原橋の袂へ、朧ろに曳いた。

其處には柳の枝が、空に打つ樣に動搖て居る、男の方は影ではつきりしなかつたが、女は櫛卷きにして、蒼みがゝつた顏の色であつた。二子か何かの半纏の袖を掻き合せてる具合が、妙に哀れつ



ぽく綾壽の眼に映つたから、

「ちよいと‥‥」

と無意識に林を呼んで、

「何でせう‥‥あの男女達は」

「さうさ‥‥」

「さうさ、なんて隨分思遣りが無いわね、いづれ只の中ぢやないんでせう‥‥」

「さうかも知れない、然し馬鹿だね、今時分這麼處にうろついて‥‥」

「乙ぢや無くつて、那麼苦勞なら私はして見たい」

「可いだらう、それも‥‥」

「あら‥‥貴方も贊成ですか」

綾壽はちらりと男の顏を見る。

眞實な戀が急になつかしくなり出した、お夏淸十郎、お染久松――濃艷な情調は、自ら語る時でも、好いと思ふ‥‥。

林は突然マッチを摺つて卷煙草を燻らし始めた。

點の樣な煙草の火を見詰めながら、綾壽はまた、若し深い熱烈な戀に耽つたなら、淨瑠璃見たいに心中し了つても介意やしないけれど‥‥空虛な胸の一廓には、ほのかな燈がさしたほどな、溫かさを覺えた。而して再びあともどりをして、林の心持ちが知りたくなつた。

「今夜私の家の傍まで送つて下さいな」



和泉橋近くへ來ると綾壽は、かう云つた。

「あゝ、送らう……」

「さう……ぢやあね、まはり道だから風邪を引かない樣にね……」

と串戯らしい口調で、自分のショールを男の二重廻しの上へかけて笑つた。林はじつと、大柄な格子のミユゼを見て居たが、默つて笑ひながら、前よりはやゝ緩りと歩き出した。

電車には赤い燈が輝きだした。さうして層急調にレールの上を走つてゆく、須田町から萬世橋の廣告燈が、非常に明るくきら〱と映る、所々夜明しの喰べもの見世が、食慾をうながす樣に白い湯氣をたてゝ居る。もうぢき櫻が咲く時分だけれど、更けると矢張り四邊の氣分を沈滯して了ふのであつた。

「何だね……」

聲が低かつたので、綾壽は急いで傍へ寄ると、

「毎晩二人で斯うやつて、歩るいてるのが世間に知れたら、攻擊もされるだらうし……隨分お互に蒼蠅いことばかりが持上るだらうね……新聞にも書れるし……」

「介意やしないわ」

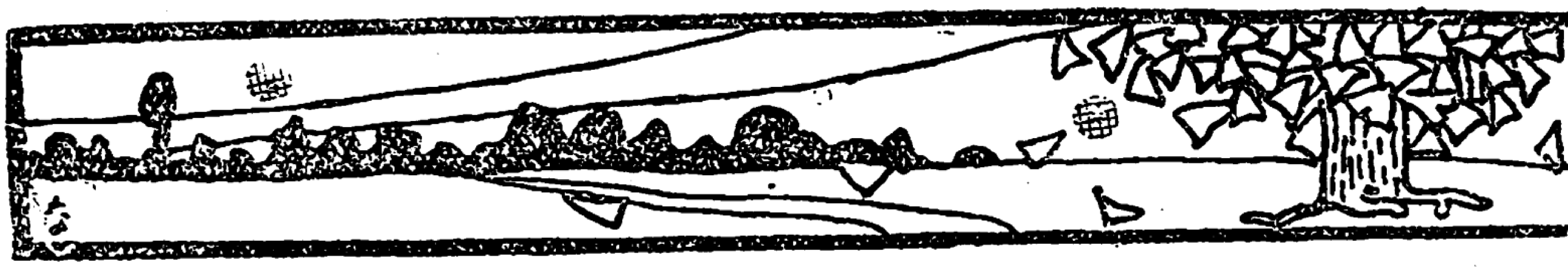
綾壽は改めて男を注視しながら、

「好いた人となら、私はちつとも困りやしなくつてよ、本當に」

「さうかね……」

「えゝ全く可いぢやありませんか、ねえ」

と力を入れると、



「可いだらう」

と男は傍觀者の樣に、はぐらかす、綾壽は厭な顏をして口を噤むと、冷々とした夜風が俄に其頭を冷靜ならしめた。

冷たい萬世橋の御影石を踏む足音が、荒く響いた、佐久間町河岸の物揚げ場もひつそりとして、石垣をざぶりと川波が洗ふ。

戰捷紀念の櫻樹の影が、アーク燈を浴びて鮮明に映し出される。

「もうぢき陽氣になるわね」

と、つとめて話題を轉じて見たが、内心はある物足りなさと、淡い不愉快を以つて滿されて居た二人はまた、以前の通り無言で電車道から大時計について曲る。

林の無口である事は、善く知つてるけれど、此際何か男の口より充實した言葉が聞きたかつた。

綾壽はふつと自分の誇を打破されはしないかと、氣が付いた。

惡魔がキリストを試みて、失敗したが、綾壽も何だかあべこべに男から試みられたのぢやあるまいか、詰るところ、もとの通り男の心持が解し兼ねて來た。今夜自分が考へてた事は、要するに徒勞に歸したのかと疑ひ出した。

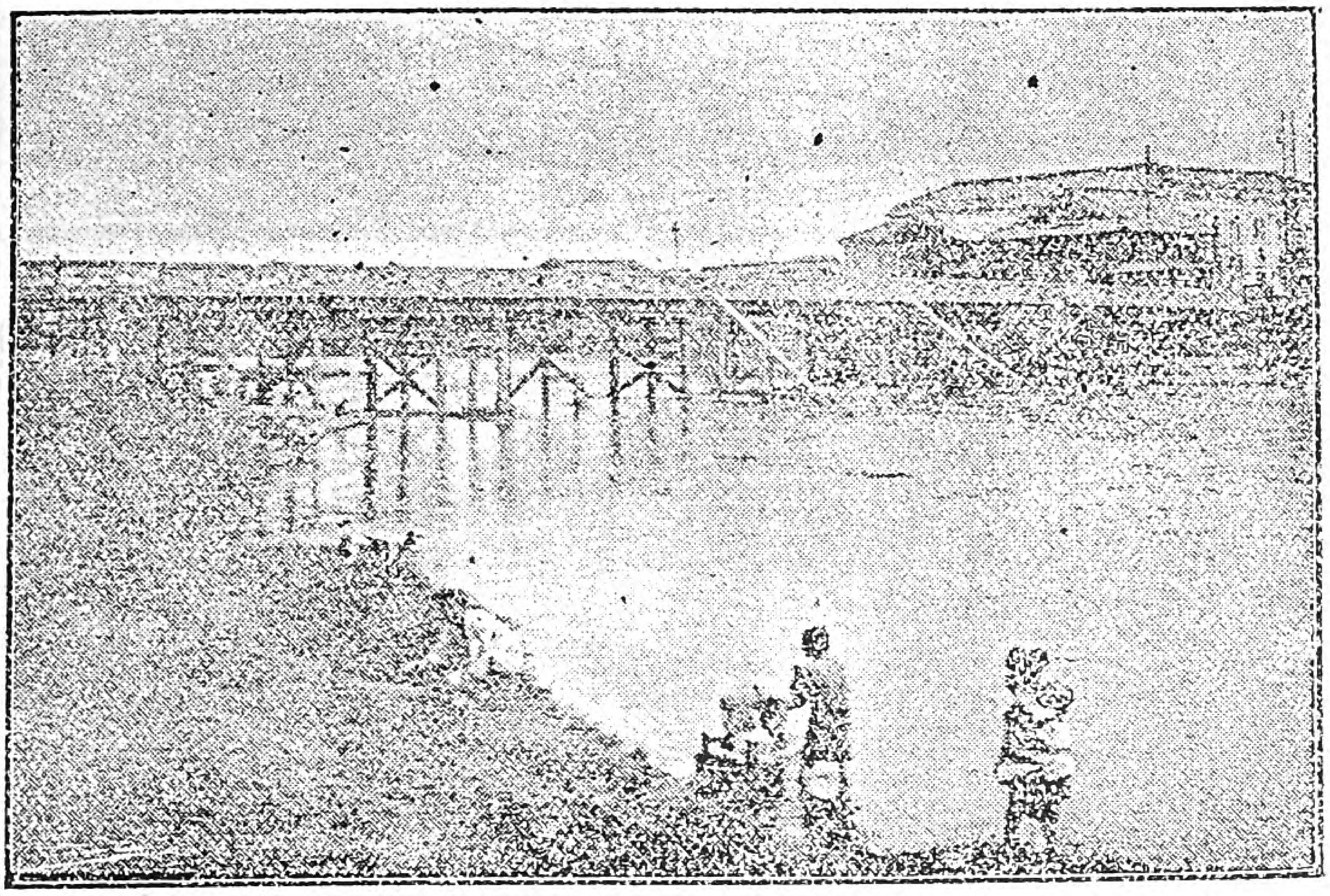
綾壽は再び、男の口許へ氣をくばつて、手紙に就いて後の意を聞きたいと心に願つた。

本當は林のいふ言は最もだと思ふ、自分でも濱田や松木と隔離つた方が好いと感じた‥‥けれ共唯林がさう云ひ出した動機が知りたいと、焦慮つて來るほど、綾壽の眼には、男が憎いほど落着いて自分を繰つてでも居る樣な顏色が、まず〳〵彼女の心に強い動搖を起さしめた。

女の家に近い明神下の角へ來ると、男は默つてショールをはずすと、

「それぢやあ」

と云つて女の手に渡して、遂々何も云はずに別れて了つた。



山裾

三ケ島葭

たちまちにおのが暗きを投ぐればか戀しき人のあはれにも見ゆ

そはすべてあやまりなるも我をやゝはなれし君は美しきかな

やるせなし君が與ふとのたまへる命のすでに燃ゆる世なれば

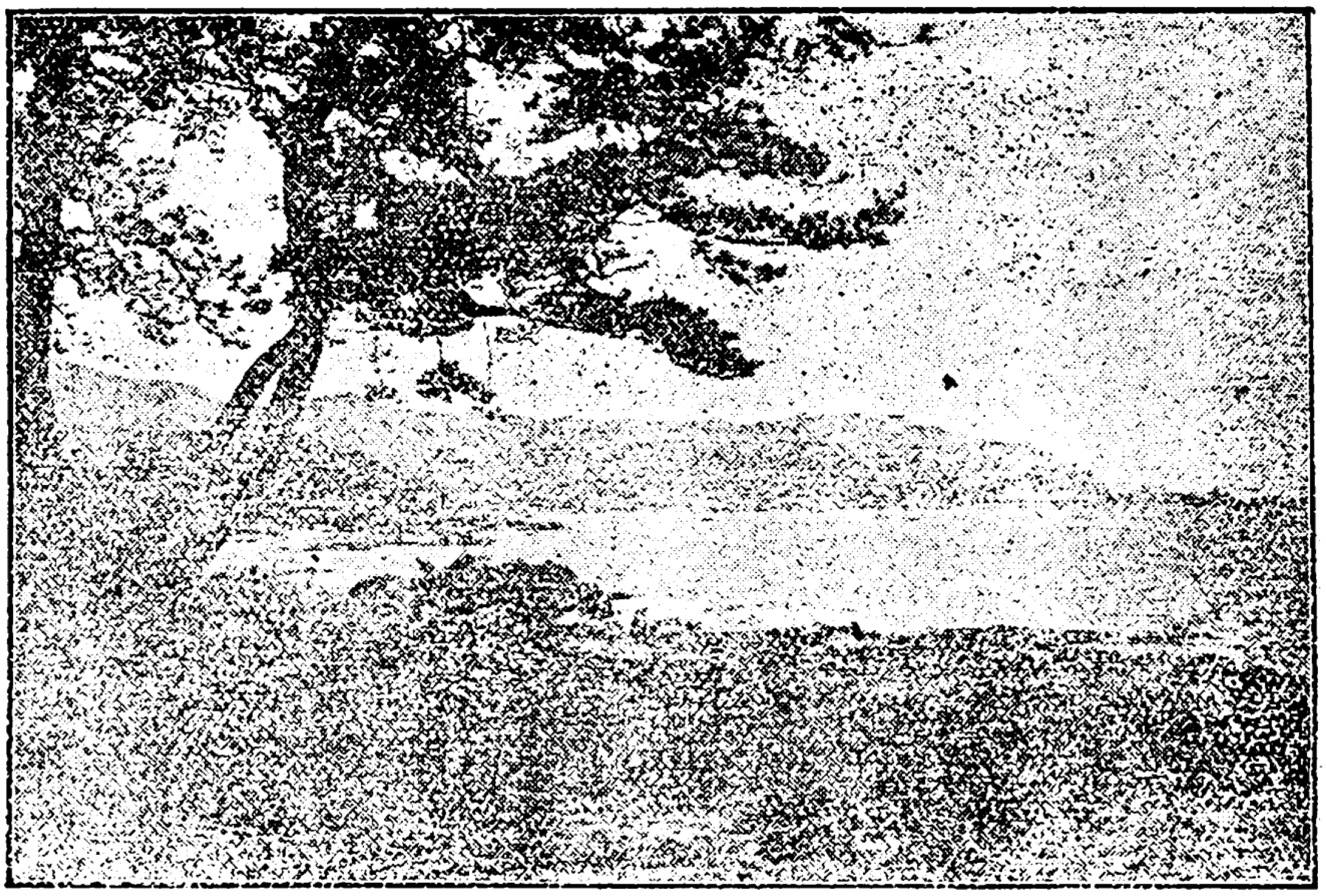
みづからを打つにあらねど君に負ふ心と知れば身の痛きかな

たのむまであやうくなりぬわが見るは君も知らざる君と思へど

一人てふ迷へる我の謂に似て二人と言ふもあはれなる夢

みづからが泣くべきものゝほかなれや戀と言ふだに悲しき心

惑ふまに長き日暮れて夜に來しやはた夜を待ちて來しやはたして



殘る夜を明かしなやめる暗に知りぬ灯かげに受けしその宵の毒

へだゝりぬ嘆くや笑むやかにかくに聞かまほしきは君が消息

何の夢ぞ苦惱の今か悅樂の身かとおのれを判ずれば消ゆ

うつゝなき身はみづからを碎きかねあだしおもひをつゞけむとする

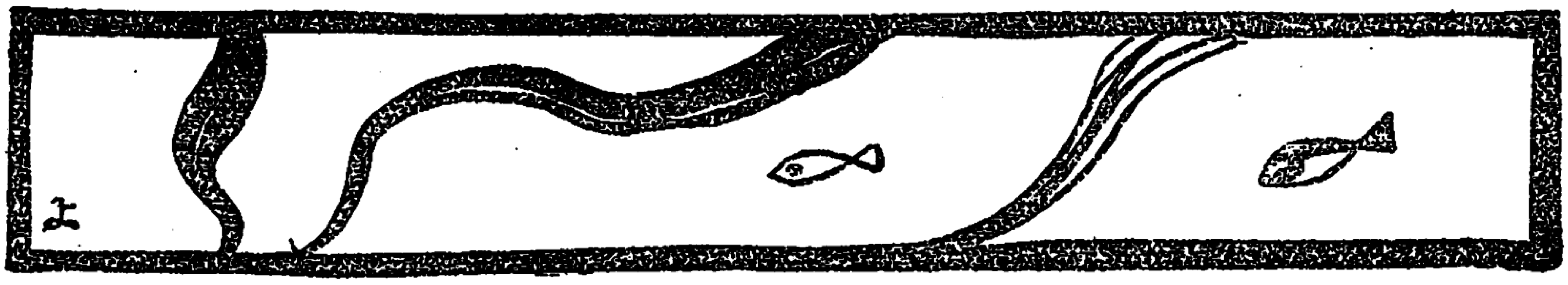
しばらくは氷とだにもおぼえざる我が熱火を投げらるゝ日も

戀ふるをもわがまたそれを耻づるをもあはせて高くあざわらふべき

あはれにもそむかむとする我のみが引かれゆくべき悲しき力

そこなはれまじとわれまづいまはしき言葉の中に葬れる戀

おろかなる心ならでは知りがたき男なれかし心なれかし



新しき世

江森美子

秋の夜の露店に物をあがなへる外國人のうす色の衣
親しめば冷やけきまでに身にぞしむ秋の情緒の懐かしきかな
ね姿もみだれずなりぬビイドロのへりにうづまりこほろぎを聞く
秋の雨ながくも晴れじでいけ衣さむき墓場に通ふ者あり
胸に組む指より青くほごれしたる月の夜なれば寢じともよし
暴風雨靜みしあとの亂雜の空氣に散れる雲の香を愛づ
赤き酒前にながめてためらへる若き恐怖の美しきかな
安らかに寢るか淋し空中を走れる風のたえまたえまは
つはぶきの黄色き花に暮れのこる靜き夕秋を見しかな
もの云はずはた聞かずしてかくれ子の如くも秋の夜ひるをやる
心づきて我を眺めば樣々に我が死にやうを尋ね居しかな
落葉に雨後の露あり午後三時濟らに和げる日の光かな
革新の火花もあれや維新の泉もあれや我が胸なれど
悲しくも囚はれ行くや大風に吹るゝ蝶の如くみ胸に
流水の如く來りぬ秋は今土いぢりせる我が指先に
悔ゆる日はなけれど悲し女子の世を如何にして新なすべき

娘はんの群

松井月草

おふささんは相變らず裁板の前にキチンと坐つて御仕事をして居た。拭き込んだ黑塗りの簞笥が並んで僅かに光る口金も重々しく、その上に祭られたお稻荷さんの赤い鳥居や、香だきの小蒲團もくすぼつて見える。

妙に薄暗い家だ、這麼いつも夕暮れのやうな部屋の中によく一日坐つて居られたものだと思ひながら、私は默つて其丸つこい肥つた手がチク〱と小器用に動いて行くのを眺めて居た。

「好いお天氣さんだんな」と暫くして、茶の間の方から、おかきを燒いてゐた叔母さんが首を突き出した。

「さうですね、どこかへ出掛けたいやうになつちやいました」と上の空で答へた私は、つまらなさに物さしで裁板の端から端へとたゝいてみたりする。

おふささんの膝には、昨日の緋鹿子の長襦袢とは打つて變つた銀鼠羽二重に同じ裾をつけた小袖が乘せられてあつた。

「まあ、今日は變つたものですね」、と云ふと向ふは優しく笑みつゝ襟をくけ終つた絲をぷつゝり嚙み切つた。

「エヽ、尼はんのだす、生魂はんの近くでなあ、御住持やけど、きれいなお人」と云ひかけてチラと私の顏を見上げたが、

「ほんまだつせ」と眞顏になる。

「ヘエ、若いんですか」と思はず此方もつり込まれた。

すると茶の間の方の母親が引き取つて、「
「なんだ二十九やさうながきつぽりしたお方でな」とつけたす。
「何故やろ、しやうもない長い髪切つて青坊さんに……いやゝな、尼はんなぞなる人の氣が知れへん」とおふささんは仕立上げた小袖の褄を眺めたり、袖口を合せたりしながら可愛らしい眉を寄せた
「其處に仔細がおまんがな、なあ嬢さん、そやおまへんか、だれも好んでなりやへん」
「何があつたかて……」と板の上で疊んだ着物をトンとたゝいて傍の行李に入れた。
遠くの方から「ドン〳〵」と云ふ太皷の音が聞える、と同時に「ワーッ」と云ふ子供のどよめきがして、「正一位稲荷大明神、稲荷さんの事ならどこまでも」と節をつけて歌つて居る聲まで長閑に響いて來る。
亂れ散つた絲巻やヘラなぞを片附けて一寸メリンスの前掛をふるつて、また坐りなほしたおふささんは續けた。
「どないになつたかて、わては尼はんにはなりやへんぜお母はん」
「何も貴女になれと云ふてやへんがな」
私は思はず微笑まずには居られなかつた。
そしてこんな無駄口の聞ける呑氣な母親と一所に居る、おふささんの苦も無さ想な顔が羨しかつた
自分には小言しか云つて呉れない嚴格しい父親一人きりしかないので有る。
自分は未だ嘗て、誰とも是れ程遠慮のない笑談を言ひ合つた事もなし、又甘へさせて呉れる人も何にも無かつた。何かにつけて直ぐ、若くして逝つたといふ美しい母を思はずには居られなかつた。
自分に取つては母と云ふ名は悲しい名であつた。
自分はとう〳〵眞の母の味と云ふものを知らないで育つて來た。
殊に此知らぬ土地にさまよつて來た旅の親子に同情を寄せて、二人を暖かく被つて呉れるものは此

おふささんの一家許りだつた。

此家の叔父さんより叔母さん、分けてもおふささんは一番の同情者であつた。

自分はどんなに嬉しく悲しく思つたらう、いつも思ひあぐむで苦しくなると古ぼけたやうな昔そのまゝの――まるであくどい開け方をして居る今の大阪とは何のかけかまひもない様な――此家に來て罪もない世間話を聞くのがせめてもの心やりになつて終つた。

おふささんは年こそ一つしか違はないが、かう云ふ空氣の中に育てられたので未だホンの何にも知らない小娘のやうだつた。

初々しや娘心のやさしさは機嫌の取りにくい自分の父親の胸にさへ、柔かく浸み込むと見えて此女の面を見た時には何時になく笑ふ事さへあるのだつた。

自分は心からおふささんが可愛かつた。そして折があつたら彼の自分よりも丈の高い、自分よりも肥えた女らしい身體を抱きしめて「妹よ」と呼びたかつた。

たつた一言でも「姉さん」と言はせたかつた。

けれども、如何云ふものかそれ程無邪氣な娘でありながら、いざ二人限りとなると妙に羞かんで、打解けず、焦々しい程傍へも寄つては來なかつた。

それが自分には飽足らなくてならなかつたのである。が、これがほんたうの大阪氣質とでも云ふものだらうと思つてみたりした。

「おふささん、今度二人限りで何處かへ行かうぢやありませんか」と私は口に出して終つた。

するとおふささんの顔はみる〳〵曇つて來た。オヤと思つてみてゐる内にすぐ元の色に返つて、わざとらしく莞爾した。

「ほんまだつか、嬉しいわ」と我知らず赤く染つた頰を抑へながら、

「ほいだら、お母はん、わてどれ着てきまひよな」と簞笥をちよいと眺めて、稍甘へ氣味に母親をみ

る。

「どいなと好きにしなはれな、其樣な事までうちや知らんわ」わざと濟して未だ「かきもち」を燒いて居る。

急に仕事場の方でコツ〳〵と云ふ音がして來た。始めて私は氣が付いて耳を濟した。

「あら、叔父さんはお內なんですね」

「エヽもう家の人も偏屈者やさかい、仕事など投つときなはれと云ふのやけど」とホツと嘆息をついて、

「近所さへも恥しい、働かにや喰べられん事もあらへんに親父はんも困りもんやなあ」と叔母さんは又いつもの癖が始まり掛つた。

所へガラリと格子の開いた音がした。

「だれや」と叔母さんは外をすかして云ふ。

「わたい」とハシヤいだ聲をして這入つて來たのは、みよしさんだ。

「あ、園江はんも來といやすな。よかつた、よかつた」と云ひ乍ら上つて來る。

從姉妹同志だと云ふがおふささんとは全然肌合の違つた氣のさくい娘である。

突然上つて來るや否、束髮の頭をふりむいて見せて、

「リボン見とくなはれ、ハイカラだすやろ、夢二式」

明るい若々しい聲と、派出な桃色地に草花を出したリボンの華やかな色とが、此薄暗い部屋の靜かさを破つた、パツチリ張り切つた瞳が斷えず動く〳〵と一所に、手も口も敏捷に活動する。

「うちへ御出なはれ、あんまりやね、おふさはんとて許り」と恨めしさう。

「靜かにおしんか」とはじめて叔母さんはイマ〳〵し想にみよしさんを睨めつけた。

みよしさんも負けては居ない。

「そやかて、そやかて、…あんまりやもん」とぶらさがる前髪のほつれを左の手で耳の根にはさんでゐたが、黄色く燒けた「おかき」を見んと默つて手を出して二三枚ぽり〳〵遣る。

「まあ惡い行儀やな」今迄默つて見て居たおふささんは淋しく笑つて、じつと沈んだ眼に憐れみを請ふ樣な色を浮べて自分を見るのだつた。

「園江はんはわての人やのに、取られん先にさあ行かう」と立つけに又一二枚つかんで、私の手を引張つて立つ。

私は一寸まごついた。此みよしさんの深い澄んだ瞳の力に逢つては誰れだつて叶はない、さりとて此淋しい友を見捨てるわけにも行かなかつた。

「堪忍して頂戴、ね、あとからすぐ行くから」と子供のやうにすかしても、あわてゝ首をふつてイヤイヤをする、終ひには泣聲を出した。

「一所に來とくれやすな」

到頭、何か云ひたげなおふささんの唇を跡に殘し乍ら私はみよしさんに引張られて、ぽか〳〵と照る柔かい春の日をあびて小汚ない空堀通りを清水谷へと向ふのであつた。

私は刹那の胸の安けさを甚麽に樂しんだであらう。

斯う云ふ低級ではあるが異つた土地の娘はんたちと去氣なく遊び浸つて行くのが何も亂されない一つの誇りであつた。

春の此日に似合はしい長閑な遊びの一つであるのを喜んだ。

しかも二人の友達の性格はまるで違つて居た。

何方かと云へば、おふささんは純大阪式

みよしさんはそれに少し神戸式とでも云はうか、ハイカラを加味して居た。

それは勿論境遇にもよるので、みよしさんの父親といふ人は圍碁の指南番だし、母さんの方は或る

女學校の割烹の教師をつとめて居る。

其間で、所謂生新らしい極キザな雜誌文學に被れて深刻なる煩悶とか懊惱とかといふやうな言葉を好んで口にするのは嫌味だが、色白な圓顔にまつ毛の長い大きな眼は忘れがたいものだつたのである

「貴女、ふうさんの事知つてやはるか」と突然みよしさんは聲をかけた。

「いゝえ、ちつとも、なあに」

「ふうさんはな」と云ひかけて一寸ためらつたが、

「情人がおまんのや」とふつと首をちゞめた。

「まあいやだ」と私は大げさに笑つて、

「そんな馬鹿な事、あるもんですか」と云ふと、みよしさんは眞顏になつて、

「ほんまだつせ、となりのなあ、新次さん知つてやはるか」私は到頭噴き出した。

「何だと思つたら、みよしさんの好加減な人、新次さんてば三人の子持ぢやないこと、それに第一年が……」

「年がちがふたかて戀せんて理がおまつしやろか」と云はれて私はぐつとつまつた。

「そりや、左樣も云はれないけれど」

「そうだすやろ」とやゝ得意氣に胸をつきだした。

「帶やみたいやがな」と云ひかけてまだ信じない私の面をみると焦つたさうに眉を動かしたが、

「見ておいなはれ、今に知れまつせ」と云ふが否、ふつと何か思ひ出したらしく、

「ちよとハンカチ貸して頂戴んか」と私の汚れたのも構はず受取るかと思ふと、もうバタ〳〵つと馳け出して横町に曲つて終つた。

可笑しい人ね、自分は思はず微笑みながら其あとを見送つたが、恰度飲食店のヅラリと並んだ家のまへに立つのも間が惡く、五六間の間をアッチコッチと、ぶらつき乍ら、みよしの歸つてくるのを待

つて居た。
その胸には思掛けない暗い雲がはびこつて終つた。
おふささんは正可、那麼わだかまりの有る人ぢやないと思つて居た。けれどもよく考へて見ると、さうらしい蔭がないでもなかつた。
どうもいざ二人きりとなると妙にしよげて自分の胸をさぐられまいとでもする樣に默り込んで終ふ元より自分は人なれぬ恥かしさであらうと、勝手な理窟をつけて居たのだが、それも秘した底をあばかれない爲の要心だつたのかも知れない、さう云はれて見れば床やの新さんの擧動にもどこか四十男にしては、そわ〱しい所がある。自分は堪らなく不愉快になつて來た。
いつも私を見上げるあのたよりないやうな眼、初々しい可愛さ、其れは誰にでも向ける媚だつたのだ‥‥。私は欺かれたやうな氣がしてぼんやりしてしまつた。又一方では斯うも考へた。
其れにしても何と云ふ果敢ない二人の中だらう。あの世話やきらしい母親の眼さへ盜んでの悲しいあひゞき――けれども其うした情緒は却つて彼女には、ふさはしいものであるかも知れない。‥‥
自分はしみ〲、まるで自分達とはかけちがつた人達の心意氣を到底解する事の出來ないのを嘆息して終つた。今迄人並に其等の空氣の中に浸されてゐると許り思つてゐた自分の愚さを恥ぢた。
「何考へてやはる、さあ行きまほ」何時の間にか歸つて來たみよしさんは苦もなく笑つて私を引立てた。
其手にした、ねずみ色のハンケチ包には香の高い河内蜜柑と、眞赤な色の林檎とが、晴やかな面を出して覗いてゐた。

* * * * * * * *

貴婦人に與ふる書

杉浦翠

上

子爵の姫君とあつたは以前の事。大富豪家の夫人と成られた今はよし無位無官で有らうとも、貴女は矢張り貴婦人と云はねばなりません。貴婦人とはかうした女との肯定は世にありませんが、所謂現今の貴婦人と云ふのは、偉い人の奥様とか位の高い人の奥様とかいふより寧ろ金力に輝く貴女のやうな婦人をさして云ふ方に力が強いやうですね。譬へば紅葉さんは一代の文豪で明治の文壇の歴史を飾る點に於ては、貴女の旦那樣がいくらお金持でも、世襲の財產をじつと護るより外。何ひとつ創作のない平凡な技倆から思へば遙に紅葉さんの方が價値ある尊い生を送られたのですが、紅葉先生の奥さんを貴婦人と云ふよりも、貴女を貴婦人と云つた方が、どうも妥當のやうに思はれますね。○○さんなんかも伯爵で公家と云ふ高位な家柄でも貧乏であゝ家が亂れて居ては矢張り貴婦人と云ひ度くないですね――。富の權威――貴女の周圍にはいつも五彩の靄が漂つて居るやうですね。一度御口を開けば御言は虹のやうな眩耀をもつて、新聞紙上で讃めたゝへます。「眞珠のやうな御齒を見せながら夫人は芳ばしき息の中より朗らかなる聲もて――」などゝ。

また、貴女が一寸新しく着替でもして集會に御出なさるともう、直ぐに○○夫人の扮裝とか云つて婦人雜誌は、宛で浦ノ漁師が霓裳羽衣でも見つけたやうに眩惑して寫眞は載せるし、說明をするし、呼物として居るのです。要するに貴女の一擧一動からは幾萬の活字が生れて、その活字が幾萬の婦人の充血した眼に讀ま

れ、羨望の的となり虚榮の心は挑發させられるでせう乃木さんの奥さんはみんなに崇拜されて居りますが、自分がこの奥さんになり度いと望むより、責めて一日でもあなたのやうな境遇になつて見度いと云ふ方がより以上なのだから驚きます。何と云つてもこの點に於て、貴女は女王の權威を供へて輝いて居られる事と思ひますわ。

生存の烈しい都會の渦巻に泳ぐ市民が、一日の勞をねぎらふべき矮さな寄生蟲のやうな、家屋の甍は、波のやうに見下す高臺に、巍峨と建つた大厦高樓。そこに乙姫樣のやうにいつもお若く美しく起臥なさる。貴女を訪問の時は御門の傍のお巡さんに一禮して玄關で書生に一禮して廊下で小間使に一禮して、御室に通つて少なくも大概十五分位は、冷えきつた廣間に立往生をさせられます。お居間で計つた時計は頃よしと見て貴女はさら〱と衣摺れの音をさして、蒼い顔寢足りないやうな色をして出被入る。平常でもお召の着物に織物の帶、御指には寶石黃金が映いやうに輝いて、高價な粹を集めたやうな御みなり。御生活を見る毎に私は日本が何億といふ外債に苦んで居るのは僞ぢやないかと思はれますよ。尤も貴女のお家のお財産だつて外國のお金を儲けて來たといふのでないのですつてね〇〇當時迂遠な同胞等の外見して居る隙に、敏捷に懷にしたとでも云ふのでせうか。つまり。日本海の海の水は一滴も殖えた譯でなく、不偏の水の動搖によつて起きては轉ぶ、大小の浪々のやうなもの。一方に御家のやうな大きな浪が起ればまた何處かで、或浪は崩れて白泡と消え失せてると云ふ譯なのですわね。

御談話と云へば大概普通な世間話、人の噂。今の藝術界がどうだらうが宗教界が何だらうが、演劇の話だつてほんの皮相觀でしてね。何でも打算的で二萬圓の金持は一萬圓の人より豪いやうに單純な觀察で、物質より貴いものは外にないものゝやうに、一にも二にも富の話、他人の富までも褒めなさるの。そんな時には私は貴女の御顔なぞ見ては居ませんで、一萬圓近くしたとて大變評判だつたその御指環を見つめて居りますの、流石高價なだけに見て居ると、異樣の光を放ちますのね。鳩の眼程のダイヤモンドから幾千の針を吐き出すやうな光線が、紫になつたり赤くなつたりして虹を見るやうですわ、御手も動かないのに、光澤は強くなつたり弱くなつたりキラ〱として、丁度宵の明星の瞬きを百錬の鏡に寫して見るやうですこと。そして

中指の根元から光芒を曳いて御袖口のあたりまでもサーチライトを見るやうに。本當に貴い物質ですわね。全く私はこの光には感心して仕舞ひます。が礦石の光と云ふものは、あまり冷くてたゞ眼を射るといふ一部の官能による快感のみで、何の情味も幽妙な美感も與へて呉れないものですね。貴女のお部屋にしてもです御調度御飾物の悉くが俗惡紛々で、何ひとつ純藝術品といふのはなく。まあ金貨の變形體を見るとでもいふのでせうか。私は頭が痛くなり。氣が苛立つやうになりますの。一幅の名畫に對した時。又微妙なる音樂を耳にした時の私は。浮世に蠢きの身を忘れて、眼で見て居るのか、耳で聞いて居るのかその官覺さへなく、たゞもう神經の凡てが美しい冥想に捕はれて、超俗の安らけきを得るのに、この千金の貴女の御部屋に這入ると、先づ暗算をして見なければ義理が濟まないやうな氣がしますの、そしてあの合天井の裏の暗がりで、金の角を生やし肩から獸の皮をかけた肥滿の大男が、爛爛たる眼を光らして、まだ足りないまだ足りないと云つて金の槌を叩いて居るやうに見えますの。貴女はその魔物の奴隷となつて、これかあれかと精出して供物をして居るんですね。指環時計は申す迄もなく、簪から襟止、パチン腕環、羽織の紐まで、人間の體に金屬をつけ得らる可き、個所々々をよくまあこんなに研究して、遺憾なく埋めたものですこと、全く貴女は忠實ですこと、然し人間の短い生涯をとりまいてる、短い貴い時間をそんな事にのみ腐心して、それより以上に高遠な趣味、それより以上超越した抱負がないやうに見透されますわ。尤も世間には借金までして貴婦人の見榮を張る女もありますが、それから思へば貴女のは金がありあまつてなさるので少しも差支ありませんが、飽く事を知らない物質の榮華に代へる富を、もう少し公共的事業にでも使ふとかしたら如何でせうか。ソロモンの榮華の極だも野の百合の一輪に及ばなかつたと云ふではありませんか。自動車を驅つて名利に狂奔して歸る夕方、日沒の太陽の如何に美しきかを感じませんか入神の技ある藝術品を見て本能的情慾の鎭まるのを覺えませんか。月の夜妙なる笛の音をきいた時、貴女は御自分の胸に手を當てゝ、名利に勞れた生の賤しむべきを恨めしく思ひませんか。

下

尊子樣、今日は忌憚なく云はして下さいね。私は衷

心から黄金に中毒して居る貴女の哀れな神經を醒しもつと崇高な趣味を敎へたいから煩いでせうが警鐘を亂打するのですよ。

幾多の弱い女のさもしい心に勝利の凱歌を擧げて居ると思へば、それは間違ですよ。貴女の後には貴女の生を咀ひ、貴女の誇に唾して居る人があるではありませんか。寶石。錦。其等を支給して下さる、貴女には唯一の太陽の光の如き旦那様をば。貴女より美しく、若く、或る意味の技倆を持つて女が御良人の君の魂を横領して居るではありませんか。貴女が假初の枕にでもつくと、もう第二夫人は玉の御輿に載れる事かと胸算用をして居るのですもの、御手がついた小間使は譬へ家來であらうともう奧樣の仰せなど肯かなくなりますつてねえ。人情の機微は其處ではありませんか。眼にも見えない、音もしないで却つて力あるその屈辱。



貴女は心中にそれを苦痛と思つて被入ると、他人に愚

痴ればまた蛇足の種を蒔かれ芝居視されるも、端無いと思つて、結構らしい事を仰るのならまだしもながら若し貴女は寧ろその位の行跡はこの富に對して當然のこと破倫に亂れた社會に對して左程の屈辱とも氣がつかないのではないでせうか。自分は人格の高い人を選ぶ、金持の人は藝者買したり種々の悖德をするから厭だ、と仰つた時。でも妾や藝者買が出來る位働きのある良人を持てば女の幸福だと思ひます。と貴女が被仰つたのを聞いた時。何處までも貴女は負惜みを云つて、愛の良心を僞つてるのかと贔負目する私の眼も弱くなりました。男は力を誇り女は愛を誇るといふその命の良心さへ、痲痺して居るなら貴女はもう女として一日も生きてる價値はありません。剝製の鳥のやうに魂はなくて形骸許り美しい、貴女の御夫婦は肉が肉を愛するのたゞ便宜上の繫り、報酬目當の雇人と同じものですね。貴女の御髮には血が通はず、御肌には熱なく、御體を廻る血は悉く濁つてよし赤くともそはお魚のやうに冷たいもので御座いませうね。然し貴女とて物の哀れを知り初めた十五六の初戀に、馬車の中で老眼鏡を懸けた禿頭の大臣を見染めはしなかつたでせうに。昔お七が家を燒いたその血は今の女にだつて通つて居ますのに、黃金は惡魔です醇乎として何の侵略を許さない少女の總體の愛にかうして斧を振ふのですもの。私等はその刃に掛つてはなりません。容貌を裝ふて力を荒ぶ異性の心を和ぐるのも秋の蟲が、美しい音に異性を呼ぶのも、自然は何ひとつとして愛の力に背いて造られたものはないのです犬や猫のやうに喰物の多少を爭つて、この男は物が有るの無いのと、命にすべき愛を上衣にして、飢を凌ぎに嫁くやうでは人間として是よりの墮落はありません

あまり人通のない閑靜な街に、性だけの表札を揭げて、召使相手に小猫を弄しながら、朝からお湯に這入つて、あたら名妓と謳はれた花の顏を鏡に寫してお化粧に餘念なく今晩あたりは、旦那樣も御出の筈と、日當れる障子に鳥影するを、待人來る兆など、婢と噂するその夕頃。護謨輪の俥の音も忍やかに、梶棒が門前に下りる。と出迎へた婢はバタ〳〵と急脚に、御新樣旦那樣が……と主人の心を察して自分も嬉し相に云ふと、まあと許り立つてゆく。外套脱がせて、居間に。友禪縮緬の丸くかゝつた炬燵に、差向ひに坐りながらまあ今度は久濶でしたわね。と懷し相。奥が機嫌が惡かつたものだからね。つひ。と無沙汰の首尾を話して

餘計の苦勞さすも、と口籠ると、まあ、どんなでしたの、あんまり心配だから御本宅の方へ電話を懸けて見ようと思つたのですが、どうも氣が咎めて——ともう眼に涙。あゝかうした美貌を持つて生れて、これも人の子、人の娘を、あたら自分の爲に一生日蔭ものとさせて終ふのか、濟まないとその涙を讀んで、心で詫びると、餘計にいぢらしく、愛は一層力は募る。

斯うした晩！

貴女は獨りぽつちで廣いお居間の裡でどんな想ひであるでせう。

貴婦人の名は尊くとも、貴婦人の生活は立派であつても、より尊い人間の情を傷つけられて、それで滿足で居られませうか、いら〱しないで居られませうか。蹂躙されたる婦人の節操を何うなさいます、金を以ても、玉を以ても、購ふことの出來ないものを奪はれてそれが何の富貴でせう。

、其寂寥を玉の螺鈿の枕が慰めてくれるでせうか天井裏のあの異樣の魔と握手したとて、胸が溫まるで御座いませうか、尊子さま。

本當に！



子供が欲しい

梨花

私にはどうして子供が出來ないんでせう、と夫に聞くと、

「お前の心がけが惡いからさ」と云はれます。

同じ事を母にいふと、

「あんまりいつまでも子供だからいけません、でも、ほんとうに早く出來ないと困りますね」と心配して下さるのです。

祖母は祖母で

「私もこれまで待つて居たんだから、どうぞしてヒイ孫の顏が見て死にたいものだね」といつて居ります。

ほんとうに私にはどうして子供が出來ないんでせう、八幡の八幡樣へお詣りもした、出來るだけの養生もして居る、けれども出來ない、どうしても出來ない。

廣い世の中には、八ケ月にもなつたお腹の子供を其まゝ、硝酸を呑ませられたり、咽喉を絞められたり、洋刀で胸を突かれたりして死ぬ人があるといふに、神樣は何故お腹をとり換へて下さらなかつたのでせう。田舍の友人だつて、もう大概可愛いゝ赤坊を抱いてる。この社宅にだつて隨分出來る。去年の暮等一度に五軒も一所にお祝ひを上げた事があつた。其時前田さんは、

「ほんとうにつまりませんわね、他家樣ばかりへお出來になつて、戸山さんのお家だつて、宮井さんのお宅だつて、まだ一年にもならないぢや御座いませんか」

と、こぼして居らしつたけれど、其方も今は可愛い坊ちやんがお出來になつて御滿足で居らつしやる。

もう一人ぼつちになつて仕舞つた、淋しい、淋しい。

○

「己れが三十になつても子供が出來なかつたら、他でこしらへてくるよ」と夫は戲談のやうに、又戲談でもないやうにいつて笑ひます。

「えゝ/\でも私の氣に入つたいゝ子でなければ嫌ですよ。だつて私の子になるんですもの」

「お前の氣に入つたのが己れの氣に入らなかつたらどうする」

「そしたら、二人の氣に入るのが見付かつたら」なんていつて大笑ひします。

けれどもかうした後、私は云ひ知れぬ淋しさを感じます。夫の父の現の樣を見て、私も姑と同じやうに暗い道を辿らなければならない運命に生れて來たのぢやないかしら。あゝ子供がほしい――

○

里から小包が屆いた。ドツシリ重い縮緬一反、羽織にするやうにといつて寄越した。其中に、大事さうに幾重もの白紙に包んだお札が二枚、一枚は神棚に、一枚は寢床の上にと書いてある。新町の於菊稻荷で御祈禱してくれたのださうな。私は不思議に眼の中が熱くなつて、玉のやうな淚がハラ/\とお札の上に落ちた

お母樣！　御心配かけますわねえ、と聲を上げて泣き伏して仕舞つた。

○

先達千日前へ遊びに行つて、新地ものぞいて見た。夫はわざと一人先きに行くと、「一寸/\お上りやす一寸あんたハン」といつて騷ぐ、私が後から行くのを見ると、フト默つて仕舞ふ、私は一種の矜を感じて自ら

ホヽと笑つた。けれどもフト氣がついて、二階の馬鹿騒ぎの聲を聞くと、不思議な嫉妬が湧いて來ました。

「嫌らしいわねえこんな處、どうせ遊ぶのなら、富田屋あたりでなくつちや氣が利かないぢやありませんか」といふと、

「いや、新地でもこゝのは上品でシンガーと同じだよ前に燒けた處のはいけないけどもねえ、こゝへは可なりなお客が來るんだから」と知つたかぶりに眞面目でいふからをかしくつて堪りません。

あゝ、男の貞操を守られる日がいつ來るんでせう。

○

「今の日本に生れた女の方はお氣の毒で御座いますね、え私達がかうしてお邪魔しても、男はお腹がハネルほど御馳走頂いてる内に、



女の方はそれをこしらへて出さなきやならないんですもの、そしておまけに、云ひたい我儘を云はれて居らつしやるんですもの。其處へ行くと外國の女は幸ですね」と村井さんはおつしやつたけれど「ですけど、それは致し方が御座いませんわ、今の日本の女は、男の方に養はれて居るんですもの。私達のやうな意氣地のない女は從順しくさへして居ればそれでいゝんです。眠つてると云はれても何でもよろしうございます。岩野さんの奥樣のやうに、大丸髷に靴をはいてマントを召して居らしつたりして、女權擴張の奥義とやら、經濟上にも働けといふお說を實行致しましたら、旦那樣に御馳走こしらへさせる事も出來るで

せうけれど、それがほんとうの幸福なんでせうか。青鞜社の方々だつて、あゝして強さうにして居らつしやいますけれど、御自分でもあれを滿足に思つて居らつしやるんでせうか。私達にはきまぐれとしか見えませんのよ、もう古い女でも何でもかまひません、冬の寒い日等は、炬燵にでも這入つて好きな本でも見て居られる方がよつぽど幸で御座りますわ」

としやべり續けると。

「さう思へばまあさうですけれど」つて笑つて居らつしやいました。

○

始めて大阪へ來た時には、「御新造ハンまだ十七位でおまつしやろ」と、婆やに云はれたほど若く見えた私も、この三年の間にすつかり年をとつて仕舞つた。



噴水のなやみ

れい子

うち悲し
ふきあげの小夜のしらべ、
ふとおびえたる水鳥のあやしく叫び
はた鳴きやみ、
深更の寂寥のさなかを
いかに、靜やかに、おだやかに
心たらへる噴水のたましひよ、
黑き無言と、くらき沈默と、
しかして心足らへる噴水の小夜の調、
靜かなり。
時しもよ、ひらめき濡るゝ木梢より
そよぎ出し、そよ風の白きほゝゑみ、
あな云ひしれずなつかしきその素振。………
忽然として、かき亂されしたましひ
横樣に亂れふる噴水の亂調よ、
おゝ、若き日のなやみ、惑ひ心ぞ
こちたくして、すべなや。
あゝ、わが呪はれし噴水の心よ
すゝりなき、すゝりなき
黑き無言と、くらき沈默に吸はれ行けども、
心また足らふ事なからむ。――
すゝりなき、すゝりなき、靜けさにかへり行けども。

障子一重

長曾我部　菊

ミルクホールに瓦斯をつけてから一時間ほど經つた頃であつた。元氣よく店に這入つて來た若い男があつた。頭には製帽をかぶつて、絣のあはせ羽織を來て居つた。眼鼻立のきり〳〵した筋肉のしまつた好い貌の大學生であつた。店の女主人はその顔を見ると見知りでしのやうに、親しく笑つた。

『僕は逐々そこの松島館に來たよ、今越して來たばつかりなんだ』

と云ひながら椅子に腰をかけて、

『牛乳を一つわかして下さい。』

と云ひながら、手をのばして、硝石の蓋の菓子箱から、シユークリームを取つて、むしや〳〵と頬張た。

私はそこでそれまで、夕刊を見て居つた。いつも客が來ると、傍に合ひ客のある時には、誰でも氣づまりらしくするので、客でもない私はすぐ自分の部屋に引取るのが常であつた。

此の店はミルクホールと文房具店とを營んで居て、私はそのミルクホールの奧の六疊を借りてゐた。

自分の部屋にはひつた私は、殊更部屋の瓦斯をつける氣もしないで、ミルクホールからの障子越しの光りに近づけて、机を持つて行つて、所在なさに日記でもつけようとしてペンを手に取つた。聞くともなしに聞えるのは障子一重の客の話であつた。はじめは氣にも止めずに聞き流して居たが、

『俺はとう〳〵今夜こそ別れて來たよ。』

『まあ…どんなに悲しかつたでせうね、その方は。』

『辛かつたけれども、然し仕方がないんだから。』かう云ふ對話になつた時、思はず聞耳を立てた。男の言葉にはひどく鹿兒島なまりがあつて、早口でいふ時には意味の取れない事もないではなかつた。然し女と別れて來た夜の昂奮した心の中を、水を掛けるやうに、こと〴〵く女主人に話してゐる切ない男心、さうした心持はよくあふれて居つた。

此れからは此處に話をしに來ようね。以前はよく遊びに來たつけな。あれからもう丁度一年にもなつた。あの時分の僕は快活だつたね。俺は一體快活な男なのだ。それが、あの事があつてからと云ふものは隨分悲觀する人間になつて了つたのだ。けれど今夜からはもう元のカラ〳〵した陽氣な男になるんだぞ。見てゐてくれ給へ。きつとさうだから。』

『照れかくしではないよ。とう〳〵別れられた夜だからつて、はしやぐわけではない。女も親爺も今度と云ふ今度はきげんよく俺を出してくれたよ。僕の身も、女も一段落がついたのだから、それを考へると嬉しいんだ。女だつて、今日かう云ふ風に別れたのが、末の幸福になるんだものね。然し僕はね。今まで、後で薄情だと云つて恨まれないやうに、出來得る限り優しくしてやつた。だから別れたからつていつて、恨まれはしないさ。ねさうだらう。』

『どうせはじめから添ひ遂げると云ふ譯合ぢやなかつただけれど別れよう別れようと云ひながら、丁度一年の間一緒に暮したんだからね。その間の僕の費用といへば莫大なものだぞ。自炊をしてゐた當時だつて、月に三十有餘圓はいつたのだからね。そんな事を考へ出すと、何も知らないで金をよこした國の親父にすまないやうな氣がする…‥然しよく國に知れなかつたものだよ。知れると僕の信用にかゝはるし、第一困つた事が出來るわけだつた。僕には。もう約婚てる女があるのだ。其の媒酌に立つてゐる人が嚴格で——一寸僕の

家からは面倒な緣のある人なんだから一層氣が氣ではなかつた。然しまあ〳〵よかつた。結婚をすました後で出來た情婦ならば、女房に得心させさへすればすむばかりだけれども、今露見ちやつたらすぐ樣破談だからね。それは心配をした。

『彼女はそれは優しい性質でね別れて見て…じつと考へると彼女を人にむざ〳〵占領られるのが惜しくて〳〵たまらない氣持がするのさ。なあに、二人女を持つたとて



ろで文句はどうにでもつくが、しかしいよ〳〵さうしようといふ氣もせずね。惜しくはあるし、離さねばならず…然したうとう別れてしまつた。

『今夜そこまで伴いて來た…たうとう下宿屋の軒の陰まで伴いて來たよ。可哀さうだつたが云ひきかして歸してやつた。どうせ當時は繁々たづねて來るだらうけれども、今まで一緒にゐた時のやうな事はないさ。』

『罪ぢやないよ…。罪なもんか。両方で好いたり好かれたりしたらいゝ仲になるのは當り前なんだ。結婚とこの事とは違つた問題さ。僕は罪ををかしたとは思はぬ。』

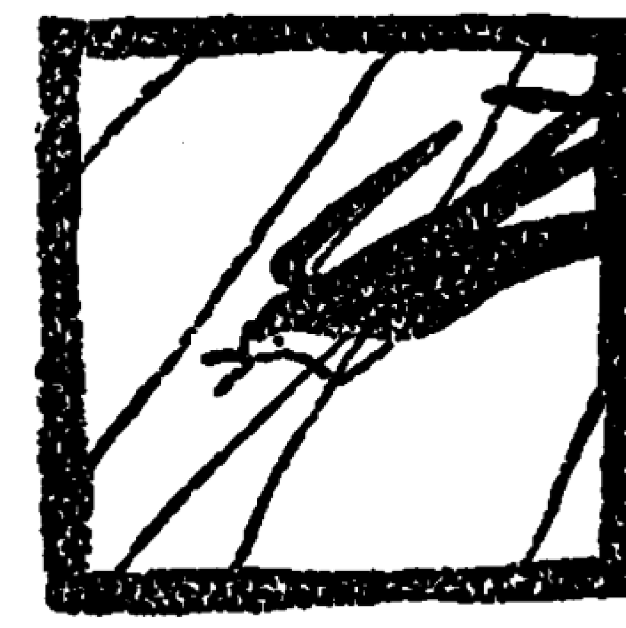
『あゝ今夜こそさつぱりした。僕は今から七月の卒業までもう／＼女に關係しないからね、女郎買もせぬ。藝者買もせぬ。見てゐてくれ給へ。神妙なもんだらうから。』

『それからね僕は明日の八時に出發して京都の方にいつてくるつもりだ。今からゆくと櫻も見頃だし、京都から伊勢にまはつて參宮して歸るよ。それで此店で買物をしてゆく。』

私は、障子一重にかう云ふ男の聲を沁々と聞いた。熱したやうな、涙ぐんだやうな、どうかすると照れかくしのやうな笑ひ聲などを聞かせられて今一度その男の顔を見たいやうな氣持になつた。端書を買ふことにして、文房具店の方に出ていつた。ミルクホールにゐた男は矢張文房具店にまはつて、商品棚から石鹼だの齒楊枝だのハンカチーフだの旅にいりさうなものをゑらんで居た。私は電燈のオレンジ色の光に包まれてさうしてゐる男の背中のあたりに、涙ぐんだ女の顔がぴつたりと吸ひ付いてゐるやうにおもはれた。

男の頰は赤くほてつた皮膚のつやに、いたましいやうな陰影が見えて居る。その陰影にも別れた女の泪と唇のあとゝがしみになつて殘つてゐるやうにおもはれた。





一人者より、その友へ

太田きし子

――子さん、またかと仰有らないで下さい、私はまた貴女を的にして物を投げつけたい氣が漲つて來てをりますから斯うして筆を走らすのであります、しかし今度のは、今まで折々さし上げたやうなあの愚痴やら氣焔やら、それとは全く違つた事であるやうに考へられます、そして今度の手紙は一言一句でも、もうくとりかへしのつかぬ事を口にして仕まふやうで何だかそれから後の自分といふものはどうなるか、とまでにつきつめた處まで落ちこんでゆくやうに感じます。

尠くとも私は、私の知つてゐる眞に新らしい人間であるならば何も默つてゐて仕事をしてゆけばいゝのになぜ私はかうしてまたものを云ひたくなるのでございませう……あゝ所謂藝術家、それはほんとにかうした氣分のベースが擴大な人格の事を指すのでございませう。

――子さん、私はいつも、私は、私は、とまへ置きをして物言ふ事、ほんとに癖のやうになつてをかしいでせう、けれどこれもおゆるし下さい。

私は今、自分の事を「誰れもはづましてくれてのないゴム毬のやうだ」と思つて觀てゐます、まづ第一に夫に、實に明確な理解力のあらはれる事に心づいて：マア、どれほど便なく失望を感じた事でせう、あゝ實にこれは、つひに眞の人間の到りみるべきさびしさのどん底でありました、私のこの發見した信念は、私のすべての成功「死」のときまで、一色不變のものであることだけは申上げるに苦しくないと思ひます。



――さん、私は今日ひよつとこんな事を考へてみましたが、今大分やかましく世の流行語？とまでになりかけて來たあの「新らしき女」といふ事、私にはまだ、ばくぜんとしてゐてその捉へどころに苦しんでゐますが私は「理解力の確かな女」とさう心の中で云つて、それをふみだいにして「新らしい女」をもとめてをります、私のもとめてゐるその女は、もつと幼稚な、もつとプリミチブなもつと本能的なそしてもつと健忍不拔な女であつて欲しいと思つてゐますの。

――子さん、私これまで書いて來て、何故とも知らぬ涙が胸一杯になつて來ました、あなたは現在のこの不思議な私の心裡このまゝを理解して下さるけれど：：この悲しく哀れな無智な文字に乏しい女はたゞ筆を握つたまゝ、はてしない空を睨んでをります。

理解力の明確な女、あゝ――子さん、他の事ではなかつた、自分の事、自分をみつめやう、自分をはげまさう、そして自分の子、否孫にこの現在の苦惱の一閃をでも實現せん事をたのみ觀念しよう、それがために現在のあらゆる苦痛と鬪はう、勝つ事は思つてゐない、ただ誠實にたゝかひつゝ生きよう、と努めてをります。

――子さん、このごろ私に下さつたお手紙、あれには全體にわたつて、久しく消息を斷つてゐたあなたの眞の叫びをきくやうな氣がしてひどく感動されましたがまた一面、今更あれをきくのは私には何んだか物足らなくもありました、そしてあゝした氣分は、やはりあなたの日常生活中、荒れ狂ふ浪の一片で、あゝした暗く底深い思想のひらめいて來る時、なほ一層強く家庭といふものゝ愛着の根づよさがましてくるのではないでせうか、そして眞のあなたに最も接近した藝術が生れる時の陣痛であるではないでせうか：：あゝごめん下さい、おたがひに謎に生くべき女であります、私もそれを思つてゐながらまたかうした謎をくりかへします。

――子さん、それなら、あなたの望まるゝそのブランコからとび下りて見ますか、とび下りて!?

いま、このもの言ふ私の苦痛！親しき友よ一人なる

友よ！　この苦痛に染まつてお互に生きるべきが自然であつたのに…ね。

何だかもうはてしない空にものいふやうで、その言ふのは事實に相違ないけれど、彼方にどのやうな反應があります、どのやうな…わが生のはてにはたゞ一生涯を通じての濃きうすき映像を示してゆく死があるきりではないか。

――子さん、いつまでもいつまでもあのお手紙のやうな、唯一人、唯一人なるその悲しみにむちうたれて生きようではありませんか、實在をはなれて私共にどこに王國がありませう。

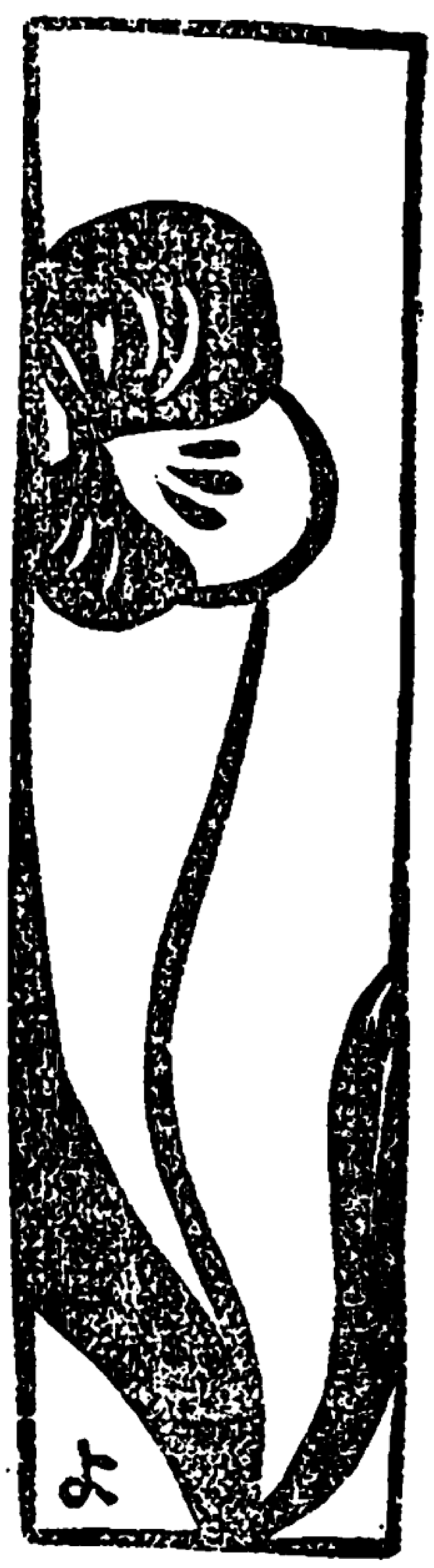
苦しい時、悲しい時、たよりない時、あの無邪氣なプリミチブな、新らしい私どものふむ道はほのかに見えてくるではありませんか、私は小さくともダイヤモンドの實體を尊とびます。

――子さん、ねがはくば我が死の時、その一瞬時にわが過去すべての印影を明らかに見きはめたい！　いつもいつも死に對等して生きてゐるといふ自己の鮮やかさを保ちたい。

――子さんまたつまらぬ事ばかり長々とかいてしまひました、私はこのごろ、近いうちに來るべきお產を思ふと、何だかすべてのものに一段落つけてしまはなくては氣持がわるいやうな事ばかり考へられますのでそのみじかい時日に爲すべき事の多いのにまごついてをります。

母となるべき私の負ひ目――このひきまはさるゝ自然の力に從順である自分――たゞ一路、こんな青い色をたよりに生をつゞけてゆくのであります。

寒いがお身體をお厭ひなさいませ、信濃はまだ雪が深くあります、空想家の私はこの寒い冬を嫌つて旅を戀しく思つた時もありました。ではこれで…その後の御消息をおまち申してをります。



心もそらに

望月れい子

心もそらに

心もそらに
ひねもす、よもすがら
さらぼへるたゞしひの
空しき怨恨と悔恨とに
うなだれて、やをら
歸り來る時

いとせめて胸かい抱けば
しみ〳〵と我身一つのてざはり
心にしみてうら悲し

木立の奥に人しれず
轉びて默す殼厚き
木の實にさしも似たること

しみ〳〵と我身一つをかい抱けば
寶玉のごと、たふとく、あやしく
木立の奥に人しれず
まろびてもだすからあつき
青き木の實に似て悲し

春の曲

春のかはたれ
歌舞伎見のむれのにぎはひ

一番太鼓、鼕々となりわたれば
前ざしの銀のひらめき
引幕の匹田鹿子のゆらゆる丶春のかはたれ

春のかはたれ
歌舞伎見のむれにまじれど
情熱の心のうめき
いづくにか逐ひやらん
一番太鼓、鼕々となりひゞけば
なやましき若き心はめざめ來り
なべてのなげき柔かき
乳房の上につどひ來なる

春のかはたれ
歌舞伎見のむれのざわめき
ひそやかに白き手をもて抱かる丶
二つの乳房
しなやかの呻きのしるし

あ丶それこそはいたはしけれ。

涙のしみ

色あせし紅絹裏に
おろかしく、くちづけつ
いつよりかした丶り落ちし我が涙
若き日の烙印と
こちたくにじみあるがゆゑ。

生のあぢ

一日々々に抱きしむる生の味
たましひはよろこばしさに
興奮の一をどり
刻々に抱きしむる生のあぢ
濃くうるはしき毒の汁
湧くがごとくに胸にゆる。

林の春

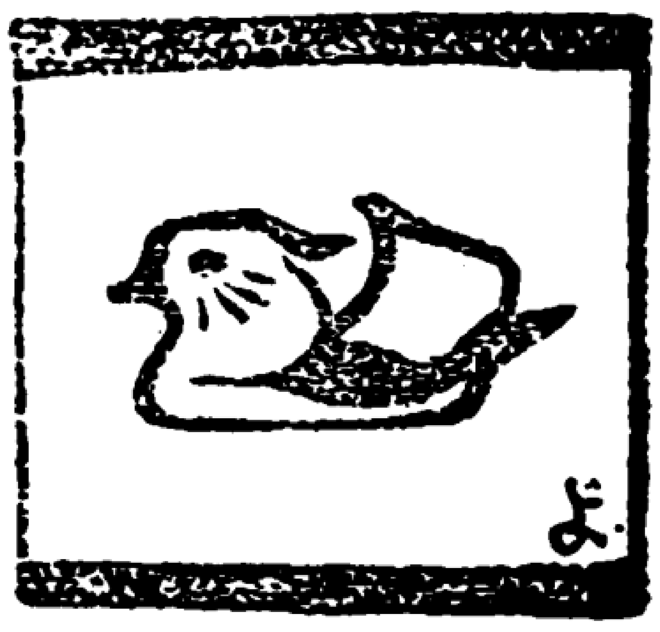
彌生のはじめ、南の國から暖い風が吹いてきて、五六日の間に野邊の雪はすつかり消えた。長い間雪に押しつけられてゐた麥は、久しぶりに暖い光を浴びてゐる。野の道を友と私は風に壓しつけられてやつと歩いてゐるが、林の中へ入るとほつとした。林の中は實に靜かである。逕を奥へ奥へと行くにしたがつて堪らなく春といふ感じがした。

右の方は手をのばせば去年の松かさも一昨年の松かさも自由に取れる若松林であるむかふの大松林にさへぎられた餘り風が、微かに淺緑の梢を搖がして、肩のあたりでしやう／＼と音がする。林の中を透かしてみると、ちら／＼と形つきの樣に光が射し込んで、遠く奥の方は靑く暗くなつてゐる下には赤い黄ろい靑い、スギゴケ、クサゴケが果しなく生ひ茂つて絨氈そのまゝである。あすこに少し、こゝに少し、半ば氷に化した消え殘りの雪が、蘚苔の香に包まれて、白く點々としてゐる。微風は時をりハタと止む、その相間に、林のずつと奥の方から小鳥の囀づる聲が幽かに聞えてくる、鈴を轉ばすやうな、樂しさに堪へられないやうに、色々の鳥がにぎやかに鳴いて、夢の國から聞えてくるやう。アー、と私は思はず立止つて耳を傾けた。私は始めて小鳥の聲をきいた。何處の邊で鳴いてるだらう鳥の姿が見たい――　・　・

友はずん／＼行き過ぎようとする。「あの雪をたべたいのよ」と私はずん／＼鳥の聲のする方へ入つて行つた友は「私にもネ」と云つて待つてゐる。

若松の梢を分けてゆけば、身もサツとちゞまるばかり、耳もとに妙なる松風の音が起る、滑かなこけを踏んで一歩一歩小鳥の國へ近づいてゆく、淸らかな空氣は冷たく下駄を埋めて足に障るこけは一層冷たい、キーンといふ細い、しかも高い一聲が並木に細葉に響き渡る、ひとしきり、鳥の聲が止んだかと思ふと、すぐにかしここゝに聲がして、忽ち一齊に鳴き交す。

百瀬美水



色彩のある生活

蔦代

昨夜はたうとう一睡もせずに熟考へて見ましたけれど、私には如何しても嫁く氣になれません。

何故？つてまあ貴女もよく考へてみて下さいまし、朝から晩まで襁褓の洗濯や、お勝手の雜用なんかで、この大切な青春時代をむちやに過してしまふのはあまりに本意ないぢやありませんか、あまりにノンセンスぢやありませんか。

そりやあね、私のやうな平凡――いゝえコンマ以下の女ですもの、理想もホープもあつたものぢやありませんけれど、でも矢張り女は女、人並の女を氣取つて自由の開放のと叫ぶこともありますのよ、あら、お笑ひ遊ばさないで頂戴、僞らぬ私の眞性の告白なんですから。

それを人妻てふはかない名に束縛されて、しちやかましい姑の機嫌や、氣むづかしい鬼千疋の機嫌をとつて、終日をお勝手の隅で暮したくはありませんわ、第一、貧弱は私には到底堪へられませんものを。

貴女にした處が二六時中臺所のすみにくすぶつて高等下女で甘んじてることは出來ないだらうぢやありませんか。

そんなら立派に社會に活動しろと仰しやるの。

それは何より私の望むところですけれど、悲しいかな、私にはそれだけの才がありません、素養がありません、徒らに華やかな行手の夢にあこがれつゝも、飛ぶすべをすら知らぬ哀の小鳥は、朝な夕な南の空を眺めては只空想の翅に身悶えするばかり。

日毎に運ぶ針のみち、五色の絲に縫ひこむ思ひも、女の業と諦めて柔順に服從してゐる皆さんのお心がうらやましい、あゝ私には何故まつすぐに女の道をふむことが出來ないのでせう。

活花にまれ、お琴にまれ、習ふといふのはほんの義理、父母への孝行世間への手前、せうことなしにやりはやつたものゝ、花瓶に四季折々の花を挿すでもなければ、お琴の袋は塵にまみれて他の見るめも耻かしい

だから人はいひますのよ、××の娘は學者にでもゆかなければおつゝかないつて‥‥。

始終机にばかりかぢりついて、つまらぬ雜誌は讀む

暇はあつても、針一つ持つでもなければお花一つ活けようともしない私をいろ／＼評する人はあるけれども餘計なお世話ぢやありませんか、あの人達の御厄介にはなりませんもの。といつたら母様がまた御心配なさらうけれど。

そんなでお嫁にいつて納まりますか？

母さまのお叱言とは千變一律、例によつて例の如し。納まらなければ結構ですわ、私は獨立しますもの、勝手におし、お前は親を嘲笑する。

勿體ない、何のまあ嘲弄なぞしますものかた―たひとりの母様ですもの。

女の子に學問は禁物だつて、

そんなら寧そ一丁字も知らないで、煩悶もなく悲觀もせず、華やかな人生の春を意識もせずに過してしまうはうがどんなにか幸福だか知れませんわ。

お仕事やお琴習つてさうして美しう着かざつてお嫁にいつて、男子の玩弄物になるのが世の女のすべての運命ならば仕方もないけれど、長くもない人世を質素にくすぶつて埋れ草となつてしまふのもあまりに生甲斐がありませんわ。

近頃女優熱の盛んになつたのも、大方さめた女の多くなつた故ぢやないのでせうか？

女優といへば帝劇とやらの××子さんなどは、お子さんもあるときくのにあの若々しいデリケートな姿に看客をチヤームさせてゐるではありませんか。

そんなに羨ましければ貴女も女優になつて見よと仰しやるの？サンキユー、女優は私の最も理想とする所ですけれど、この御面相でこのスタイルぢや多くの人を悩殺するどころか、お腹をかゝへて逃げ出されないのがまだめつけものですわ。

ほんたうに思へば獨立などゝいふ事を口にする資格はないのだけれど、學問ばかりで身を立てるのが獨立ぢやないでせう。でらんなさい○○さん――尋常科の時たしか私達より二級上だつた○○さんや、一級下の△△さんなどは、職業こそいやしいけれどあゝして立派に獨立してゐるではありませんか。

それを思へばまだ私塾に通つただけが私にはすぎもんかもしれませんわよ。とはいへ、同じ獨立するにしてからがなるならば華やかに色彩あるライフを送りたいと思ふのは私ばかりぢやないでせう。

とはいつでも私のやうな女は矢張りあたへられたる運命に服從しなければならないのでせうか。

勝ちたいわ、克ちたいわ。

なまじひに嚴格な家庭に育てられたばつかりに、放縱の生活を欲しつゝも、家を逃れ出る術をすら知らぬ處女は徒らに人に背き、世に拗ねついましめられたる束縛のつなをたちきらうともがくけれど、甲斐なき反抗は何の反響も起さない。

小さなる反抗を捨てゝ大なる自然に服從せよと、いつてくれる人はあつても、おやりおやりどこまでも、私も力になつてやらうといふ人はひとりもないのですもの、世間から、いゝえ人からみはなされたる可憐のをとめよ!!私は自分を憐まずには居られません。

あらあなたは反對だつて　。

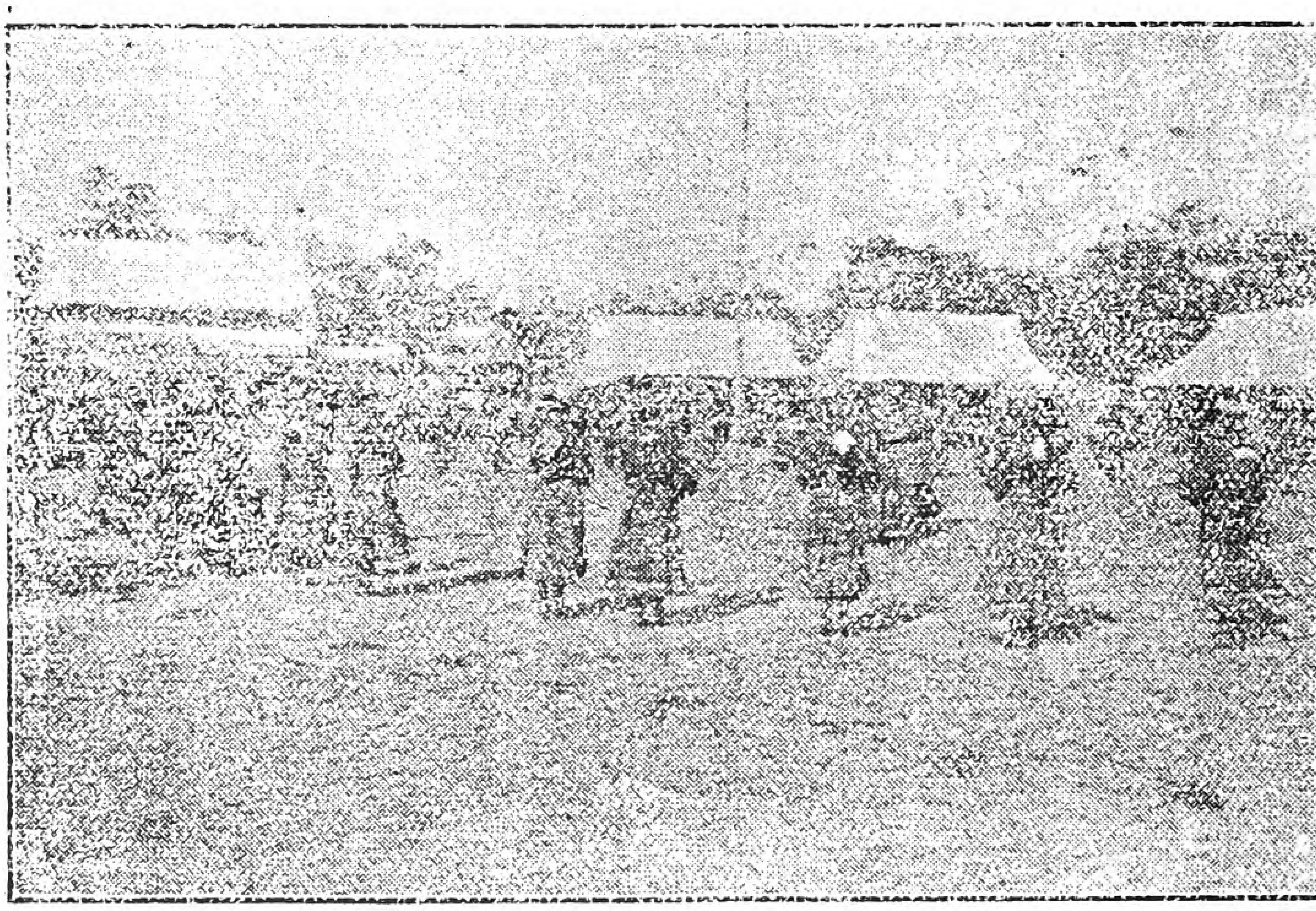
高が片田舍の低級の一處女がそんなロマンチックなことをいつて生意氣だと仰しやるんだわね。

けれど、結婚に何の誇がありませう、人妻に何の色彩があるでせう、結婚を唯一の誇としてゐて多くの友すら後悔してるぢやありませんか、そりやもう多くの中ですもの、ひそかに得意としてる人もありますわ。

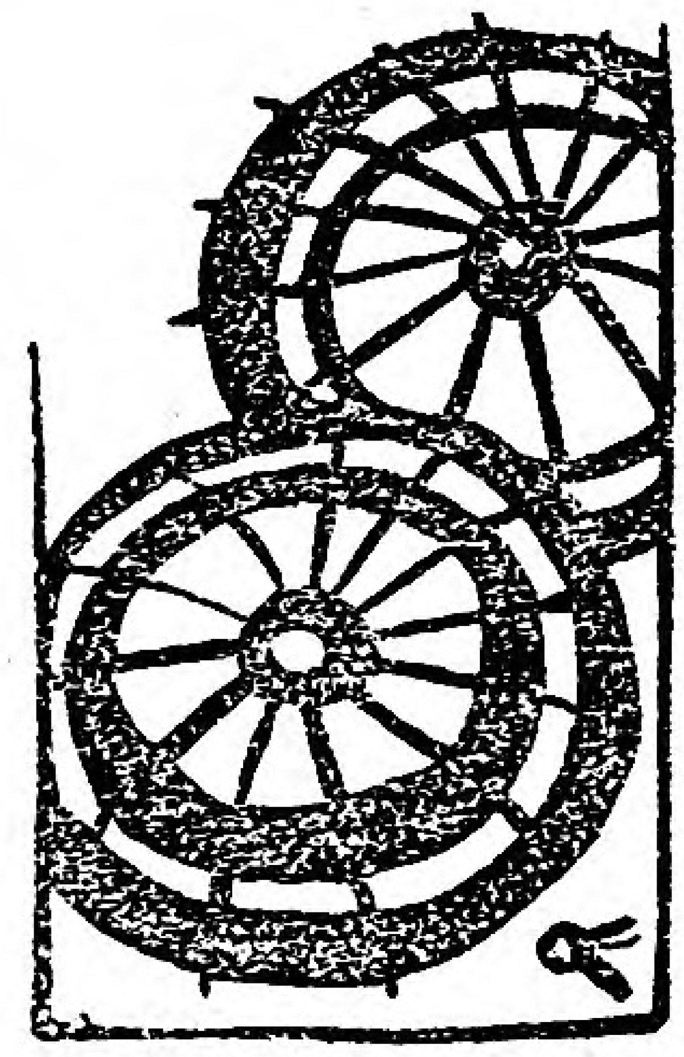
長い間の獨身論を撤回してしまつて、新婚の夢の甘さに醉ふてゐる一人の友はこんなことを言ひましてよ。

馬鹿らしい私何故獨身論など稱へたんでせうつて。そしてつまらないあんな主義なんか決して抱くものぢやありませんよつて――。

未來永劫男心に變りがなく、自分もとこしへに盛りの花であつたなら、此上の幸はないでせうが十中の八九はやがて囚はれたる人妻の悲慘な運命に、人知れずたもとを濡らす小夜時雨、それでなくてさへかよわき女の身には思つたより業務の複雜なのに得たへで、又もとの自由生活がてぴしくなるでせう。



運　動　會



續短草怨

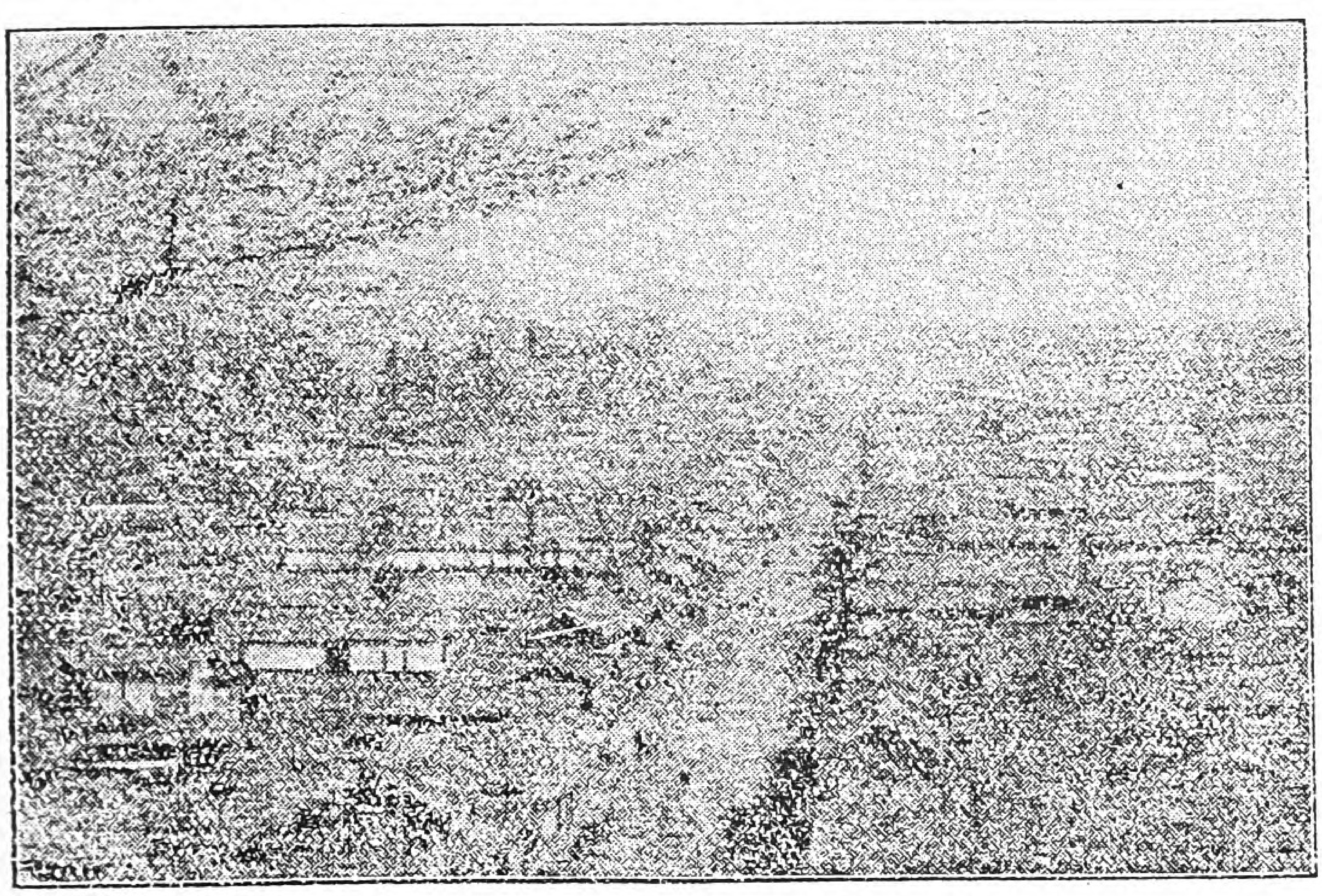
日かげ草樣に

みぐさ

現代婦人にお出しなすつた日かげ草樣の短草怨、拜見した時は思はず、微笑ましたの、ホヽヽ御免遊ばせ人の悲しみを笑つて過すなんてずゐ分失禮ですわね、けれど私も御同類、貴女の仰居る、背高入道ノッポーなんですの、それによく昔から、女は二十歳の御飯前迄伸びると云ひますから、此の上また高くなるのかも知れません、あゝ厭、厭、ノッポーなんていふ言葉世界中に無くなればよいのに、聞いてさへ身慄がするほどですもの、まだ此の上伸びるなんて云へば、反對に壽命が縮つてしまひますわ。

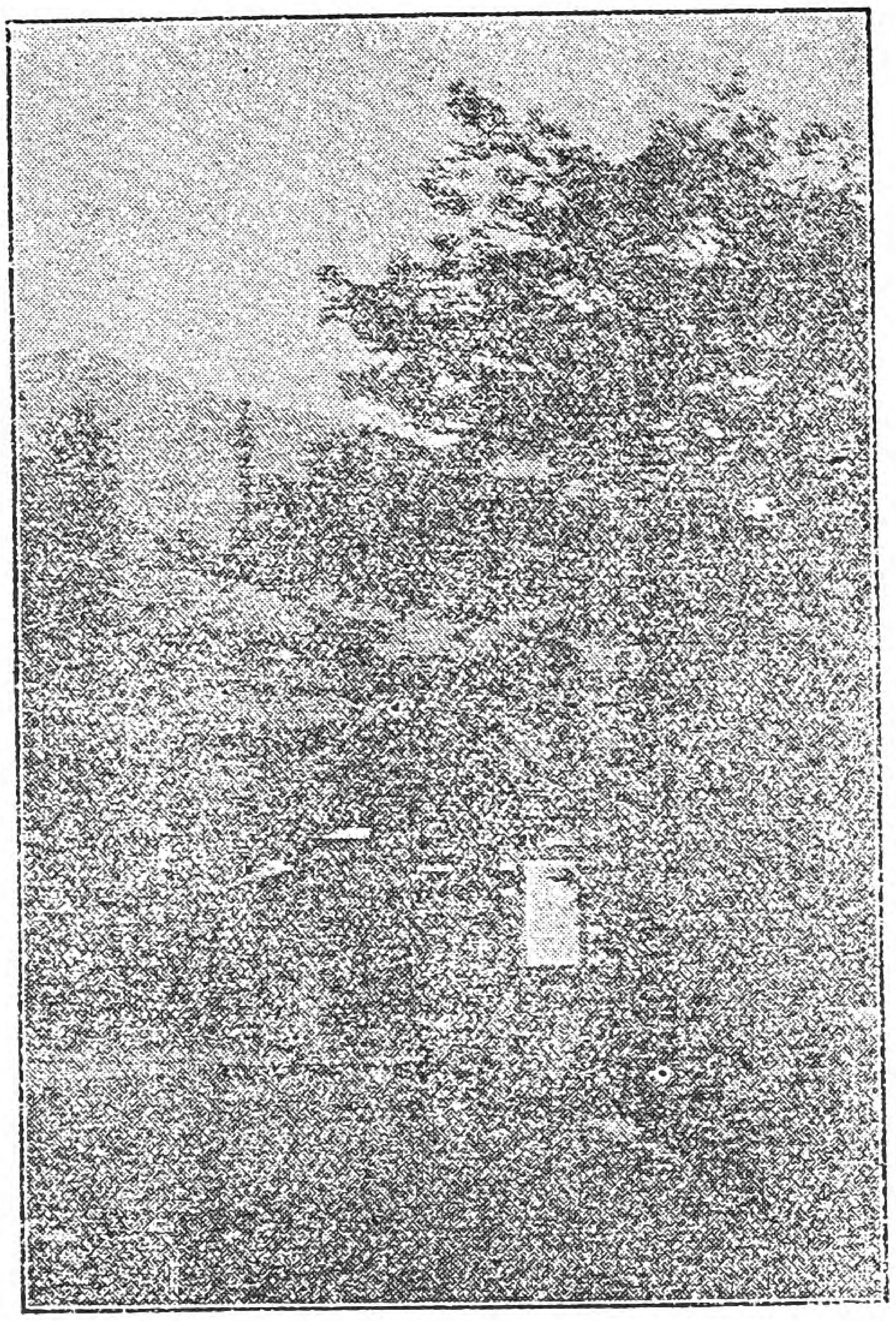
夜等も床に入つてゝも、充分に足も伸ばし得ず、何かの拍子に、布團の横へ伸ばした足の、ふと冷たい疊と觸れてさへ、まあ私は布團の丈よりも長いのかしらに驚いてもう長く伸ばして見るのも恐しく、思はず、縮めてしまひます、朝、着物を着替へるにも、四尺もある常着の揚と云つてはほんの少しばかり、かくしてもかくしても腰紐が、出てしまふのですもの、たうとう何につけても其心配ばかりです。

あゝゝ高い、高い、と始終心配し苦にする



足利町の全景

心の、自分ながらもう厭だ、寢ても起きても、物盗みに來る時のあの恐しい、追つても追つても逃げ樣ともしない、執念深さうな、あの猫の眼の樣に堪へず、つき纏ふ高いといふ事を苦にする心にもう倦々した、何か安心させて此の心を落ちつける言葉は、無いものだらうか、高い姿の何處かに、美といふ、此のいらだつ心をしづめるにふさはしい或影が見出せないものだらうかと、一人悶えた末は、私ばかりぢや無い、外にもまだあるに違ひ無いと、學校のお友達、果ては同じ町の内の娘さん達を、誰彼と數へて見て、其處に一人でも高いと思はるゝ人があると、何んとなく心強くうれしさをおぼえる、同じ雜誌の口繪を繰つても、立ち姿がすぐ眼につきます、美しい人か脊の高い人であつたり、高い人の姿が美しければ、自分の事の樣に嬉しい。と今迄心配して居た心もいつか消えて其の畫にいつ迄も、いつ迄も見入つてしまひます。廣い世間の何處かには、やはり私の樣に、高い背を心配して居る方があるんだ、今迄自分一人の事の樣に心細く思つて居りましたのに。增刊のページ、心なくハラ〱と繰つた時ふと眼をつけた所に、「あゝ私は世に云ふ背高入道ノッポーなんです」と、いふのを讀み初めて思はず、微笑んだのも、同じ運命の人を見出した心強さ、何となく安心した樣なうれしさがあつたのです。



兵庫縣高源寺の塔

背の高い人は何にしても損です、島田になど結べばそれこそ、そこいらの電信柱と間違へられやしまいかと、氣おくれがして結ぶ氣にもなれませんし、歲だつてほんとに見られた事はありません、最も顏の見苦い人は老けて見ゆると、云ひますけれど……

人が來て「お宅の娘さんは大きくつてゞす事」と云へば、お母樣はきまつた樣に、「背ばかり高くなつ

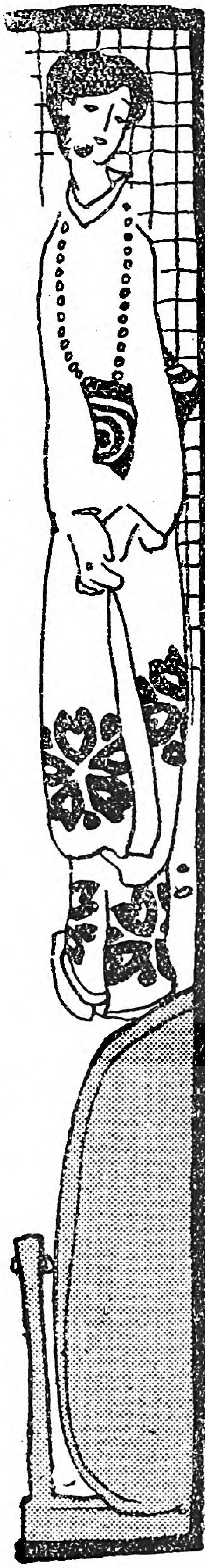
ても何んにも出來ないで困ります」と、きつと云ひます、「いゝえ高い方がお立派でようございます」とほめる返事に困つて、一時の云ひのがれに、人の嬉ぶ美しいと云ふ事に、まぎらせたんぢやないだらうかと思ふのはひがめなんでせうか。

そりやなるほど、あまりに、小さい人も立派なものではありません、お友達と並んで歩いても、いつも小走りに追ひ縋らなければ、後れて仕まふ樣で困りますわ、神樣に、人並はづれて小さい人と大きい人と、どちらを選ぶと與へられたら、まあ大きい方を選びます、さう思つて仕方なく與へられた運命だとあきらめて居りますの。

同じ道を行くにも、小さいと笑はれるよりは、大きいと驚かれた方が、まだよいなどゝも思つて見ます。

夢二式、と云へばすぐ、手や足の大きい、腰揚と裾の間の長い、背の高い美人が思ひ出せます、手や足の不格構に大きいのも、足の長いのも、すべてノッポーな私達には、嬉ばれる繪でした、それに一時は、夢二夢二で大持だつたものですから、どんなに、心強かつたか知れません、それだのに此の頃の繪はみんな、背が低くなつてしまつて、とんだ同情者を一人失つた樣に、悲しく思はれます。

姉樣など「妹のくせして、遠慮もなくよくこんなに大きくなつたものね」と、今更の樣に、見上げながら仰しやいますの、ホヽヽ、遠慮もなしに、ブランコであれテニスであれ、それこそ一日でもテニスコートに、私の姿が見えない時は、お天氣が變る事かと、皆樣が心配なすつたと云ふ位、一時はテニス狂と迄云はれた程の私、お轉婆した罪なんでせうか、誰れが自ら好んでこんなノッポーになど、なるものですか、なる事なら、三寸ほども低く、そして肩もこんなにいかつて居なく、すつきりとなで肩の、中肉中背の美人と云はれ度いのは山々なんですけれど、例の氣性の私、そんな事はおくびにも出しやしません、かへつて強く、「ホヽヽゝ姉樣はまたどうしてそんなに、低くつて居らつしやるのでせう　私、姉樣つて、下むいて呼びかける時なんかたまらなく痛快をおぼえますよ」「まあ厭だ、そんなに自慢するものぢやないわ、實際よ、自慢する丈こちらの胸は、苦しうございます、敗け惜しみが強いのですわ。



帝劇　女優試驗を受けし記

すゞしろ

❀車に乘ると胸がどき〳〵

うつすらと曇りをおびた初秋の空から、やはらかな日の光りが縁に流れてゐる。そこへ鏡臺持ち出して、後から鈴やが衣紋直して呉れるうち私は最一度前髮搔き上げる。楓の木の上に美しい小鳥がたつた一羽細い細いうちにどこか錆びがゝつた聲で鳴いてゐる。

私はやつと此處から退いて時計を見ると、ま、もう九時二十分、隨分遲くなつた！と思ひながら袱紗包みの舞扇もちながら、『では母樣行つて參ります』

『ホヽ、今日は珍らしく度胸がよい事、ではマア氣をつけてね』と仰しやりながら玄關まで送つて下さる。

ヒラリ俥に乘るなり待ちあぐんだ俥夫はすぐに梶棒上げる。まあこの動悸のひどさ、右手をそつと胸にあてゝ強いて氣を靜めようとしても……やつぱりだめ、私は呼吸がせつなくてならない。俥は大通りへ出る。

かなり派手作りした私は兎角道行く人の視線を避け難い。羨望！嫉妬！嘲笑！こうした色を含ませる人の眼の的になる私は堪へられない程厭やだ。

紺地に荒い白絣のお召縮緬の着物に、紅匹田の雲を

散らした水色の紋羽二重の帯をおたいこにしめ、薄墨で秋草畫いた白絽地の襟に金剛石一つ入れた酢漿ぐさのゴールドブローチでとめ、そして袖ふりや裾に襦袢の淡紅色がしなやかにこぼれる。いつもより少し厚加減にお化粧した顏を、人が見て可笑くはないかと、氣恥かしい氣がしてつひこゞみ勝ちになる。

❀榮龍さんや老松さん

私はどうしてあんな處へ行く氣になつたらう、眞實に我身ながら御苦勞樣な、これがもしか萬一及第したとて女優になどなれる境遇でもないし、周圍の事情がとても許さないものを‥‥考へると眞に馬鹿らしい。けれどまあこれも氣保養の一つと又そんな場所へ出るのも何かの話の種になるだらう、などゝ勝手な理屈に枉げて、いゝわ／＼思ひ切つて見聞に及びませう、又母樣も只笑ひながら出して下さるのだもの、此頃はなかなか道樂氣が出てゐらつしやつたこと！、こんな事考へながらひとりで煩熱くしたり、ほゝ笑んでみたり。

フッと氣がつくと俥は博品館の横から金春通りを曲がるところ、私は大分久しぶりなので何だかこう嬉しい氣持ちでゐると、アラお律ちやんとお袖さんと、思つた間にもう摺れちがつてしまつた。惜しい事した、向ふでも見てゐたのに‥‥、お律ちやんお袖さん、私は何で忘れませう、私は貴女達と濱町へ通つた時代が無性になつかしいのよ。榮龍さんや老松さんと名乘るやうになつてからは沁々會ひもしなかつたものを、お稽古歸りか襟付きの縞物着てゐたやうだ銀杏がへしのふたりの顏がいつまで眼にちらつく。低い家々の軒燈の文字讀む間もなく俥はどん／＼通りぬける。私の氣のせいかけふの俥は早くて／＼仕方がない、いつかお堀端へ出てしまつた。胸の鼓動の高なる事、どうしよう／＼どうしませう、續けさまに小さく呼んでゐる間に梶棒がとまる、周圍にはもうお抱へらしいゴム輪が四五臺止まつてゐる。歸りは電車ときめて俥を歸す。

❀「貴女のお名前は‥‥」

こゝが帝劇事務所兼技藝女學校？なのかしら、何だか狹ッこましい綺麗ならぬ入口に書生がゐて『下駄も洋傘も其儘でこちらへ』といふ。いはれたまゝには入つて行くと、眞四角な室があつてそこに圓テーブル圍んでお洋服の方が二三人、



『貴女のお名前は？』

『櫻島で御ざいます』といふと、

『ハアでは瀧代さんと仰しやいますか』

『ハイ』

『ではその廊下から左へ曲がつて二階へいらしやつて下さい』といふ。一禮して私は階段の下へきてみると樣々の色彩美しい履物がずらりと脱がれてある。緋に紫に綠又は鼠

天鵞絨の意氣なのやら、臆病な私は云ひやうのない恐怖に身内がすくんでしまつた。そうして何だか針金のやうなもので堅く〳〵引きしめられてゐるやうな苦るしさを味ひながら、いつまでか立つてゐたけれど、さりとて果てしもないので、思ひ切つて、段を登りつめると、すぐそこが六疊程の茶ぼけた疊敷かれた和洋室で、ずらりと並んだ束髪やお島田の君達は、女優志願の面々とひと目に知れる。その中に只ひとり若い男が交じつてゐた。その人は幸四郎さんの弟子の錦×さんといつて、お稽古友達だつた人、私は思はず俯むいたと向ふではさりげなく、『どうか彼室へ被入つて下さい其處では困りますから』と仰やる。私は仕方なしにそこを立つて次の間の十疊ばかりの處へ行くとこゝもゝう十數人かの方達が、三月のお飾り棚のやうに列んでゐらつしやつて、私がお辭儀すると、室中の方は皆一度に頭下げられて、その極りのわるさ。今上がつてきた階段のすぐ横手になる扉の内から太棹の音が洩れるもう試驗されてる方のらしい。私は沈と耳澄ましてそれを聞いてゐるうち段々と氣が落付いてきて少しづゝあたりの樣子が見られるやうになつて來た。志願者の御當人達の外に、その附添の方々も七八人見える。皆樣のお召物は美しいけれど、御容姿の點に至つては私が内々想像してゐたやうなのとはあまりに違ふ。そんなに見惚れるやうな方はゐらつしやらない。帝劇の浪子さんや德子さん位な方は……先づ〳〵見當らない。要するに並以上にすぎないだけ、中には如何に贔負眼に見てもおさんどん――のやうなのがひとりふたり。

❀お隣の方お向ふの方

私のお隣りの方がお茶を注いで下すつた。この方はお見かけしたところ二十六七位の御年配で體量二十貫お有りになりさうな美事なお體格で、縞お召のお着物にお納戸色縮緬の紋附のお羽織で、髪は總髪の小さな銀杏に結んでゐらつしやる。それから私の左手にゐる方はと見れば、これはまだ肩上げ深いおみ帶を立矢の字に結んだ、一體のおつくりが上品なお十六位なお孃

様なれど、お顔の丈けの詰まつた別に取どころのない人並のお顔立ち、附添には強さうな乳母らしい方。それからお次ぎの方はこれは又此處の中では群を抜いて美しい方、ふつくりと澤山なお髪を格好よくウィンナに結んで目鼻立ちなら頰の工合など先づ申分なくてゐらつしやる。殊にお指にはめた大粒のダイヤモンドの素晴らしさそれも兩のお手にまで：：：如何にも富家の令嬢らしいけれど、それにしてはお召物の工合から、お附添のお姉様のおつくりが餘りに意氣だと思ふ。お年はお十八位、それから次ぎのお隣は頗るお脊の高い方で、お眼のそれは〳〵大きい方、女優にはふさは



しい方なれど、強いて難を申せば少々洋人くさいやうに思はれる、然し無論及第組と受合はれる。お年は二十一二かしら、それから又兩人並んで絶えず親しさうに話してゐる十七八の美しい方がある。おひとりの方はお脊の低いのが缺點だけれど、お顔のきちんと整のつた冴え〴〵した方、其かはり品もなく、しとやかとも思はれない蓮葉らしい、そして髪に紅ばらの大きな簪さして、お召物も銘仙らしい、もうお一方の方は矢張り銘仙に羽二重の帯でお顔はいさゝか仲低なれど、睫の長いそれは實によいお眼してゐらつしやる。私はこのお兩人にどうも見おぼえがあるやうな氣がしてな

らないので、ついその方達ばかり見つめてゐると、私の右の肥えた方が袖引いて、『貴女あの人わかつて？』といふ、『さあ、私何ですか何處かでお目に懸かつた事があるやうな氣がしますけれど』と答へると、『その筈ですわ、あの人達は帝劇の案内人ですよ』と教へられた。私は道理こそとうなづかれた。女案内人！常日頃女優生活の華やかさを見知つて羨ましくなるのかしら私は案内人ときいて美しい容姿ももう見覺めがした。けれどまあとにかくこれだけの方は私の眼に氣持ちよく感じられた方達、但し右隣りさんは別だけれど、この外にはひどく髮の毛のほつれた白粉氣のない常着其の儘といふやうなのや、恐ろしく奧樣ぶつたのやら、三十近そうな年頃で鼻の先きのばかに眞圓い人だの、仰山な模樣染めた紋付をお引摺りのやうに召した田舍の花嫁樣みたやうな方やら、それは色々な人の集り。

向ふの扉が開いて試驗のすんだ方が出てゐらつしやるその後から店員じみた風の男が出て、『エヽ、次ぎは××さん』と姓を呼ぶと、『ハイ』と優しく返事して、扉內へは入る。試驗濟みの方はコートきて階下へとおりて行く。

❀試驗待つ間の無駄話

試驗場から舞臺を踏む足拍子と冴えた三味の音がきこえる。松のみどりらしいなと想ふ。こうして時の經つにつれて皆樣段々打とけて知らぬ人同志でも話が初まる。

『一寸貴女踊どちら？、アラお三味線植木店ですの』

『私踊は皆無なんで御座いますよ』

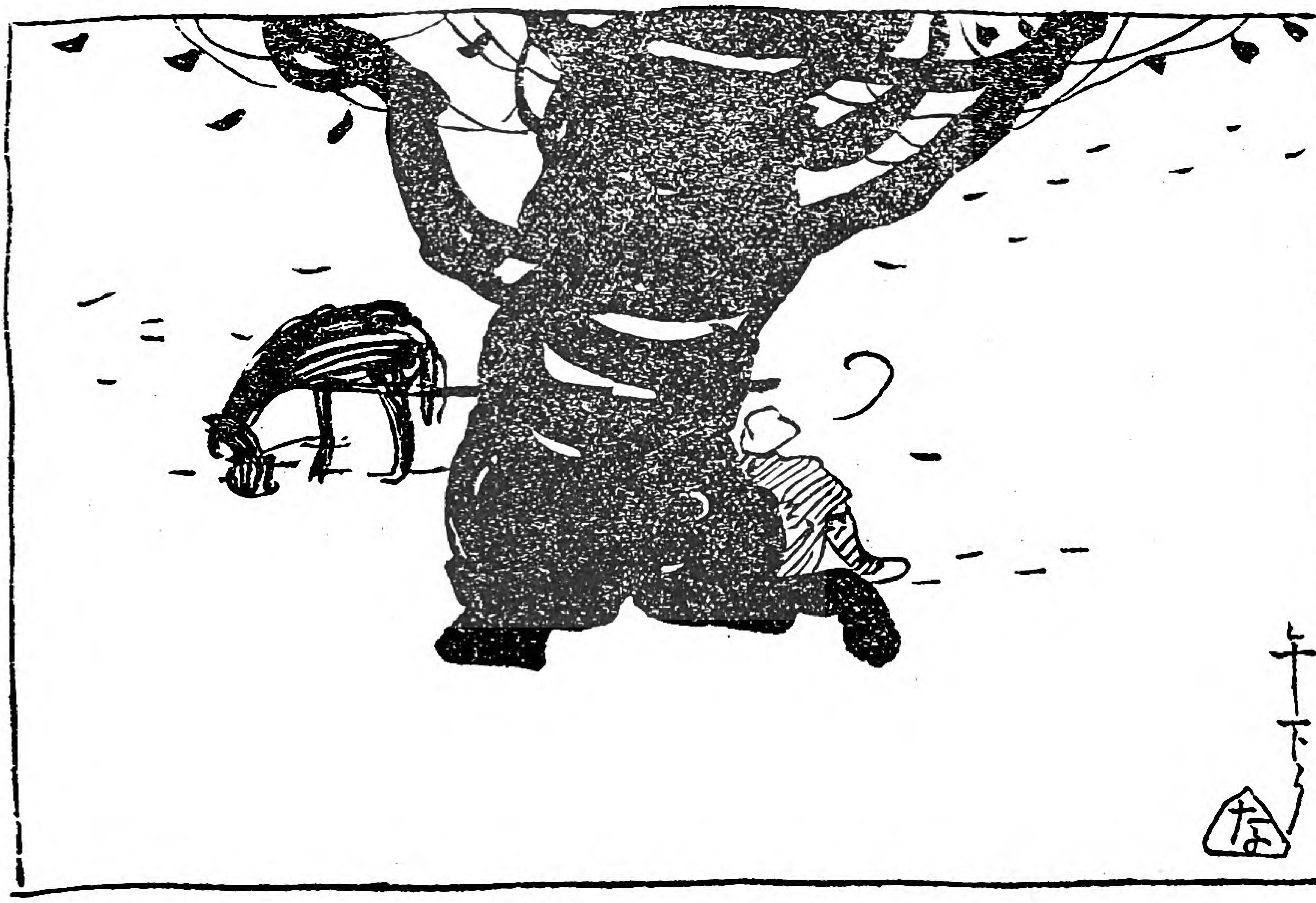
『まあ貴女そんなにおやりになりますの、うらやましい』

『私八年前に淸元やめましたきり』などゝあちこちからこんな聲が聞えて大分賑やかになる。

階段をバタ〳〵驅け登つてきた二人連れ、それは、お年のかなりなお母さんらしい方と、十七位なまるで雛妓のやうな風姿をした方、すると先刻の案内人の一人はすぐに出て行つて、何やらひそ〳〵話かけて、如

何にも親しげに手を取り合つて此室へは入つてくる。とおき試驗場の扉があいて出てきた羽織袴の男、それは技藝學校の師範役の鈴木さん卽ち尾上梅助と直に感づいた、そして『お母さん大變遲かつたぢやないか』今來た二人にいつて又すぐ階下へおりる。

『私は餘り早すぎると不可いと思つて時間を計つて來たんですよ、マア〱皆様のお早いこと』などゝまるで藝妓屋のお母さんといつたやうな調子ぶり、娘さんは髪を廂にして大きく結んだ水色のリボン挿して、お召物は紅入りの友禪縮緬、帶もやつぱり派手な



のを大きくお太皷にして、歩みぶりなら嬌態作る樣子なら、ものゝ云ひ振りまでどうしても芳町あたりの藝妓屋の娘さん――

私の右の人は又さゝやいて、『あの方ネ、村田嘉久子さんの妹さんらしいわ』といふ。私は『えつ？』と驚き聲した。

『えゝ確にそうよ、そうに違ひないわ、みね子さんていふのよあの方ね、この前の試驗の時には落第だつたつて話きいてよ。どこがいけなかつたのか知らないけれどあんな好い姉さんがゐらつしやるのにやつぱりだめだつたのですから、だから帝劇では不公平は無いのですつて』私は眼を見張つたまゝ聞いてゐ

た、『ネ一寸そしてどんなに多藝な人でもずゐぶん落第があるのですつて、一體どんなのを取るのでせうね』と泌々した調子で仰しやる。

隣室から錦×さん、お下髪の可愛らしい方を連れてきて村田さんの御連中に引合せてゐる。村田さんの組は五六人圓く輪になつてお話がもてゝゐる。

『私ネこんなに肥えてゐるでせう、だもんだから幸四郎さんてばいつでも私のこと肥つてゐる〳〵つていふんですもの、眞實に厭だわ』と仰しやりながら、肩の邊を推へて艶な表情をなさる村田みね子樣、成程隨分肥えてゐらつしやると私も思つた。そう申しちや何だけれど、私はこんな方きらひ、女優向きぢやない、雛妓向きだ、然し今度の及第はうけ合ひと思ふ、何故つて、それは、きつとのお見込みなればこそ二度までも……なのだから。

❀サア大變科白は知らぬ

そのうち新らしい方も四五人ふへたし、試驗場の出入も繁しくなるし座は段々亂れてきて、座を立つて、便所へ行く方、紙おしろいで顏直す方。

試驗濟んだ年增の人はばた〳〵と馳け込んできて、『私眞實に厭やでしたわ』と大きな聲なさつたので、皆樣傍へぐるりととり卷いて、『マアどんなですの?え?』と詰めよせる。

『アラ、科白もやります?』

『マア、新派と舊派ですつて?、サア大變』

『ちよいと、どんな事?、マア〳〵二十四孝の八重垣姫ですつて?どうしませう私知らないわ』

『否え、書拔きが置いてありますの』

『でも讀めないと困るわ』

『かながふつて有りますわ』

『ちよいと、新派つてどうするの』

皆樣は急に大騷ぎなさる。何しろ踊、三味線、義太夫、琴、と有たけさせられるのだから一人濟むのもずゐぶん手間どれる。私の番なんかいつの事やらわからない、もう歸りたくなつてきたけれど、まあ折角今ま

でゐて、今更もどるのも詰らないから我慢する。

❀いよく私の番

もうお正午過ぎる時分、と思ふ頃階下から男が上がつてきて、『エヽ皆さんもう正午ですが、お辨當は如何ですか、洋食、日本食、親子丼でも鰻丼でも何でもそういつて上げます』と大聲でいひ立てる。私は喫驚した、まさかこんな場所でお辨當頂こうとは豫期しなかつた『サアく御遠慮なく仰しやつて下さい』とまるで唯御馳走でもして下さるやうだ。エヽ私も喰べましたわ皆様と御一所に、――



やがてのこと試驗場から、『櫻島さん、』私はハツとして立ち上る、遂々番が廻つてきた。

扉押しては入つた、そこは隨分な廣間で、その大かたを舞臺が取つてある、そしてその正面（舞臺の前）に置かれたテーブルとその周圍にお洋服の伊坂梅雪さんと、もうお一方が椅子にかけてゐらつしやる。そして脇に梅助さんが座つてそれから太棹控へた丸髷の方と細棹前に置いた水木？のお師匠さん。私は丁寧に手をついた。

❀清元は北洲、踊は山姥

『舞臺へお上りなさい』と梅助さんが身長計器をもつてお立ちになる、私の身丈は四尺九寸五分でした、伊坂さんはそれを直ぐに紙に記入なさる、そして卓上の上には私の戸籍謄本と志願書、履歴書がのせてある。

『では長唄をやつて下さい』と伊坂さんが仰しやる、大きな舞臺の眞中へちよこなんと座つて三味持つ間のわるさ、けれど私はもう度胸が据つてづん〳〵調子を合せ、大分勝手忘れたおぼつかない鶴龜の二上りを彈く、自分ながら思つたより撥がさばけて嬉しかつたが唄といつたらまるで聲が霞んでしまつて、どうにもならない。

『聲を聞きたいのだから思ひ切つてもつと大きな聲をして下さい』と仰しやる。これをほんの少しでやめて『序に清元も』と仰しやる。これをほんの少しばかり次ぎは踊なのでお師匠さんは撥取り上げて『何をしますか』と聞かれる。『では山姥を』といふと、『又山姥か今日ほど山姥のでる日はない、やつぱり誰も同じだね』と厭やに笑ふ。でも私の覺えてゐる物はこんなものなのだから仕様がありはしない。

『よしやひゞきの山廻り、四季の眺も面白や』までの一くさりで扇子疊むと、『では此處へお座りなさい』と指さゝれる、其處は舞臺のはな先で、科白書のせた、机のやうなものゝ前――。

❀『こんな殿御と妹と脊の……』

『貴女は舊派が好きですか、新派が好きですか?』

『どちらも好きで御ざいます』といつて退けると、『ハヽヽ兩方好きか』とお笑ひ遊ばす、すると梅助さんは『では私が二十四孝を一度云ひますからよく聞いてゐらつしやい』と仰しやつて、何だか皺枯聲で、『もうし勝賴樣、親と親との許婚、有りし樣子をきくよりも嫁入りする日を待ちかねて、お前の姿を繪に書せ、見れば見る程美しい、こんな殿御と妹とせの』といふ處まで。今度は私が云ふので、『義太夫を入れませうか』と仰しやつたけれど、私は拔きにして頂いてひとりでやる。すつかり八重垣姫になり濟して眞面目にやるのが

お腹で可笑かつた。次は新派でいつか浪子さんのなさつた『母』、『まあ何て奇麗なんでせうあの子が歸りましたら嘸喜こびませう』といふやうな云ひだしで少しばかり、これで私の試驗は全部終り。

『エーとそれでは聞きますがネ、貴女は次女ですね、そしてお父樣もお母樣も貴女が役者になる事を御承知なんでせうね！』『役者！役者！』、私はこういふ方々から役者！といふお言葉を承らうとは思はなかつた、何の誰も承知どころぢやないけれどこの場合故、『ハイ承知で御ざいます』と答へた。

『踊は勘右衛門さんですつて？どうしてあんな遠い濱町まで通つたのですか、何か目的が有つたのですか、それとも好きで習たのですか』

『否え別に目的も御ざいませんでした、好きで習ひました』と答へる。『では何れ御報知致します』

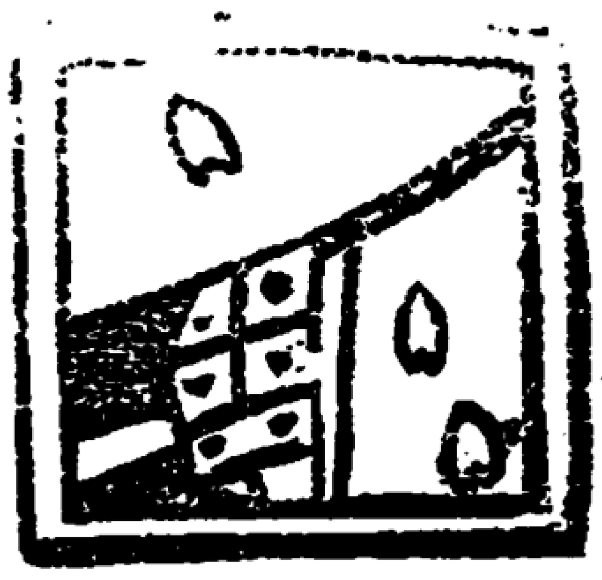
私はホッとして扉外へ出る。皆樣は直ざま私を包圍する、その中を切ぬけて『御免遊ばせ』の御挨拶もそこ〳〵階下へをり、以前の道から外へ出る。

太陽の光がにぶくなつて、やゝ冷かな風が身に泌みる。もう夕暮れ近くなつた。早く歸つてけふの事、母さんにお話してたんと笑はせて上げませう。

▲女子と尿▼男の一日の尿量は大抵千グラムから二千グラムまでゞ、女のそれは千グラムから千四百グラムまでゝある、又ブルゴアン氏は、男の尿は女のそれより含有物の割合が多いと云つて居る。

▲女子と窒息▼男は女より多くの酸素を取り入れる從つて男は女より多くの炭酸瓦斯を吐き出す、成程男の呼吸數は女のそれより少ない。併し之は男の肺が女のそれより遙に大きい爲である。故に男は女より早く窒息する。煙に圍まれた時など男は女より脆い。先年ゾラは睡眠中にストーブから出た惡瓦斯の爲に死んだ併し同室に寢て居つた夫人は助かつた、女は又酸素が稀薄で男の堪へられない所に於ても死なゝい。

▲女子と睡眠▼男は平生女より睡眠時間が少ない、併し睡眠不足に堪へることは遙に弱い。(心理研究)



女優になりたい

石田みどり

お母様は水澤の家へお嫁に行けと進める。失禮だが妾は大嫌ひよ！

水澤のノッポー息子さんなんかを生涯の夫と定めて土臭い田舎になんか子供を生んで、何の變化もなく空しく死んで行く事なんか、妾は大々嫌ひよ！

若い華やかな青春時代だものね。

女優！ね御存じでせう。妾の希望はそれなの。

來年と云はず今直ぐ、お嫁の話しのまとまらぬ中、默つて妾は東京へ行つちまうの……。

可いよ妾！女優にさへ成れゝば何んな苦勞でもするわ。廣い華やかな美しい舞臺に立つて、ノラだのマグダだのも演じて見たなら、何んなにか樂しい嬉しい事だらう。

ダイヤの胸飾り、黄金の腕環。天女のやうな衣物を着て、自動車で乘り廻はす華やかな生活！

あゝ妾は一日も早く那樣のに成つて見たい。

先日、帝劇の森律子孃が洋行なすつたつて、新聞で見たが、妾は眞實に羨ましかつた。

定めし英語や佛語を御存じだらうね。

妾もこれから一生懸命外國語を研究しよう。然し誰も教師は無し…、兄樣なんかは到底も駄目だわ。

あゝ然うすると仍然り東京へ出なければ成らぬ事よ！妾は今十七、來年は十八…十九、二十…と、三年もかゝれば大丈夫だわ。

あゝ女優！女優！好い事ね。

女優何て墮落職業だつて兄樣が云ふけれど、兄樣は頭髪をハイカラにして居るわりに、中の腦味噌が一世紀も二世紀も舊く出來上つて居るんだから、那樣馬鹿氣た事を平氣で云ふんだよ。

妾は、青鞜社の平塚明子さんのやうに、唯一人である、太陽である。日に新らしく成らん事を…。と願ひもし務めもして居る程、頭も心も新らしいのだからね。

一體妾といふ者を、家のお母樣なり、お父樣なりが何う見てるのかしら？

あんな水澤へ嫁るんだ何て氣が知れん。馬鹿らしい。

水色のマントを破つて、青い靴を履いて歩く妾です

よ。御自分等はいつも、ハイカラ過ぎる、突飛過ぎるつてやかましく妾を叱つてゝ、妾の性質をよく〳〵知り切つてる癖に…。

女優にまで成らうと云ふ妾ですもの。那樣事が突飛でもハイカラでも御座いません事よ！

此町の人が皆開けて居らぬからだわ。

どうして行かうと妾の自由、短い一生ですものね。いつまでも華やかに、若々しく樂しく送らん事を希望しますよ。

姉樣なんかは何うだらう？

窮屈な昔氣質な家庭にお嫁入りして、小供の三人も生んで、夫には劍突かれ、姑にはいじめられ、小供等には泣き立てられせがみ立てられ、何事も女の貞操、女の道と心得て、沒我的生涯――ひどく云へば奴隸。少し妾の言葉は過ぎたかも知れんけれど、至くつまらん生活をして居なさるのね。

それで居て姉樣はよくもまア默つてお居でなさる事と、妾には不思議で仕樣がありません。

世の中は斯うなければ成立つて行かないのかも知れん――と妾も折にふれて思ふ事もあるが、すぐまた持前の野性が顏を出して、姉樣のやうな淋しい憂い生活をして居る者を、一も二もなく罵倒して了う。

實際無意味な馬鹿々々しい、あつけない生活だもの。

若い日にある者は、あえて妾ばかりじや無い。皆が華かな常春のやうな事を思つて居るんだものね。

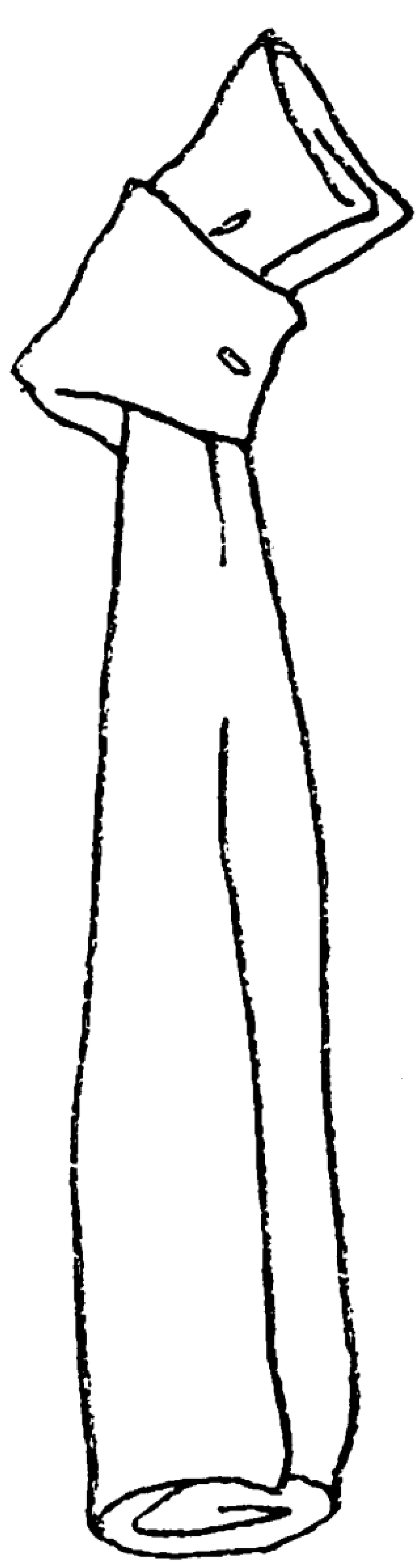
これでも年がいつて、姉樣や、お母樣のやうに成つて來ると、或はそうと氣が附くのかも知れんけれど、妾等のやうな若い女には、那樣事を思はうたつて、思ふ事が出來ないから仕方がない。

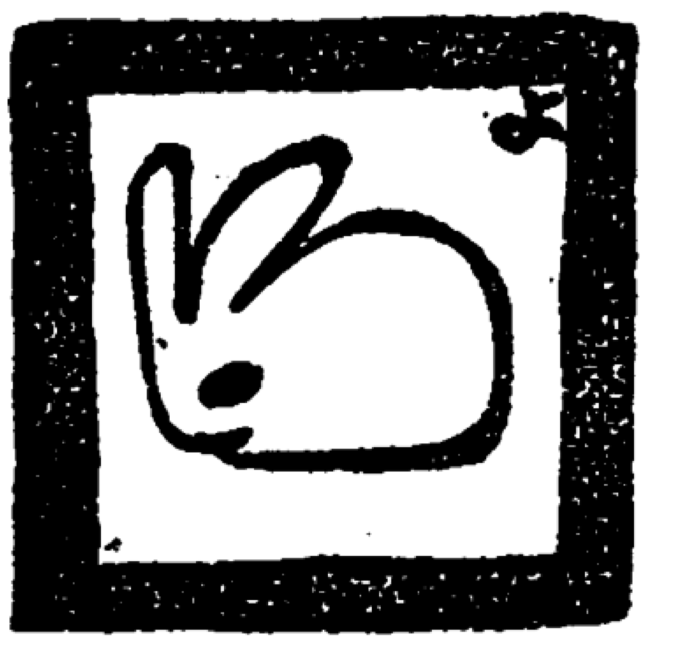
まア〳〵將來には何うか成るでせう。

誰がどう云つても、妾は若い華かや生活を希望する。

華麗な劇壇の上に、諸方から贈られた花束、花環、反物等のうづ高く盛られた中に立つて、ダイヤの光り燦然と電燈に眩しく輝かせて、幾千の觀劇人を見下しながら、靜に唇を開く女優の面影!!

妾はそれを夢想しては、女神のやうに尊くも思ふ。





ひとりごと

富士子

『あなた何時迄もそんなにぶら〱して居て、どうずるおつもりなの？』との或人の一語、たつた其一語は、私の胸に強く〱ひゞきました。

『何も好んでぶら〱しては居ません、病氣のために寢て居たのは仕方がありません』と心の中に多少の反抗的態度を持ち乍ら、やつとこらへて『何故學校に行かないかとおつしやるのでせう？今日は行きました、一時間も缺席はしませんでした』と、先づ角立たぬやうに答へて置いてすぐに話頭を轉じてしまつて、何氣ないふりをして居ました。

が、しかし私は非常にそれによつて反省させられました、そして勇氣と自恃とは汪然として湧いて出ました。

前學期の結論の時に、『苦しんで出來なかつた』と云ふ感情も、休暇中につぶやいたことも、其後引き續いて悲觀して居た原因も、たゞ此一語によつて總てを一轉させることが出來ると云ふ事を悟りまして、初めて良藥の口に苦いことを知りました。

實に私は此元日以來、一日として平和な心を持ちませんでした。（無論一學期に於けるそれとは全然違つて居ります。）

あゝでなければならぬ、斯うしなければいけないと云ふ理屈は分つて居りまして、意志の力によつて、先づ相當に正義に向つて勇進しようとは努めて居りましたものゝ、或一二の感情のために時々妨げられては苦しんで、而かもいくら苦しんでも其効果の無いのに對して、殆んど自棄に悲觀して居りました矢先きに、今又肉體の病に苦しめられて、全く床を離れると云ふ元氣は出ませんでした。

一見した所、形式上に於て何の不足もなく、丁寧に

見舞つて下さる皆様の親切を受けて居り乍ら、私はどうしても、冷たい固い氷の中にうづくまつて、僅かに寒い空風を呼吸して居るかのやうな感じがして世を頼りなく思ひました。

『いくら人に頼らない、人に求めない、弱い心は起こすまいとは決心して居ても、さて病と云ふ厄介な蟲に取りつかれて、自分の體が自分の心の思ふまゝに働いて呉れぬとなると、左様〳〵頑ばつた者へばかりも持つて居る暇がない』等と勝手な理屈をつけては、獨り益々弱り果てゝ居りました。

で、どうせこんな譯の解らない生ぬるいやうな、役にも立かぬ世の中に、何の得ることもなく、何の與ふることも無く、平々凡々として生あくびしたやうな夢の生活を送る程ならば、何時迄生きて居て何の價値があらう？さうだ、惜しくもあらぬ身一つを神のみ前に捧げて人のためにお祈りしよう、私の命に代へて私の眞實の人々のために、より以上の幸福と、より以上の健康を祈りませう。明日とも云はぬ今直ぐに、病院生活を始めやうかと思ひまして、國に相談の手紙まで出しました。(實際體を思へば入院でもしなければ直らぬ程の病氣を持つて居りますので)

然れども私は斷然思ひ返へしました。

命が惜しいのでは御座いませんけれども、さあ愈々恢復の見込みが無い、學校をやめなければならぬと云ふ段になると、流石に死ぬには餘りに早いやうな氣がして、あゝもしたいからもありたい、も少し勉強して後にと、いろ〳〵未練が殘らぬでもありません。

其身の憂さも或子のためと、寒い夜風に曲がつた腰を一里に近い天神樣に、この身の幸を祈つて呉れる老い先き短かい一人の母は、あゝそ



つくりばな

の母は……出來ずばたとひ借金しても、たつた一人の妹のためにと眞心こめたその汗血のかたまりを、何不自由のないやうに貢いで呉れる一人の兄は、あゝその兄は……人生何の價値を認むることもなく、夢のやうに生れて夢のやうに學び、そして夢のやうに此世を去つた私に後れて、やれ安心と重荷を下したやうな太い息でも吐いて、安閑として居ることが出來るでせうか

　しかも私には死よりも辛い姉樣とのお別れ！母は逝つても兄はなくとも、私は私として、此世に生れた丈の意氣もあれば義務もある、自恃だ自重だ、勇氣だ努力だと、弱い私を無言のうちに、常に導いて下さる姉樣姉樣と口で呼んだことは無いが、命に代へても得たいと望むその魂の姉樣と、求めてお別れすることがどうして私に出來ませう、生きやうと思へば未だ二三年四五年、生きられないと云ふ程の體ではない、死んでも倒れても進む所までは進んで見よう。

　私は奮然として床を蹴つて起き上りました。

　がしかし頭痛もします、咽喉も痛みます、起つことは起つても、尚且つ一歩を踏み出すべく躊躇して居た私は『ぶら〳〵して居る』との其一語と、姉樣の此頃の苦いお顏を對照して、全身がしびれる程強く針をさされました。

　決心と云ふ決心の中でも恐らくこれ程の決心はと思ふ程、私は強い〳〵決心を致しました。もはや頭痛もしません、咽喉も痛みません、病氣！病院！口に出すさへ恥かしいやうな氣になりました。

　此後一年生きて居ようと、半年で死なうと、そんな事は構ひませぬ、たゞ時瞬間々々をとらへて人生の目的に向つてあらん限りの熱血をそゝぐべく一刻も片時もゆるさないつもりで御座ります。

　あゝ姉樣！靈の姉樣！私の命よりも大事なたつた一人の姉樣！あなたが私の不快な顏をごらんになつて、いやだとお思ひになるならば、お姉樣の苦いお顏は私に幾百倍の苦しみを與へるかと云ふことを御想像になることは出來ますか、生れて廿有餘年、初めて人生の眞義を解した(?)私は、もう〳〵今迄のやうなつまらぬ悲觀は致しませぬ、自棄も起しませぬ、此度と云ふ此度こそ、ほんとに世の中を達觀した廣い心を以つて、愉快に樂しく、すべてを讃美して目的に對つて突進することを誓ひます、どうぞ〳〵打つてもたゝいても叱つてものゝしつても構ひません、永久に私の光明となつて正しい道に導いて下さい。

樹木の生立



私の合歡

信濃　百瀬美水

池の氷も溶けて、水の底に緋鯉の姿も見えるやうになつた。池水に多數影を寫してゐる樹木の中に未だ若い合歡の木が、枯木かのやうに見えてゐる。これは、私の合歡である。

私の合歡は野生であつて、田川のけみの中に生ひ立つた。田川は川幅が廣くて、柳やさいかちや、アカシヤや色々の樹木が繁つてゐて水はわづか三條ばかり、その間を流れてゐるにすぎない。木の繁つてゐる處がけみである。

私が始めて合歡の花を知つたのは、十二の頃で、父が田川へ水上げに行つて、けみの中に咲いてゐたのを一枝折つてきてくれた時である。私は其花があまりに美しく珍らしいので夕方萎んだ時には涙がこぼれた。そしてもう合歡の花が堪らなく好きになつた、あくる日、暑い眞夏の日であつたが、私はけみへ花を見に行つた。けみの中はまるで綠の國で、水は蒼く風は涼しくて、何處かで小鳥が啼いてゐた。私は川へ入つたり出たりしながら川上の方へ、赤い花をみつけながら上

つて行くと、大きく青淵になつてゐる先方側の岸に太い合歡の木があつた。そして其の木の下の叢の中に芽生の合歡の木を二本見出した。それからは、毎日弟と二人でその淵へ魚釣りに行つて合歡の根に腰をかけて魚釣針を水に浸しながら花を眺めた。その時、私のはこれ、弟のはこれと定めて芽生の合歡は二人のものになつた。さうして誰にも見付からないやうにと二人で祈つた。

　翌年の春早々合歡の木をこぎに行つたが、外の木にまぎれてどうしても見付からなかつた。仕方なしに藤の實を拾つて歸つたが、泣くほど悲しかつた。

　夏の大水の時、多くの草木と一所に私のは流れてしまつたが、弟のは親木の根本に生えてゐたので、無事であつた。春は判らないし、夏はつかないので、其のまゝかまはずにおいたが、幸に人に知られず、年毎の出水には親木が楯になつてその子をかばひ、暴風雨の時には笠となつて護り、無事に成長した。

　つひ四年ばかり前、私はアカシヤの花盛をみにいつた時、今にも初花をつけさうな青々繁つた合歡の若木を思ひ切つてこいで、池端へ植ゑたのである。

　一度は葉がすつかり萎んだので、枯れたかと悲しんだが、やがて、小さい小さい葉が新らしく出てきた。去年の夏、若葉の中へ淡赤い初花が三つ咲いた。その枝をたわめて、私は幾度口吻したらう。

　やがて此木へも、數へきれぬほどに花が咲き、その下にその子が生えて、風が吹けば楯になり、雨が降れば笠になつて、その子を護ることであらう。（入賞一等）

＊　＊　＊　＊

形見の蘇鐵

大阪　梨花

　私は今、一人の姉しか持ちませんけれど、小さい時は二人の姉と、一人の兄とを持つて居りました。

其頃の兄は、女の中の一人の男として、それはそれは大事にされて居りました。殊に祖父の可愛がりやうと申ましたら一通りぢやございませんでした。何處へ行くにも「忠次や、忠次や」つて手を引いて行くので

す。私達三人は初終嫉妬を燒いて居りました。さうして祖母に買つて貰つた、白地に、雲とふくら雀の、思ひ切り華美なお揃ひな浴衣なんぞを着て、是見よがしに遊びに出掛けたものです。

ある日の事、祖父と兄とは、いつものやうに手を引き合つて町の三夜樣へ行きました。そして家へ歸つて來た時には、二人の手に美事な蘇鐵がありました。二人はさもうれしさうにそれを座敷の眞中に置いて眺めながら

「とう〳〵忠次に買はれて仕舞つたよ、實は此間からいゝ靴を買つてくれつて強請られて居てね、東京へ行つた時買つて來てやるつて約束して置いたんだよ、處が今日三夜樣へ行つて之を見付たのさ、



忠次め早速目をつけて買つてくれつてんだ、之れでも大分出るからね、一寸考へて居たんだけど、靴はもういらないから蘇鐵を買つてくれつて云ふんだよ、まだ十才にもならない小さい子が、こんなものをほしがるんだから實際をかしいね、そして其云草がどうだらう。「靴なら忠次一人の樂しみだけれど、蘇鐵ならお祖父樣もお樂しみでせう」つてさ。ませた事をいふぢやないか。と誰も別段聞かうともしないのに、一人でにこにこ笑ひながら話しつゞけて居るんです。

それから二人は毎日蘇鐵ばかり弄つて遊んで居りました。鐵をくれゝば早く育つといふ話を聞いて、母や姉の處へ行つて、折れ針を貰つて來ては、根に指したりして居りました。そ

して冬になると、二人して大きな袋をこしらへて、それを冠せて炬燵の間に置いて、時々袋をとつて見ては其美しい緑りの葉をさすつて喜んで居りました。けれども兄は、永くこの蘇鐵を可愛がる事が出來ませんでした。

蘇鐵が若い葉を出して、古い葉を切りとつて仕舞つた頃の事です。兄はふと脳膜炎で亡くなりました。家中の失望はどんなでしたらう。もう皆氣を失つた人のやうに、呆然して仕舞ひました。

紅い椿の花で覆はれた家のお墓に、小供としては非常に大きい立派な石塔は「堀口忠次の墓、行年十才」といふ文字も明らかに、道行く人の目にとまります。其後祖父も、七年ほど過ぎてから永眠致しました。

蘇鐵は、それから父の手に移りましたけれど、其鉢は幾度となく大きいのと換へられて、今では立派なものになつて居ります。さうして私の家の續く限り、祖父と兄との遺物としていつまでも殘り行く事でせう。

（入賞二等）

恐ろしい柿の樹

佐賀　おちば

私は幼さい時、筍掘りに行くのが一番怖くて、何時もいや〱姉にしひられてついて行きました、なぜかと云へばその竹林の眞中にある一本の大きい柿の木に幽靈が出るといつも聞いて居りましたから、筍を二三本とると、直ぐ二人とも後も見ず逃げかへるのが例でありました。

いつたい此の柿の木のまはりは、さまで大きくはありませんけれ共、高さが非常に高くて、然も其の枝は極く上の方まで一本もつかずに、丁度傘をさした樣にてんぺんに廣がつて居るので、他所にいつて歸りに此の木が見えると、わが村と云つて喜ぶほど目標になりました。

村の八十歳以上の老人達のお話によりますと、その年寄たちの少さい時、祖父母から聞かされて居たと云はれますから、大分な久しい事、何十年やそこらではあるまい、おそらく何百年かの昔のことではあるまい

かと思はれます、もと其所にお寺があつて、其の墓場の中心に、此の柿の木が生えて居たのが、時日は物の破壞者であるので、如何な變遷に逢ふたのか、そのお寺も遂に破壞せられて、また數尺の地下に眠れる幾多の靈は弔ふ人のたへてなきを怨みて、そこに直立した此の柿の木にすがり付いてしまつたに違ひない、此の木にさわると必ず不思議があると世に傳はりました。

實はもとより澁柿でありますが、いつの頃か、ある子供がその實の成熟して落ちたのを知らずに拾つて食べた處が、すぐに腹痛を起して死んでしまつたと、また今から三十年計り前に、一人の奇抜な男が、自分が第一にのぼつて此の柿落してやると云ふて昇りかけて、枝の處まで行きはしたけれ共、如何なるはづみでか、どつとおちてこれもその場で死んだとのとであります。であるから毎年其が花の様になつて眞赤にうれると烏などが來てついばむやらずて〳〵下に落つるやらします、年年この通りして繰り返して居ります、子供の死んだも、男が死だも皆偶然であらうと今では思はれます、けれ共、兎角此の傳説があるため、誰あつて此の木を倒さんとする者は全くないので、いつまで生々として命があるやらわからんのであります。木の根元に五六の墓石が轉げて居るけれ共、字がつぶれて居るから、いつの頃か知るによしないのが殘念であります。



木の芽時

これはつくり話の怪談でも何でもなく、實際のお話ですが、それにしては餘り不思議なやうです。私は何とも理由が分りません、偶然と云へば、それまでゞすが、其偶然にも何か理由があるのではないかと、折々考へてみては、恐ろしくもなるのであります。（入賞三等）

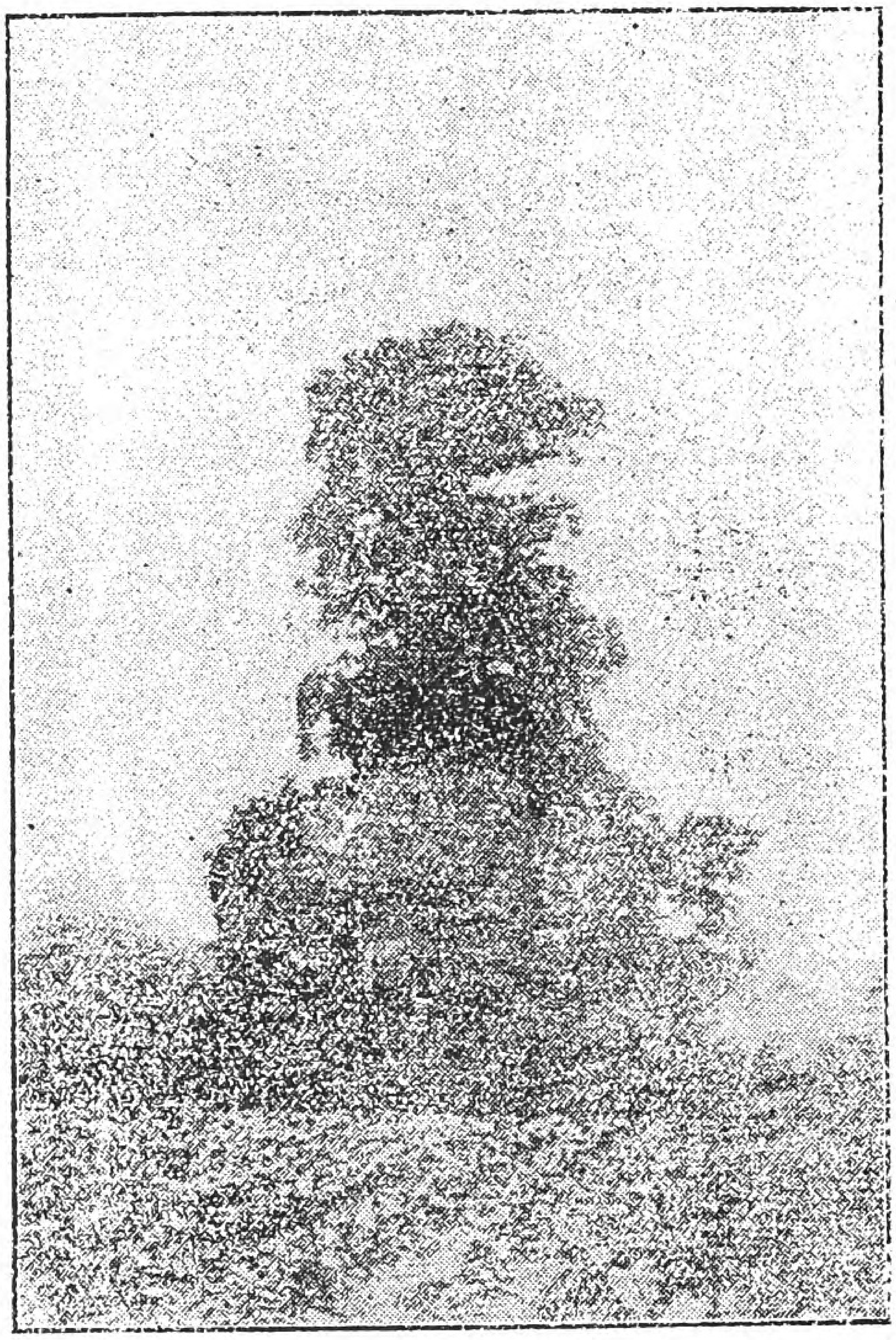
高津樟の木

大阪府　宮崎唯代

松屋町通りの交番を左へ折れて、一丁ばかり東へ行きますと、新築の門に高津とした標札があります。伯父さん（先代）は高津神社の神官を久しく勤めて居りましたし、附近でもかなりに人に知られてゐる舊家なのです。ところが此の高津の家の庭に、隨分大きな一本の樟の木があります。我家の舊家を誇る、伯父さんは何時でも此の樟の木を引合に出すのです。私達の幼ない時分には高津の伯父さんと呼ばないで、樟の木の伯父さんと云つて居ました。「何んでも私の二代目の先祖の、五郎兵衛と云ふ人が、非常に樟の木を好んで十本餘りも植さしたが、皆枯れて了つてたつた一本殘つたのが、こんなに生長したのだ。古い話だが、德川樣と豐臣さんとの大阪の合戰に此樟の木を楯に取つてお互にしのぎを削つたと云ふからな。私で四十三代目だから實に美事な樟だ」と、雨の夜のつれ〴〵に自慢を伯父さんの語らひを少さな耳に挾んだ事がありました。恰度伯父さんの義弟に信夫さんと云ふ、非常な放蕩者がありました、なさぬ仲のお母さんは我子可愛さに、伯父さんには秘密で、色々な信夫さんの無理を聞いて居ました。其内お母さんは亡くなります、親戚からは見放されて了つたので、半ば自暴自棄となつて益々自墮落生活を續けて居るのです。併し此迄の樣に尻拭をさせる人はありませんから、流石の信夫さんも弱つて奸智を廻らしました、其揚句彼の樟の木に目を附けました、そこで出入の材木屋へ兄からの使だと僞つて幾らかの金を懷中に納めて了つたのです。

伯父さんは、義弟のしてゐる事など少しも知りません、平常の樣に、高津のお宮で事務をとつてゐますと慌たゞしく婢が、「大變です直ぐお歸り下さい」と報告したので、急いで歸つて見ると顏馴染の材木屋と植木屋とが四五人の下職人を從れて、今にも樟の木の枝を拂ひ落す處だつたので、伯父さんは吃驚して事情を訊きますと、當家の弟御の信夫さまに契約をして此の樟を購ふ事になつて居るのです」と聞いた伯父さんは今

更の樣に憤り出しましたけれど、義弟の事でもあるの
で漸々信夫さんのかりた三百圓を辨償してやうやく事
濟となりました。一度味を覺えた信夫さんは三度迄此
の手で義兄を苦めました、身を持崩した結果、恐ろし
い肺結核でたうとう大阪病院に倒れて了ひました。
夏の暑いより〳〵の日に白い着物を着た、伯父さんはよく樟の下に彳んで、幾重にも幾重にもに掩はれた葉から薄く日の洩るを浴びて、小枝の絲の樣になつた枝振やら、幾抱へもある根元を見上げたり、見下したり仙人らしく頤の髭を捻り乍ら靜と見詰て居た伯父さんの姿を見懸たのでした、不正行者であつたが、若くして散つた一人の義弟の事も思ひ遣つたでせう。
それから幾年も經て伯父さんも亡き人の數に入りまして、子息の五郎さんが其の代をつぎました、伯父さん異つて此の五郎さんは何にかに無頓着な性質ですが、矢張樟の木だけは、たいせつにして居ました。
家の寶物？舊家の誇の樟ものがれぬ自然の運命がきたのでせうか。恰度、二三年前の千日前に起つた、大火が延燒して高津、生玉を燒拂はれた際、此の樟の木も其難を脫れる事は出來なかつたのです、黑ずんだ葉は猛火の爲に燒かれて、僅かに太い「みき」を殘した許でした、それでもあと〳〵迄の語草に根元でも其儘にして置きたいと五郎さんの考へでしたけれど、表通を電車に取られる事になつたのでやむを得ず、根を掘りおこしたのです、「樟腦は何んでも政府の專賣となつてゐるとかで役所から人夫が來て、無雜作に掘り出して了ひました。」
僅かに名をとゞめるために三尺許しの樟の木を再び五郎さんが植ゑました。（入賞四等）



京都の木娘

木娘

京都　溪の花

私の宅より凡そ七町鞍馬口通り新町西入る所に、日蓮宗の妙覺寺と云へる畫聖、狩野一家の墳墓もあり、亦天明の大火に燒けて了ひましたが飛驒匠の建築になる有名な祖師堂もあつた、お寺があります。茲の廣い墓地内の西北隅にたつた一本の杉の樹があつて年數は大分經つたので十間餘りも高さのある物凄いつたら實際周圍の墓場と調和して居ます、此木に就ての生ひ立には奇聞もありませんが、それは只今からだと一昨年の七月頃からでありました、枝が風に叩かれ雨に繁つた葉が一町餘りも離れて是の杉を眺めますと、丁度(寫眞參照)鼻もあり口もあり十七八の娘さんが島田に結つて化粧でもして居るやうに巧みに姿を現はした杉の木を、物見高い都の方〻がお祭でも見に行くやうな調子で見物に出掛けるので一層、噂が高まりました。この木娘は晝の中は葉が透けて見苦しいが月が出て田甫に蛙が鳴く晩などは形容の出來ない程、凄い輕い風がプッと襟元を流れてもぞつと、いたすやうです。

それ故近邊へは利にさとい奸商が木娘の繪はかきを賣るやら、暑い頃であるので氷店が何軒も田甫の眞中へ店を張ると云ふ素晴らしい景氣でありました、それで繪はがき屋さんや氷店屋などは思はぬ儲けでホクホクなれど、一方迷惑なのは、お百姓さんで最う稲の花に實が結ぶやうになつた大切なる田甫を群集の爲めに踏み荒らされては默つて居る譯にゆかぬので善後策を妙覺寺の住職に迫つた、それで木娘の原型を失ふ程度に伐ることゝなりました、早速お出入の植木屋に依賴いたしたさうですが植木屋さんは首を振つて應じて吳れません手傳職人にさせようとしたが逃げて了ふ。誰彼れと物色しても皆、怖れて應じない、と申すのは、誰が云ひ觸らせし臆說か、彼の木娘は永年妙覺寺に棲む蛇の精だとか、狐狸の仕業とか、彼れを伐ると屹度祟ると根もない話をして弱いことを云つて居ましたが、それから伐た者に五圓の賞金を出すことゝなつたので、其れに應じた人は、名を秘して▽▽▽と云ふ

或る職人、その翌朝早う、一丁の鋸を腰に、凄いやうな木を猿の如に登つて枝を伐り拂つて型を失ふて了ひました。
一遍は人の說にも耳を傾けねばならぬ事もあります▽▽▽と云ふ人は木娘を伐り取つた翌日から、神經の作用か重い病の床に就きました、その床に伏せつてより連日熱の高低が激しく、そして夢のやうに口走る、かすれた聲が何共云へない怖さだと看護した人の話でした五日目だつたか蛇がウヨ〱と身廻りを攻め寄せるやうな譫言を引つ切りなしに口走つて、遂に苦悶の中に亡くなりました、五圓の懸賞金が哀れにも香儀料となるとは本人も豫想して居なかつたでせうと、只今でも其近邊では噂がチヨイ〱出ますのであります。
月の冴えた晩、妙覺寺西北の一隅に、今尚凄い名殘りのやうに聳えて行來の人に恐ろしい夢を繰りかへされてをります。（入賞五等）

梨の木と兇變

廣島縣　葵の花

自宅の入口から一間計りはなれた左手に一抱へにも餘る梨の老木がある。屋根口の邊りまでくの字なりにのびてそれより上は枝が縱橫によく繁茂つてゐる。祖父がまだ前髮時代に村の某家からもらつて歸つて植ゑたのだと云ふ事だ、で此家の庭に根をしめてからでもかれこれ九十年になる、だから其樹の生立は私には分らない、私など幼い時から既に今の形狀をなしてゐたが多少の印象はある、根元から約三尺上つた處に一つの穴があつた。春も今少し先麗かな日影のさす頃にもなると、同じ振り分け髮の遊び相手が、三人もよればい、い、さまよひ出でたる野の邊りから燃え出でた若草や奇麗な花なんか取つて來て飯事したものだつた、其時は此の木の元に筵を敷いて、草花やい、い、もの細かく切つたの、茶碗の破れや椿の葉にもつて例のうつろに入れて「戸棚」だなんてよろこんで居たものだつた。うつろは何時とはなしに廣くなつて、今日では二尺計り下へと上へ一尺も朽ちてゐる、恁うして見も知らぬ中に、樹は追々老朽してゆくのだと私は思つた。けれども花

はよく咲く。花期にもなれば清楚な若い貴婦人を思はせる樣な、白い花が一枝の餘裕もなく、ふんわりと咲くので丁度雪が降り積つたかの樣で、夫れは夫れは奇麗だ。長閑な日、氣もたましいもとけてゆくのではあるまいかと思はるゝ時、緣に腰かけて恍惚酔ふた樣な氣分になつて居ると、遠くの方で破鐘を打つ樣な聲がして、無數の花蜂が何事をか叫び乍ら、花から花へと忙はしくとびかはして居るのを見る。だが實は餘り多く結ばない、若木の間は非常によくなる木で、村でも評判だつた相だが、精力の衰退せる今日では、大抵二三十から、多くて五十ばかり、昨年あたりは僅九ツしかとまらなかつた。此んな事云つて笑はれるかも知れないが、此の木は不思議な暗示を持つてゐる。明治四十二年と云へば五年も前の事、此年には大變多數く實がとまつて、全く鈴なりの感を呈して、見る人皆驚かぬ者はなかつた。其翌年の春、平生頗る壯健であつた妹が僅四日の病らひで死くなつて了まつた、十一年前に母が死んだ時も、十六年前祖母がなくなつた時も、矢張り同じ事であつた。これは何かの作用で都合よくさうなつたのかも知れないが、恁うした事が三度迄續いては、私どうしてもかくと信ぜずには居られない。

本號 贈●賞●發●表●

▲本號の投稿に對し『青春の感想』として左の諸篇に豫定の通り贈賞すべし。

▲一等　帝劇女優試驗を受けし記‥すゞしろ(府下)

▲二等　時の默移…………松浦岑子(京都)

▲二等　春降る雪…………桂の華(秩父)

▲三等　○終列車より降りて、みね子(豐前)○春の林、百瀨美水(信濃)○若き男の人々、櫻木雪江(東京)○ひとりごと、富士子(東京)○白粉無用、葉蘭(岡山縣)○子供が欲しい梨花(大阪)○女優になりたい、石田みどり(石川縣)○帳簿の金文字、秋花(攝津)○吾世のうらみ、蔦の葉(東京)○色彩ある生活、蔦代(下總)○纔短草怨、みゞさ(信濃)

▲『貴●婦●人●に●與●ふ●る●書●』は、杉浦翠子が特別の寄稿の外、投稿の中には一篇も採用するに足るものなかりき。

▲『男●子●の●癖●』は左の諸篇を入賞とす。

○一等、紀伊、林口和歌子　○二等、近江、ほたる草　○三等、三國山下、郁香。名古屋、波の花。

▲『樹●木●の●生●立●』は左の諸篇を入賞とす。

○一等、信濃、百瀨美水　○二等、大阪、梨花　○三等、佐賀、おちば　○四等、大阪、宮崎唯代　○五等、京都、溪の花。

▲『和●歌●』は左の諸君を入賞とす。

○鹿兒島、山田華子。神戸、綠髮子。米子、岡芙蓉子。東京、ゆふひ影。大阪、小泉貞子。



春降る雪

桂の華

遠い〱山の方でピユーッピユーッと鋭い音を立てて吹いて居た風が、だん〱と近くなつて來たやうな氣がして、昨暮から雪に閉ざされた地上をサアーッとかすめて去ると、何處からか飛んで來た大きな柏の枯葉がカラ〱と雪がなくなつて下駄の齒の跡なりに凍つた庭の面を舞ひあるく！ガラス障子がピリ〱と顫へる、と、締めきりにしてある北の緣の雨戸をガタ〱と搖すぶつて風は又どこかへ過ぎて行つた。

心細いやうな淡い日ざしにぼんやりと影どつて居る塀や樹木の格好を見つめて居ると、風に卷かれて又ハラ〱とあやにみだれてそれとも覺えぬ程細かい雪が降つて來た。

『あゝまた降つて來たよ、いつまで降るんだらうねえ彼の雪が何日になつたら消えるのだかわからないのね。』

遣瀨ないやうな溜息と一緒に眼を伏せて母は呟やく

山國の一月から二月へかけて此麼日が幾日も續いた。さういふ日にも私は大抵南の坐敷に坐つて賴まれた銘仙のきものをいぢつて居ることが多かつた。稀には裁縫のきれた時、炬燵の上に雜誌や新聞などを載せてあたりながら讀むこともあるが、其麼時にはもう裁縫の暇をぬすんで見る時のやうな張り切つた心持は失せて了つて、餘りに緩やかな周圍が物足りないやうな感じがする。きまつて欠伸がいくつとなく續いて堪らなく何も仕ないで居ると云ふことが氣になつて〱何を讀んでもちつとも頭に入らない。

午後三時――四時――次第に淡い日が遠退いて彼方の山の頂に名殘の光りを投げる頃になると、私の心は益々ひら〱して來て、無爲に暮してしまつた『今日』が惜しくて馬鹿々々しくて、意氣地ない淚はやゝもす

ると冷たい頬を傳ふて居る。

裁縫をして居る日は、自分の縫つて居る針の行く道もわからないやうな黄昏の色に逐はれて、始めて我に返つて『サア〱仕舞ひませう。』斯う呟き乍ら鋏や箆やガチヤ〱云はせながら針箱へしまつて、とざすると黄昏の色の中に見失ひさうな藍に滲んだ皮の指輪をそつと掛籠の隅に入れるとあわたゞしく立つて行く時も、些かの悔も私の胸には殘つて居ない。一日の任務を果した時の樣な心の輕さ、私には自分乍ら不思議に思はれる。

『人間は矢張り働くべきものだ――。』と自ら云つた言に勵まされて私はくる日も〱針を持つて居る。私は元來裁縫は好きでなかつた、夫れを此節は自ら好んで手にして居る。

『裁縫はどうしても女子の天職なのかもしれない。』

さう思つた時急に、靜かに私等の上を流れてゆく時の推移に氣が付き初めた。

遠く近く連れる山なみに繞された盆地の片隅に、之れ迄にない平和な心持で日の光り柔かな春からみどりの夏へ、山くれなゐなる秋を送つて粗い木の枚をくゞつて淡い日の殘雪の上にこぼれる冬へ――些かの動搖もない單調な生活を繰返して來た私は俄かに――我が周圍を省みるやうになつた。

あゝ年のあぢはひ！

打ち濕つた諒闇の中にも新らしい年は來てしまつた大正二年の曙光を見ると同時に、私の胸に負はされた最初の痛手は明らかに數字を以て現はされた二十二の文字である。

斯くして私は始めて結婚といふことも意識にのぼるやうになつた。極めて冷靜な頭をもつて眞面目にわが生といふことも考へるやうになつた。人知れず或るものゝ不可解に苦しんで夜半寢ねがての枕をかへすことも幾度か、止度もなく頬を傳ふ冷やかな涙のうちに夢に入ることも屢々であつた。

こんな心持の日が幾日となく繰かへされてやがて二月も終りに近付いた頃、一月の半から二月へかけてだらく〱と長びいて居た私の緣談が急に纏つたといふ報知に接した。

私の周圍は急にさわがしくなつた、其日至急親展の朱印押した兄の書簡は三四通續けざまに發送せられた呉服屋の小僧は日に幾度か我家の門をくゞる。或る風の強い日には母と姉とわが調度を見つくろふべく町へ

出て行つた。

かうして貧しい中にも人々のあたゝかい情によりて我が一生の晴れの日の衣類調度は一通り取り揃へられた。あゝ感謝すべきわが骨肉の情よ、けふ私は初めて我が嫁ぐ日に母在ませしことのうれしさを沁々と味つた、若き人々には氣の付かないことを細々と注意するとき、幾度か私はさうした心持をくりかへして感謝の涙に咽んだけれど人は誰も氣が付かなかつたであらう。

こんなあわたゞしい空氣の中にも私丈は其中に巻き込まれて共にそはそはと立ち騷ぐことはなかつた、平常と同じ心持で靜かに針を運んで居た、其二三日は縫ひかけのよその仕事を手から放すことが出來なかつたのである。



私は生れつき羞耻によつて顏を染めるやうなことは絶對になかつた、夫が自分には反つて恥しくて堪らない、其性質は年を經るに從つて著しくなつて來た、今はもう羞耻に限らず驚愕にもさびしさにも嬉しさにも何れの場合にもすべて色に出づることを許さなかつた私の心の中には夫等を押へる處の或る強い力が潜んで居るやうに思はれる。

此頃も人は交る交る私を訪ふて『お目出度う御座います』と喜びを陳べる、他人ならば面を覆うて逃げもしやう私はいつも平然として『ありがたうぞんじます』と答へることができる、異性にすら、顏の色一つ動かさず

に。あゝ何といふ情ない厭やな性質なんだらう。と自ら呪はしい我が身を悼まない譯には行かなかつた。

三月の半頃には他家に入らねばならないと定つてから母や姉やの擧動は『もう少時しか家に居ないんだから成べく叱言も言ひ度くない、何でも自分の好きなやうにさせて置かう。』といふ風に私の瞳に映つる、是迄も随分放縦な生活を續けて來た私にすら著しくさうした氣分が感ぜられて夫が又堪らなくさびしい。

間もなく三月に入つた、用意は大抵調つて家の中は再び元の靜けさにかへつた、私の心も極めて靜かである、夜も前と反對によく眠られるやうになつた、雖然何となく健康のすぐれないのを覺える、食慾が振はない、しかし氣分にはさして變化がない。

其頃から私はポッ／＼祝ひの手紙を受取つた、自分も稀には筆とつて知らせや返事の手紙を認めた、或は月波根の人に長文の告別の手紙を書いて小使に懸けさせて見たら六匁あるといふので驚いて書き直したこともあつた。

姉さんからの手紙には此麽ことが書いてあつた。

母上も御存じの結城のとの町の傘屋の娘がつひ近所に嫁に來たのを知らずに居たら、二三日前看板を見て來たと申して傘屋の主人が娘を連れて訪ねて參つたので驚きました、私が結城に居た頃は六つ位でしたから……

私も幼さい時義兄に連れられて其傘屋へ行つたことがあつた、その娘！其頃四つ位でもあつたらう、胸掛をかけた小さな女の子の姿がボンヤリと胸に浮んだ。

時は人の上にも移つて行つた、今はもう二十歳にも成らう、あゝ時の推移！又しても口をついて出づるのは只それ許りであつた。

私も二十二になりました。

心から私の結婚をよろこんで呉れた友の手紙の中から不圖見出した此の言葉、只一言の内に無量の想が籠つて居る。さう云つた時の友の姿はどのやうに淋しかつたらう

あゝ繁様！あなたも二十二にお成りですか、私も二十二になりました。私はさびしうございます。

くる／＼と懐しい手紙を巻き納めた私はたとへがたい寂寥のひし／＼と身に迫るを覺えて、確と手紙を胸に抱いたまゝ机の上につゝぷしてしまつた。



白粉無用

葉蘭

私はまだ處女にあり勝ちな戀などゝいふものゝ味を解しません、青春の血潮燃ゆるてふ此時代を別に暖かい感情とてもなく、多忙！多忙の内に若い姿の葬られて行く後姿を、只無意識に見送つてをりますの、尤もこれは家庭の都合上已むを得ないのでございます。

朝起きるとすぐお掃除、御飯がすむともう定まつたやうに厚い裁物板の前にずわつて、お針をいたしますそして其間々には商用やら、家の交際上の事などに就いて、いそがしい貴重な時間を割かれますの、それで自分の好きな雜誌などは、少しも讀まれません。

幼少の頃から父が不在なので私はまだ、尋常五六年の時から早、勤務地の父の許や其他母の代筆など、みんなさせられました、それからといふものは引續いて身は多忙の渦中に入り浮ぶ瀬もございません。

友の方の美しく着飾つた娘さん振りを見てはさすがに羨ましい心が起らないではございませんけれど、ああ今そんなことを見るべきではないと、燃ゆる心を押し沈めて知らぬ顏してをります、と母が思ひ餘つてか時々「ねえお前、いそがしいから無理はないけれど、もう十八にもなつたのだから少しは娘らしくしてね」と優しくおつしやるのを、わざと笑つて聞き流す心の内……私だつて女ですもの、なんで美しくしたくないことがありませう、ふと鏡にうつる自分の姿の、あまりに無造作なのに思はずもホロリとすることも幾度か？これでも紅の血潮燃ゆるてふ時代かと思ふと情なくなります、さうして稀には人の居ない時、そつと鏡臺の前に立つて、ひつゝめの前髪をふつくり出して見ることもございますの、それも束の間また前の姿になつてせつせと働きます。

友の誰れ彼れのやうに、お化粧したり、甘い戀のささやきをする暇があれば、私は雜誌の一頁も繙いて精神の修養をしなきやなりませんもの。

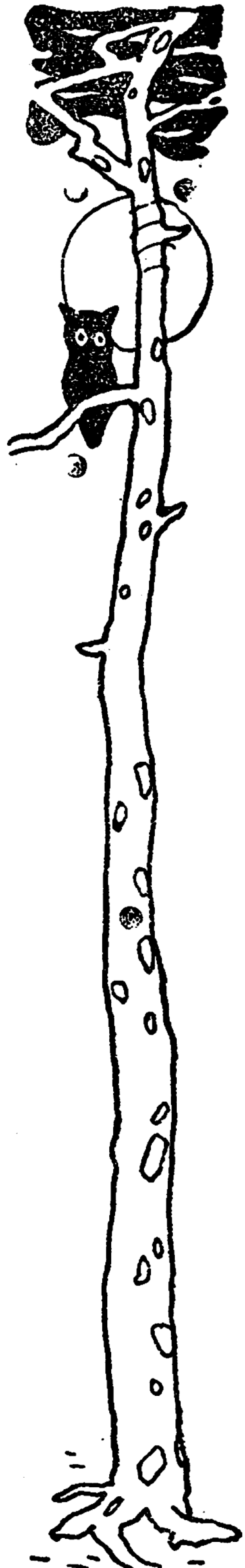
ゑゝレターですか？さう矢張りこんなでも時々ね、人を誘惑して嬉ぶ積りか、名も知らない方から交際を望むとか、返事を呉れいとかつてね、失敬な！人を馬鹿にしてるんですわ、そんな返事を書く時間があれば私お習字の一枚もいたしますわ、こんな手紙を一時も手に持つのが腹立たしくつてすぐ丸めて火の中に投げ込むでしまひます、紫に青に燃えてやがて黒くなり行く紙片を見つめてゐると、何故かしらわるい事でもしたやうな心地といゝ氣味といつたやうな氣分とが一時に心に浮びます、自ら冷血した女にならうと心に誓つた私は、もう風體などには少しも頓着なく、せつせと自分の任務を果し母を助けてをります。

先日もね、睡眠不足の眼を擦りながら半ば夢心地で雨戸を繰つてをりますとガヤ／＼といふ人聲、ふと氣がついて見ると〇〇中學の生徒が遠足旅行とかで、列も正しく私の寢むさうな顏を見ながら眼前を通りかゝつてゐるのですもの、はつと驚いて戸を明けさしたまゝにして、すぐ陰へかくれてしまひました、大變な寢坊したのですから恥かしくつて、まさか私は昨夜二時過ぎまで起きて居たから、こんなだと書き出し出來ますまい！私は自分の身體を幾らつねつても足りないやうな感じが致しました、服裝といへば其日に限つて母樣のを一寸拜見した紺の筒袖、さうして髮を亂して、寢むさうな顏して、遲々と雨戸を明ける、嘸可笑かつたらう、私は幾度も／＼かう繰り返して何とも言へない感じがした、そして思はずも「まあほんとに」とか「をかしい」と口ばしるので我ながらヒステリツクのやうだと思つた、漸くにして通り盡した黑服の後姿を見ながら私はいそいで雨戸をあけた、氣まりがわるかつたといふ氣分が絶えず胸内を往來する、私はふと思つた、まあ馬鹿々々しい、何が恥かしい！氣まりがわるい、よし自分の姿が變だつたにしろ、それは自分のこと、彼の人達と何の關係もない、笑ひたい者は笑つたつていゝ、何も私は美しく着飾つて見て貰はなきやならない理由はないではないか、それを氣まりがわるいなどゝ思ふ心が餘程可笑しい！と自分で我心を叱して見て一時は成程と思つたけれど、矢張りやゝともすれば思ひ出される。

自ら木石のやうな女で暮さうとする私の皮膚は、まだ一度も白粉の匂を嗅いだことはない、風體などは一向お構なしに用達にも出かける。

終列車より降りて

みね子



町の手前の長い鐵橋にさしかゝると、鐵と石と計りから起る樣な重い離れた音が危い樣だ。沈み切つた暗い夜の空氣に壓れて、廣い泥沼の樣に黑い水の面を、小さい窓硝子を透した數多い灯はちら〱とちら〱と氣紛れらしう覗いてゐる。

橋を出抜けると、細い震の混つた汽笛はせう事なしに、眞黑い空に鳴つて、車內の向ふの隅の旅の人と人らしい間に低い聲の言葉は取交されたが、それも直ぐ止んで汽車は町に入つた、年々に埋つてゆく海の方から廢頽の風は地を匍ふてくると謂ふ此町も、線路に添ふた一部は他の驛と異らず「人家の斷面」を見る樣な、狹細しい醜さは有るが、そこに云ひ知らぬ、賑やからしい都會らしい樣な色は漂ふて、年に二三回往來する度に、それより田舍に育つた私の瞳を輝かさしめたが、今十二時過ぎた時に窓に戯れる僅な灯も、絶え〲に隔つた樣に手遠いのである。最う終驛と言ふので、持物の多い人も落付いてゆつくりと靜かに汽車が構內に止るのを待つた。長い間懷中に入れて居た手を、兩方にたれた袖の紅絹裏の冷い手觸りに何とも云へぬ心細さを誘はれて、袖口を探して出した。

出した計りで好う讀まなかつた新聞を手提げに疊みこんで、膝掛けを持つて扉を押すと、スチユームに緩んだ肉を、創ぎ落す樣に强い寒さは眞面から襲ふて來る。

左手の、雨よけのバラックの柱に少し傾き加減に懸けられた。朱色で驛名を書いた洋燈の明みが內と外との闇に、小さく抱かれて悄然と、道に敷かれた砂が爪皮の付いた低い利久の齒を嚙みて、佗しい音を刻む。後れた伴れを待つ樣な氣分で一寸振り返る機みに、三四人の人が心急しう通り拔けて橋をとん〳〵と拍子よく登つて行くのに、追つかけられる樣に後に從いた。凝つと乘つて居る間はそんなでもなかつたが、此樣に動く〳〵搖ら〳〵搖れかゝつてくる、一人旅！夜！と謂ふ哀愁をそつと窺ふ樣に、塵の纏つた二つの電燈がほんのりとした明みを暢して居る。降り際に後向いたが續く人のないに急につまらない氣がして、一段づゝ下りて行く。出口の横の暗い方に向いて卷煙草の火をつけて居る男の、マッチの灯を庇ふた指の間から血の樣に赤う流れて、一寸佇んで居る間に匂ひのよい烟を吹してサツ〳〵と柵の方へと行つた。

人造石の上を固い靴音さして貧しい服裝の驛夫は動く。夜の淺い頃、多くの人の接觸に蒼白う疲れた電燈の光りが、乾き切つた灰白色の建物の表にぴつたりと沁み込んで、ずつと打通した向ふに郊外の闇が眞黑う迫つて居るので、瞬きも出來ない樣に白たゞけて見ゆる其中を、疎らな寂しい人影に混つて外の方へ出た。

何と云ふ深刻な畵題であらうか。

幾つか聯結した客車に並んだ小さい窓の硝子が、乘つて居た時よりも一層明う染つて、夜の重い幕は被はれるまでに總べての形を消して居る。そしてあの灯の明々とした車內に何の息する物もない。丁度怪談の挿畵でも見る氣持ちで凝つと見入つた。私は、ずつと以前此樣な光景を描いた事があつた、と此麼前提がほんの瞬間に閃いて、人に知られないかくされた世界を見せられた樣に、好奇心と淡い歡びとは動いて、些の震をものがすまいと銳くなつた。が、其胸の底に澱んだ

母から受け繼いだ、若い女と云ふ者に對する因襲的な思想は、此樣な時刻に此樣な場所に居るのが、何となく罪惡の樣でもあり不思議にも思はれて、兎に角半ば辯解めいた心で半ば懷しう、今日の正午からの、時の滑りに包まれた私の動作を繰り返して見樣と、人力車に乘るまで失ふまいと凝つと想の端を見守つた。

…可愛い自己を傷つけずに唯一つの路！其一つの路を踏ませたい計りに、唯一人で亡父の里にまで行つたのである、山に圍まれた靜かな夜を私は、伯父母の前で第三者の樣な態度で、恥しげもなく最も近い或問題の解決から談し初めた。そして僅か乍ら理解と同情とを得て。明るい顏で今日途中の此地の叔母の家に寄る事を話して、殘り惜し相な伯父母に送られてあの嚴丈い門を出たのである。

收穫の後の荒廢した田面は可成り長う續いた。

二日も三日も動かない雲の下に物皆は一樣におつとりとした、貧しい情緒を表はして目のやりばのない樣に靜まり返つて、唯時々、雲の切目の上層が環どつて陰氣らしう銀色に光つてる中に、眞白い陽が目映しうぱつと輝やく。それが廣い野にだん／＼と角々まで黃色く明るみ渡ると、直ぐ又幕を下した樣に蔭つて終ふ。泥の深くついたのが乾いた汚い俥の輪がごろ／＼と單調な音を殘して行くのを、凝つと俯向いて聞いて居ると、何處まで運ばれて行くのだらうかと茫然して思ふ事が皆、行き詰つて終ふ、其重い胸を抱へて三里の道を、口が利けない樣に私も車夫も無言で通つた。

山の峽に置き忘れられた樣なちよつぴりした驛の、前の一軒しきやない駄菓子屋の店で、ほんの一足の後れで二時間餘り待つ間にそれでもせう事なかつた目に一つ深く殘つたものがある。田圃を隔てゝずつと向ふの方を、越して來る時は其麼でもなかつたが、高う一文字に丘になつて疎に落葉樹が並んで居る、其細い枝のすい／＼と懸つて居る一流の空がかつきりと晴れて、全く春や秋には見得ない色合で、丁度劇場の背景の樣な、かくれかゝつた一線がぽつと黃味を帶んだ明るい色であつた。

〇（入賞）　鹿兒島市　華　子

うら悲しあゝ殘されし此のむくろ何を見むとて目あきてあるや
ひるをいねひるをさめてはわれを見るあゝ淋しさに涙流るゝ
ぬけがらの如くになりし身をふせぬあゝ淋しさのひたり來るかな
わたり鳥むれなきわたる此の夕べ淋しき心君にゆくなる
あな悲しあな狂ほしな春の宵心二つにわかれゆくなる

〇（入賞）　神戸　綠髮子

いともよき錦繪見るごとよその子の戀するなるをみてありし哉
やる瀨なくぬくもり失せし座蒲團にぬかふせてけり宴果てし後
窓と窓はりでし樹でし高髷のうつむきゐるを美くしとみる
あやうさは安宅の關を落ちて行く辨慶にあれ青春にあれ

〇（入賞）　米子　岡　芙蓉子

うら若き命さみしくひそやかに針運ぶ夜を降る春の雪
故わかぬ甘き愁ひを知りそめし春近き日のもの足らぬかな
をとなしく物縫ふわれのかたはらに春の夜更けの灯の赤きかな

〇（入賞）　東京　ゆふひ影

やゝ青く柳芽をふく三月の大川端のうすらつめたさ
日に逢へば少女のごとくうつむける瓶の中なるさくら草かな

わが胸に輕きひゞきをつたへつゝ紫陽花にふる朝の雨かな

○（入賞）　大阪　小泉貞子

商人の家に生れてこの春をすごす少女のあぢきなさかな

戀てふは我胸に咲くくれなゐの花もて君をさしまねぐこと

對居のうらはづかしさ石二ツまろべるさまにひとしきながら

○　東京　長谷川赤女子

はや既にそむきし人と知りて尙憎みも得ぬをとがめ給ふな

飽滿の極みに來てし二人なりや逢ふことにすら憂きをおぼえぬ

或時は人形となり何れへか買はれて見たき寂しさもあり

○　城南　鈴枝

美しきよき夢見むと二人して永く眠らん企てもしぬ

とんねるの裡に敷かれしレールの如我この生の續くが悲し

ごむ鞠のはづむを愛ぬ若き日の思豐なる心の如く

○　廣島縣　中村靜子

春といふ光の中に消えてゆく雪の命の幸にもある哉

白妙の羽二重ぎぬのさら／＼とはだ觸るゝこそ手に悲しけれ

○　麴町　櫻木雪江

多摩川の砂に交りてたんぽゝの悲しき色に咲けるたそがれ

二日たち三日過ぎぬる寂しさの唯ごとの如うすれにし戀
逢ふことの嬉しさ又も別れつる其寂しさを繰返しゆく
淋しらに郊外に出で草つめば心もとなし日は曇り來る
ゆるやかに春の日光る野の道にペン〲草をもてあそぶかな

東京　靜香

○

十八のうら若き母乳しぼる十一月のあたゝかき日よ
ストーブの燃ゆれば樂し北國の幼き時の夜を思ひ見る
山茶花のもろく散れるがうれしかり夕ぐれ時のみだれ心に

佐渡　わくらば子

○

ひたすらに死をば願ひぬそのかみのかなしきことを忘れんとして
白鳥のさびしきむくろうなだれてのきにかゝれり春の夕ぐれ

常陸　桂の華

○

あなやとは裁ちそこねたる衣を見し刹那の心悔と知らなく
かなしくもはた嬉しくも山國を逃るゝ日來ぬ涙ながるゝ

伊豆　渚の女

○

天地のしゞま我が身にひたせまるふもと野にゐて山の火を見る
長根岩その眞黑なる溶岩の岩とこしへにあれ我等がために

兵庫　速水得子

○

大いなる望をいだき野に立ちてうたなどうたふ六月まひる
天滿なる紙屋の暖簾に悲しくもお三が泣ける春のたそがれ

○　さくら草

ふくよかの彼の女の頰の色に似し美しき花も丶色のはな
池の面に二片三片たゞよへるばらの花びらすくひても見む

○　新潟縣　若井紅雨

海行けば船のみわれが貝殼の着きし木切に冬の日の匐ふ
日は西に小鳥は森に人は巣に歸る夕は心たりなく

○　佐賀　おちば

暖かきこの一日を野にいねて菫のかげによき夢みたや
よき人の持ち行き給ふ白桃の一ひら散るがいとをしきかな
うら〱と庭の櫻のほころびを誰がをしへけん黄なる胡蝶に

○　京橋　園生茂子

ヒヤシンス薄きにほひもこゝろよしおそ春の夜の酒場の一室
沈みては浮かばぬ石ぞ悲しけれその石に似しわが身なるかも
死すべかりし命ながらへあるといふ女の家に白梅の咲く

○　山口　千香子

雲雀なく今日も來て鳴くあの聲を旅なる我は一人きくかな

玻璃越し雨に濡れたる若楓別るゝ友と見てありしかな

○　　下總　浮舟女

人去りし後の心にくらぶれば逢はぬをよしと思ふ此頃

春の夜を女と生れいたづらに經しはたとせの偲ばるゝかな

○　　本所　佐藤千代子

若草の香ひゆかしき野にふしてかなしくなればハモニカをふく

君去りて赤き夕の町を行くひとりの我のこゝろさびしや

○　　宇都宮　高橋白蓮

よきほどのてたつに入りてほか〲と物など縫ふが嬉しかりける

まだ春のさむみはひたと身に沁て緋もみのさわり冷たかりける

○　　愛知縣　松永芳子

ある夜寒む獨りつく〲小時計の二本の針の行くあしを見る

枯蘆の中にゆた〲春の潮寄するが如く胸ひろきかな

○　　伏見　病葉

わびしさに出でゝも見つる踏切のレールの邊り蓬の萌ゆる

緋桃咲く病院の裏を汪洋と大河明るう流れて在りぬ

○　　廣島縣　葵の花

花はあれど小鳥はなけどいかなれば淋しき思われにみつらん

木につもる春の淡雪いさゝかの風にも散りぬものたらぬかな

○　羽前　眞砂

あゝ我も唄などうたひ機を織る工女の群にあるぞ悲しき
ほどちかき家より日毎通ひきてゝに機織るわれのかなしさ
また一人工女ぞふえぬ山際の淋しき家などおもひみるかな

○　札幌　俣野幽香里

叛逆の心抱きて生ける身になほ美しき夢みせたまへ
人戀ふる瞳につと滲む温室のアネモネの花シネリヤの花
戀すれば若き身住める天地の大いなるかな美しきかな

○　福島縣　葉滿子

物もいはで先づほろ〳〵と美しう泣き給ふ君ねたくもある哉
白く小さき蕾のまゝにすがれたる名知らぬ草に粉雪置きけり

○　靜岡縣　薫野露香

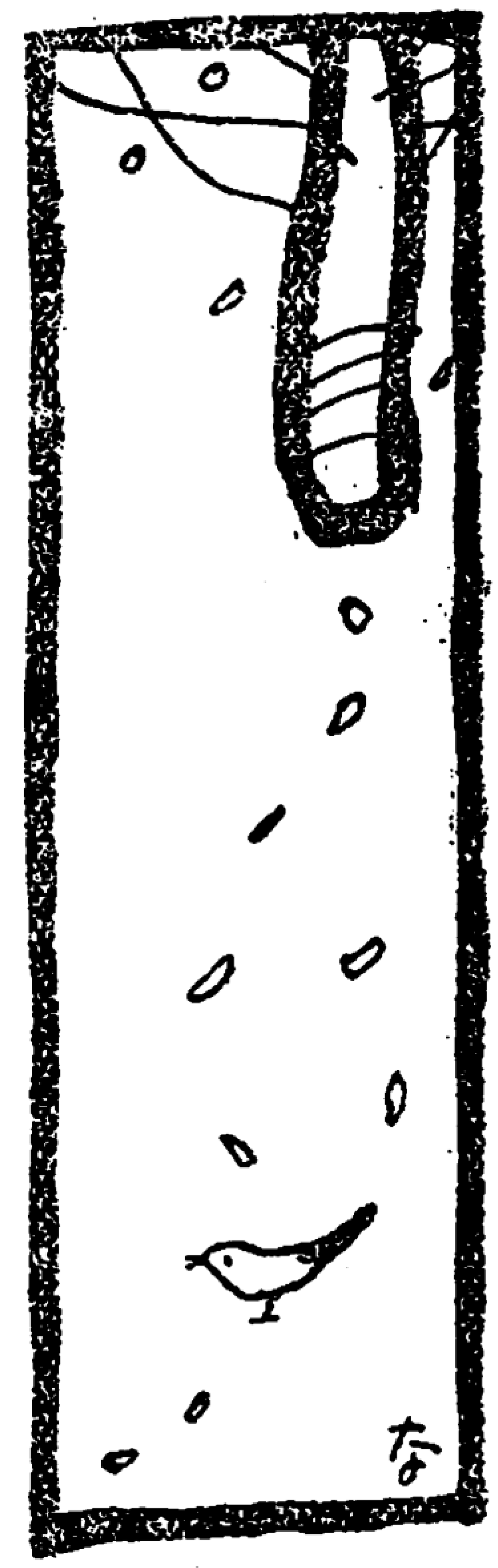
うたゝ寢に春はよきかなやゝ遠く蛙鳴く夜はことさらによし
春淺し雪解の土をしめやかに踏みてうれしや鶯を聞く

○　播磨　龜岡みつゑ

美くしく庭の櫻の咲く毎に少女の春は遠ざかり行く
侘びしさに古日記など取り出でゝくり返しつゝ讀みて見し哉
或君の情に似たり春雪は降るよと見れど消ゆるなりけり

○　濱　千鳥

舞姫のそでにかくるゝ紅扇ひろげて見たき春の宵かな
はら〳〵と紅友仙の振袖のお七につもる紙の雪かな
薔薇色のうす物かづくふらんすの女役者に花の風吹く



若き男の人々

櫻木雪江

紺碧の大空には一點の影だになく、春日和の淡い光線は隈なく天に地に投げて、温い空氣は堤の松並木より來る微風に交りて、自然に體中がゆつたりした氣分になる。

今日の日曜の嬉しさ、奥は母樣と私と二人切り、籠から飛び出した小鳥のやう、自由の空氣に漂ふことが出來る。

部屋の障子を一ぱいに開け放して、自然の光りに浴す、折角輕い氣分になるのに重ね着の心なさ、友染の下着をぬいで衣桁にかけて置く。

手水鉢の側の蘭の葉がスウ〳〵延びて氣持がいゝ、梅が眞白に咲いて懷しい香ひが鼻をつく、自分の袖にも髪にも染みるやうにと庭下駄つゝかけて、暫しを花の下にたゝずむ。

日光の射さない黒塀倚りは濕氣てゐて土がボク〳〵離れて、重々しく下駄につく。

仰げば高き宿り木の雄姿よ。良平、夏子、すぐ胸に浮ぶ、さう云へば俊郎さんに宿り木を去年貸したのにそれつきり、兩方で忘れてゐる、遠々しくなつて物事は凡て忘れられるやうになつてしまふのかと、變に悲しく感じてしまふ。

オヤ！格子の鈴が鳴つた、荒々しい音、一さんかも知れない、先達虎の門の電車乘替で逢つた時、今度塾の人大勢引張つて騒ぎに行くつて、戯談と思つたのに眞面目だつたんだ、大急ぎで部屋に引き込む。

襖をドシ〳〵開けて俄の地響き、五つも六つも足音が亂調に聞える、まあ四人、割に少かつたこと――。『驚かなくてもいゝさ、順に御照會する』なんて滑稽でしやう…。

『第一番は吉田の健ちやん、美術學校の西洋畫の秀才さ』、『第二番は實に吾が母校三田の健兒、成瀬君、詩的な人間さ』、『第三番は安川芳郎君、同級一の物理的な人間さ』、つていやに勿體振つて、立板に水の如くに喋り出す。

『今度美重さんの番だよ、い丶かい、良妻賢母兼文學思想養成所、三輪田出身の才媛、お見知り置き下さい諸君』。

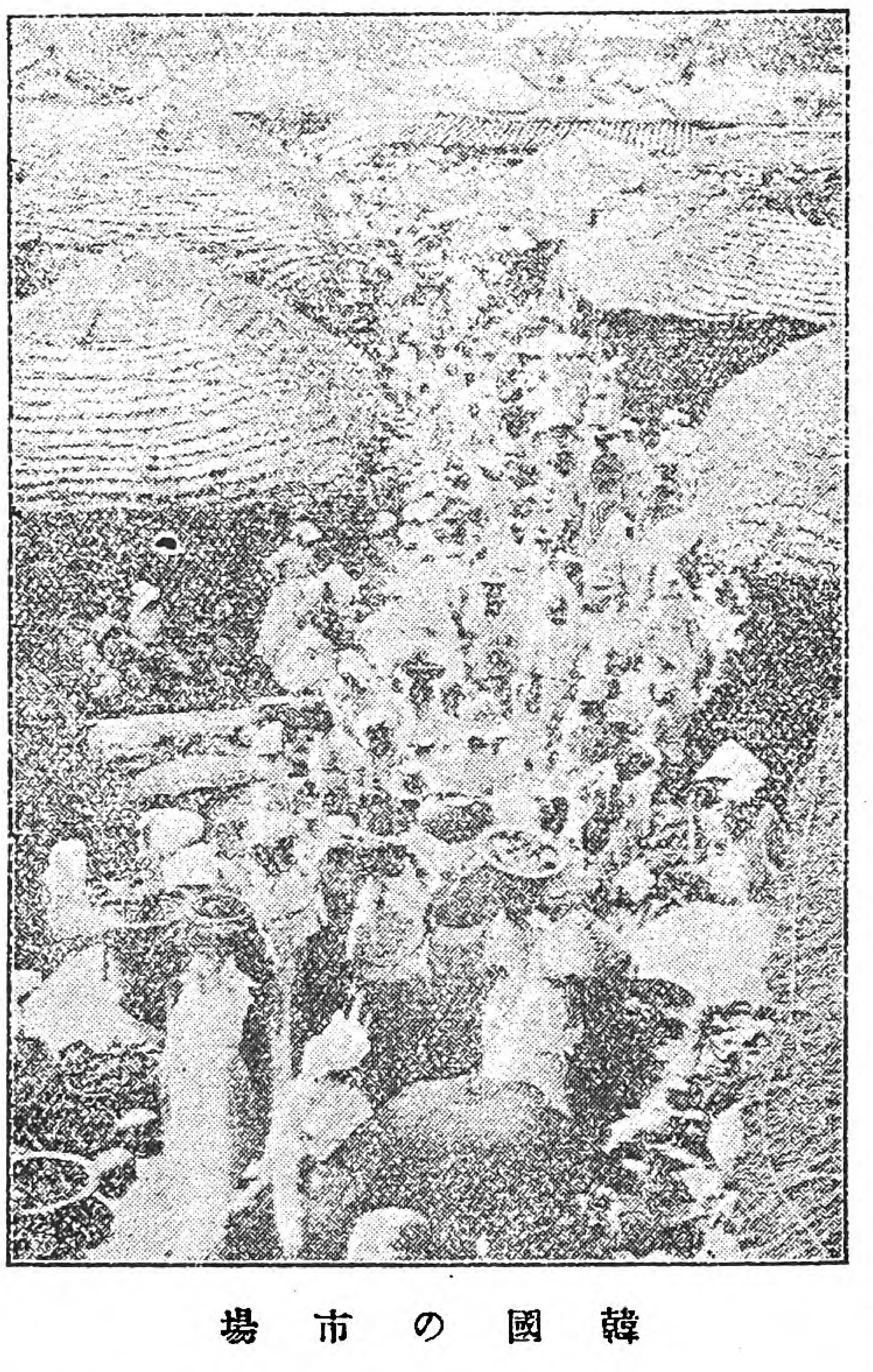
まあ口の惡いこと、一さんの言振りは初手から猛烈ね、だから堪りませんわ、あんな子供のやうに騷ぎ立てたつて、いづれは老來の悲哀や、寂寞に泪する時もありましやう、お互ひに……。

二十二、處女の誇を大切に保つて、觸るればほとばしらん皮下の血潮何程厚かましい女だつて異性の前には顏に紅葉も散つてしまひます。

『何卒宜しく、父も不在で何の故障を申込む者もございませんから、御緩くり……』

でもよく上手に口からあんな言葉が、流れ出たものと心窃かに可笑しくなる。男の子を持たない母樣は、一度に、息子が出來たやうな喜び、何でもお好きな御馳走を拵へましやうなんて、良い加減に待遇つて置けばい丶のに、お世辭の百萬邊、私心の中でシツ〳〵と云つて居ますのに……。

大卓子の上に積まれたは積まれたは、蜜柑の山盛りに、風月の桃山と栗饅頭、玉子煎餅にかき餅、急拵へのお肴にビールまで並べられた。



韓國の市場

四角形に卓子を圍んだ四人、一さんの召上ること、吉田樣は流石に藝術家、召上りやうまで違ふのね。

成瀨樣の可愛い坊ちやま、蜜柑一つおむきになる手つきまで、詩人振つて入らつしやる安川樣の物理的だなんて、どんなに四角張つて入らつしやるかと思つたのに、割にさうでもない、隨分鹽からいものがお好みね、眉の濃い落つき拂つた態度は、未來は物理學研究に外國に入らつしやるんでしやう、有望な方揃ひ、羨しくな

る、けれど私はもつと進取的な方が大好き、吾が身に兄弟のありもせば‥‥。

一さんの揉み上げつたら、青くすり込んで、何一つチヤンピオンでない癖に、縞ヅボンの、何の流行なんて氣取つてばかり、よくこんなに立派なお友達が出來たものと、不思議になる。

麥酒の死骸は數しれず、そろ〳〵本音が出かけて來さう、一さん聲張り上げて‥‥。

惚れるなら赤門一高ソリヤ野暮よ、ペンの徽章に縞ヅボン片手にブック、三田さして通ふお方に、戀しやんせ‥‥。

『まあ素敵ですこと、けれど我田引水ね、聲のいゝ丈け賞めて上げましやう。』

聲丈けは酷いね、マンドリンは上手だよ、ザルコニーに教授されたんだから‥‥

内田敏郎さんといふ方の事でしやう、有名な原のぶ子さんと浮名立てた‥‥』つて云つたら頭かいて居るんですもの、可笑しくなつてしまふ。

吉田樣はお茶の水式の淡白な、そして品格のあるスタイルがお好きですつて、寫生帖か拜見したいこと、マネーやモネーの畫の崇拜者ですつて‥‥、印象派の‥‥、私にも何か一つ書いて頂戴つてお願ひしたら、笑つて入らつしやる。

『出來ましたら』、なんて‥‥、私みたいな繪畫もカヘルも知らない者に‥‥ね‥‥。

大方平らげて富士山上白雪が溶けて低くなつたやうね、そして騷いだ上句、『君歸らうなんて』ずゐ分ですこと、貸席ぢやあるまいし、女の給仕人と間違へては堪りませんのね。つてずん〳〵言つてあげたら、四人で恐縮して入らつしやる。でももう四時四十五分。母樣が御飯をといつても聞かず、でも氣の毒と思つたのか、それだけ感心して上げた。

皆樣立ち上つたら、まあお脊の高いこと、有望ですわ、男の人の珍竹林程いやなものはない、揃ひも揃つた大外套、電車の中で乘合の人が迷惑しさう‥‥。三人のペンの徽章の中に、吉田樣の優しい美の徽章振つて居る。新聞の三面記事に、何か出た時にはいつも理財科ばかり、仕方のない方ねつて、皮肉つてあげたら、安川樣が手まね遊して、『我を忘れて居る奴ですから駄目です』つて辯解遊したのには驚きましたわ。靴音高く、快活な笑聲して、四人のマントは門を出られた。言合はしたやうに、『三輪田君さよなら。』



時の默移

松浦岑子



捉へどころのない心安さと懶さとに、机に凭つて「ヘーゲランドの海賊」をつゞけて讀んでみた。

「男がその愛してをる女を抱くと……さうすると女の胸の血汐が燃え躍つて、嬉しさの餘り氣が遠くなる……。」

「あゝいふ事は初めてゞもあるし、また只の一度きりであつたわたしは丁度、魔法にでも掛つたやうな心持ちがした。でも何うして……あんなに強く女を抱きしめる事が、出來るのであらう。

私はこんな言葉によつて、あの夜と同じ心持ちになつた。私の胸はあの夜とおなじ階調にわなゝいた、久しく忘れてゐたあの夜が、私の胸に甦つた。あの夜の芳烈な甘味は、私を強く強く抱きしめ、無限に緊張したライフに息づかせた。

あの夜はどんなに男の胸の血が、高く波打つてゐたらう。唇が熱く燃えてゐたらう。私は三日ほどゝいふものは、夜も晝もその接吻の延長として、絶えずわなゝいて居た。

あゝした事はたゞ一度きりで、再び來ないものであらう。あの瞬間、私は全世界のすべてのものにも、替へられない寶石を握りしめてゐた。唯極度に鋭つた、感覺にのみ生きてゐた。或は官能からもはなれて、高潮しきつた眞靈の韻律に、無我夢中になつてゐたのであらう。

無上に愛する人を得たといふ喜びほどの誇が、またとあらうか、これほどの幸ひがあるだらうか、私はあの夜、一年にあまる年月憧れ悶えた戀を、得たのであつた。

あれから後の、傷ましい爭鬪と、悲慘な末路の憂患と、あの一瞬に比べたら何でもないのだ、私はあゝした夜を、經て來たといふ事を無上の誇としたい。

戀に對する夜の歡び、それも淡くはかないものであつた。

遂に淋しくたよりないのが私の生活である。不思議な時の歩みに導かれて、人間の靈魂と靈魂とが、神の前にうなづきあつた刹那は、一瞬にして消えた。久しいあひだ、ミスチックなあこがれに波立ちふるへて、闇の中をあてもなく、徘徊うて居た二つの血潮の流、それがふと行きあつて、相接し相觸れて、輝かしい火花を散らして溶けあつたのに、再び遠く遠く離れて了つた。

暗黒色なカーテンを、ふと行き過ぎた風があふつてために碧空の縁を認めた刹那、その縁を横ぎつた小鳥の影のやうに、それほど眞の戀の姿が、私の心の眼にうつゝたのは、短かく、また得がたいものであつた。

冷かな時の推移よ、暗く悲痛な現實の影よ。

あの夜に私を導いた時の歩みは、再びあの夜を、强く抱きしめんとする私の腕からもぎとつた。

まことの花の色に、恍惚としてゐる私の胸にも、醜く淺ましい現實の影はつきまとつてゐた。

芳香のリズムである紅のダイヤモンドのやうに、尊く美しかつたものも、私の手が現實にふれた時、一握の砂にすぎなかつた、夢なりと知りつゝ、なほ夢みむとするをとめを、暖い夢の國からつきはなして、冷たい涙の谷底に突き落したのは、慘酷な時の推移である。

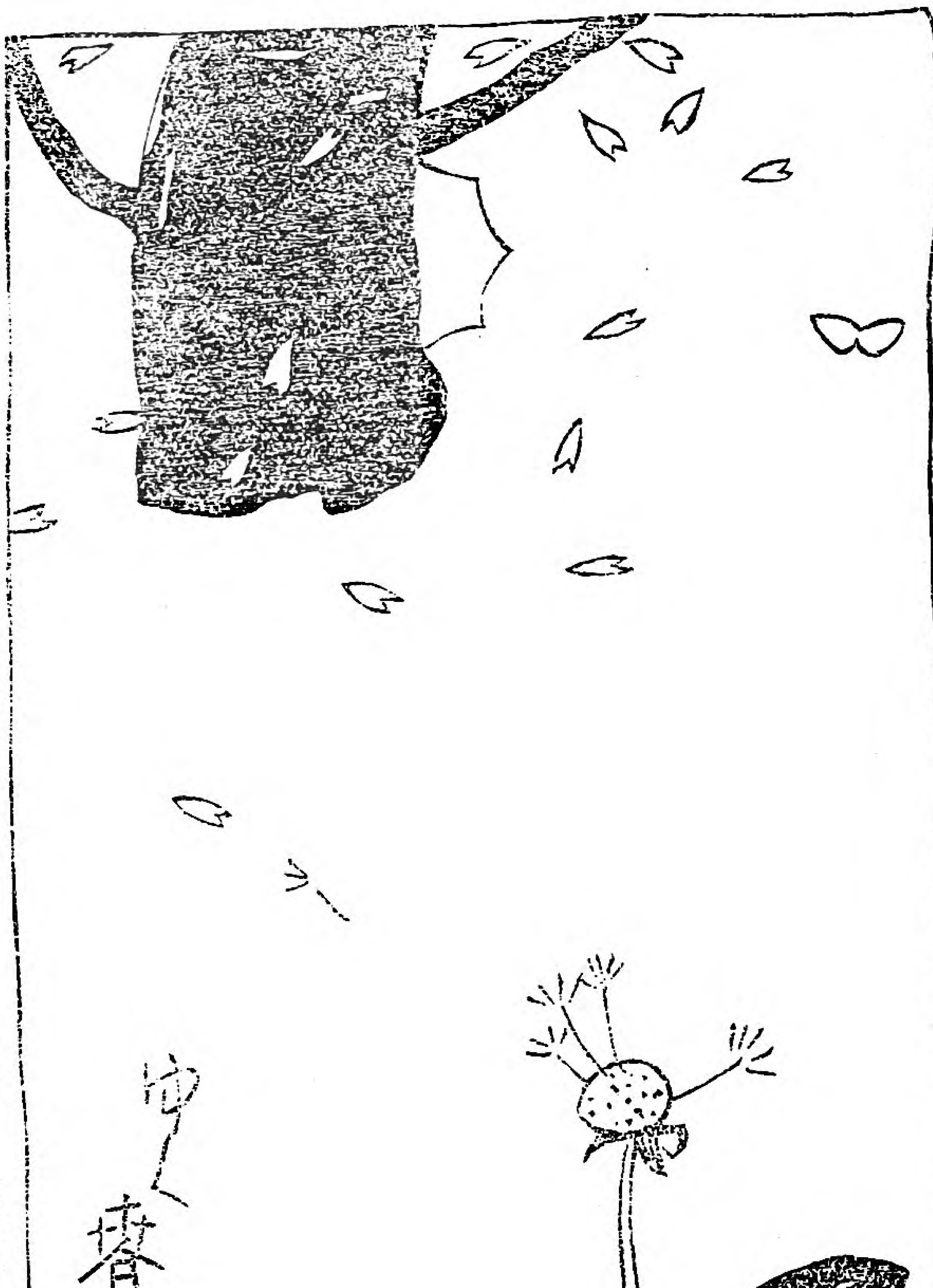
＊　＊　＊

戀の最後の日が過ぎた後にも、なほ私は社會的な交渉のために彼に逢つた。

あゝ戀の最後の日、極度にパッミオネートな高いライフから、急轉直下して、暗闇のどん底に沈んだ最後の日、それは銀の絲のやうに纖弱な情の子であり、焰のやうに猛烈な、戀にわなゝく狂奔の子である私にどんな大きな響をもたらして訪れたらう。

必然的に私は、病床に呻吟する身となつた、一時は病重つて、生命の危機にまで達した、苦しき自己解剖の刃と、不可抗力を以て襲ふ發作とに、惱み悶えた。

自分を罵り彼を呪つた。
絶大な内部要求の、滿たされざるに、やるせなく泣いてゐた私、何物を棄てゝも、唯一つのものは得なければならぬ、自分は空しき影を追つて甘んじてゐる事は出來ないと、ひたすら戀の完成を欲してゐた私、飽く迄も積極的に、幸福を獲得しなければやまないと、力に燃えて居た私——それを不用意に襲つた最後の日は、どんなに深く致命傷を、ピユーアな私の胸に刻んだらう。私は再びたち得まいと、信じてゐた。
想ひ起せば、すべて一種のミラクルのやうだ。



高い熱に呻されて、夢の中に夜と晝の區別もなく、過したのは、五日にみたなかつた、破れた胸の痛苦の堪へられなさも半月とは續かなかつた。一月を經た私は、病床を離れて、日常生活にかへる事ができた、疲勞も倦怠も、少しづゝいやされていつた。そこに捉はれない心安さと、平穩があつた。併しそれは淋しくたよりないものであつた。
パッションがすぎて了へば、冷たく打算的な理智は、私を支配し始めた、情熱の前には、燦爛たる光に輝いてゐたものも、理智の前には、何等の權威も價値も無かつた。

そむいた人は、間違なく、路傍の人であつた。あひ見ても、私の胸は無論動かないし、わが前にあるといふ事さへ、明瞭に意識にうつらなくなつた。

友の一人と、笑ひ興じて話してゐた、ある日の事であつた。彼はその友に、用談をおびて私等に近づいて來た。友は早く知つて、話をやめたけれど。殘りの微笑は、二人の頰に泛んでゐた。

彼の友に對する用談は、極めて何でもない事であつた。彼は私にひそかな注意を、拂つて居るものゝやうに見えた。何氣なく動かした私の瞳に、彼のまなざしは透徹的に輝いてゐた。がそれしも私の胸には反響も起らず、直ちに私の瞳はそれた。かつてわが靈魂の全部を支配して居たものとは、どうして思はれやう。わが心靈を蹂躙した、大犯人よと罵つた相對者だとは、どうして思はれやう、氣分の激變、悲しむべき時の推移に外ならぬ。

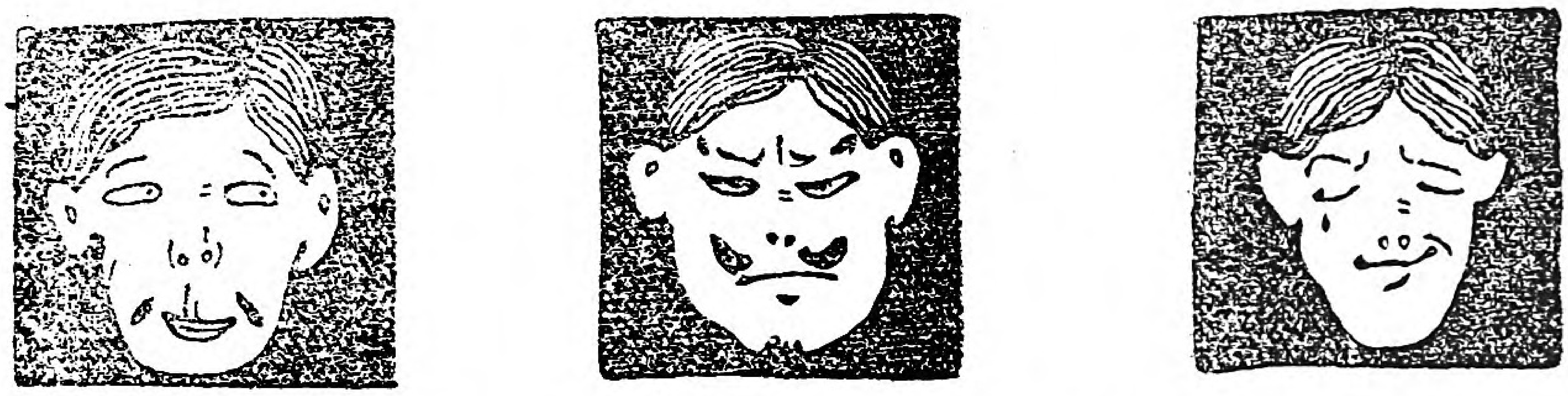
夕べ机によつて頰杖つけば、故しらず淚は溢れる。けれど私は昨日を葬つて、更に新なる今日といふ日、明日といふ日に生きねばならない。寂しくとも淸い生活を、得なければならない、健全な幸福な生活を得なければならない。生きむとするものにとつて、孤獨は決して悲哀ではない。

時の推移よ、私をより幸な、より美しい日に導けよ。

はるさめ

さくよりはやくちりかゝる
さくらのはなにうづもれて
みやこはわかきひとびとの
たのしくうたふさかづきを
てにとりあぐるそのひまに
ああうつくしきはるはゆく
やなぎのみどりほそぼそと
あめはふれどもはるのひの
あかるきぎんざにほんばし
ぬれてはひればカフエーの
ひるまはひとのかげたえて
みどりのさけのかにぞしむ

M



婦人の見たる

男子の癖

要するに無頓着

紀伊　林口和香子

「そりや君、そりやあ君」つてお話に夢中になると、煙管で無暗に火鉢の縁を叩きなさるのが鈴木先生の癖です、瀬戸物なんかだつたら、迚も長持はしませんから知つて居る人は心得てなるべく嚴丈な鐵製のを出します。

　お宅の銅のなんか、罪もないに打撲傷を隨分受けてる樣に拜しました。無論煙管の雁首はいた〳〵しくひしやげて居ます、それに先生は少しも卷煙草を召上りませんから、よほど厄介な癖だと存じます。

　處が同じ學校の島先生にも惡い癖があります、鈴木先生の樣に煙草を飲みませんから、煙管でクワン〳〵とおやりになる心配はありませんが、お手が暇になると何か惡い事を仕出します。折角てんもりとついだ炭のお手前をぐわい〳〵と遠慮もなく掻いて了ふなんか最も惡い癖でせう。ほんとに寒い日なんか島先生が火鉢の傍へお出になると、ひや〳〵します。そして火箸で火鉢の中を掻きまはしてマッチの棒だらうが、蠶豆の皮だらうが、おさつの尻尾だらうが（私が捨てたのではありません）みな火葬に附しますから。白煙濛々と四邊を罩めて、煙たい事は話になりません。お蔭で火鉢の灰を篩ふ事がいらないだけ長所でせう。

　火鉢で惡戲の出來ない時は頻にお髭をひねつていらつしやいます、ピンとカイゼル式（先生のおつもりでは：）にもみ上げたり、もみ下げたり、あんなに虐待なさるのですもの、濃くなる筈はありません。そしてごく眞面目に熱心にやつて居らつしやるのを見るとよく先生のお髭に生れて來なかつたとつく〴〵幸福を感じます。

　序に母家の兄さんの癖を素破ぬきま

せう。無暗と何かを書き度がるのは兄さんにしては罪のない癖です、併し油斷をすると、お話して居る間に大事の教科書だらうが、雜誌だらうが、日記帳だらうが、寫眞ブックだらうが、お構ひなしに、漢詩とも新體詩とも附かぬ唐人の寢言見た樣な事を書かれて終ひます。試に兄さんの狀挿しを御覽あそばせ、手紙や葉書も墨くろ〴〵と、差出人の筆跡を眞似てないのはありません。さりとて經濟的に習字をすると言ふ樣な苦勞人でもありません。矢張り癖なのでせう。

それから着物なんかは脫ぎ捨てゝ置くもの、引出しは開け放して置くもの、お手水の水は捨てないで置くもの、ステッキは忘れて來るもの、女はそれを始末するものだとも思つていらつしやるのでせう、ちつとも整理をつけないのが最も惡い癖だと思ひます。

＊　＊　＊　＊

以上三人から斷定するのではありませんが、私の目から見た男子の癖は要するに「あまり無頓着にすぎて他の迷惑を省みないのではないか」と言ふ事に歸着します。でも女のやうに、餘り遠慮すぎても迷惑をすることもあります、孰がよいものですか、兎角人の癖といふものは仕方のないものです。(入賞)

一寸二三人

近江　ほたる草

兄樣とか弟樣とかおありの方はいやでも其お友達に接近する場合が出來ませうけれど、一人子の私にはとてもさうした機會がございません、と云つて何も殿方を知らぬと云ふのぢやない、これでも父のお友達や親しい方々もいくらかはございますのよ。今日は極ないしようで其方々が常から不用意の間に現す癖をすつぱぬいて上げ樣と思ひます。あらつどなた？見かけによらぬオテン君だなどゝおつしやるのは…？先づ第一に吉川樣から私の知つてる內に吉川樣ほど癖の多い方はありませんの、けれども此方から、ふだんの癖をすつかり取つてしまふとしたら、何だか淋しい潤のない物に成つてしまひさうに思はれるのです癖でもつて感情を充實させ樣とする人？と云ふとをかしいけれど詰り酷いどもりがさうさすのでせう。それだけ此方のは有意味でどこかに性格の一部が語られてある樣に思はれます。ちつとも、おつちりした所がなくて、始終ソワ〳〵して居らつしやる、そして大きい瞼をパチクリ〳〵させ乍らお話なさいます、急ぐ時なんか居

がぶる〳〵ふるへて、そそれからつてほんたうにお氣毒で見かねて、からなんでせうと口をそへるとやつと安心したらしく點頭かれます。それからほんとにさうだとか、如何にも、なる程と云つた樣な時には御自分の膝をトンと叩いて、につこり。三日に上げず入らつしやいます。それから修作樣母のカズンですの、新家のお園ちやんから、ヤヽさんつて云ふニックネームを奉つてある方なせかつて其通り、一寸云つて見ますとね、入らつしやるなりヤ御免でせう、お上りと云へばヤ、お敷遊ばせ、ヤありが度うお一つどうぞ、ヤどうも、何にでもヤを付けなければ氣がすまぬと云つた風エ、まさかつて？まあ誰が僞なんか申上るものですか、お園ちやんがよい證人ですわ。西町の正ちやんは、話のとぎれめ〳〵にキッ



（地賞）淺草にて　芝　後藤女郎花

ト人の顔を見つめるのが癖、幾叔父樣――お園ちやんの父樣――は何かと云ふとすぐ頭をかくのが癖一ばんをかしいのが井上樣でせうね、お年はまだそんなぢやありませんのに全くお見事なおつむりでしてね、まるで油でもかけて艶拭きしたかと思ふ程テラ〳〵輝いてますのよ、そこへ赤ちやんの生毛みたいな毛が薄つすらと並べてあるのですもの、實際素敵。そつと頭をかしげて何かしら考へるらしい目付でたへずふゝん――ふゝん――ておつしやいます、それも差かまへのない折なら、よろしいけどお話の最中でもおかまひなし、なさるんですから呆れますわ、胸中悶々とでも云つた樣なわけぢやありますまいかホヽヽ私の父はね、ちつとも戯談の云へる人ぢやありませんの、昨夜もお父さんの泣き顔が一度でもいゝから見度いつて申ましたら馬鹿なつてどなられて仕舞ました。だつて生れてから見た事ないのですもの戯談か氣に入らぬ事云へばぢき馬鹿なつが出ますの、やつぱり口癖ですわね、オヤオヤ隨分な事しやべつて仕舞つた、こつそり告口なんか遊ばしたら死でもたゝりますよ。そのおつもりでねホ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

男教師の癖

三國　山下都香

職業により境遇によりまして男子の癖も自然に異る事と存じましたので、私の見た男先生方の癖を拙い筆で書いて見ようと思ひますの、けれども男先生方が私の横にゐて「僕の癖を素破拔いたら承知が出來ぬぞ」と睨んで被入る樣な氣がして、小膽なる私一層筆がまはりませんのよ。

寺井樣。一時間に六七回位はウヽーンといつて一種特別な咳拂ひを遊ばし乍ら、反身になつて氣取つたスタイル遊ばすのが癖、何時ぞやの夏季講習でしたわ全部の教員が一場に集りました時、寺井樣のお姿が見えないから、隣席に居られた絹樣に「寺井樣如何遊ばして」と雜記帳の隅に書いて示せば、絹樣のお答が奇拔なの「獨特な咳拂ひが聞えたから後の方に居るのでせう」つて。

松崎樣。この方は某樣のマスターで被入いますの、演説なさる時に演壇上を端から端まで行つたり來たり遊ばして、興に入ると演壇といはず、机の足といはずお靴の褄先で、コツ〳〵おたゝきになりながら、御本

人は一向平氣で、しかも熱心にお話下さいます。そして時々小指で鼻の先をチョン〳〵おつゝきなさるのと齒の間に何かはさまつた時のやうにスウ〳〵お言ひ遊ばすのが癖、始めて伺つた者など思はず吹き出して、赤面致すので御座いますよ。

…東樣。今では慣れたので何とも思ひませんが、この方の新任式の時で御座いましたわ、頗る沈着な態度で「只今校長樣の御紹介と…」仰有りながら、兩手で洋服の裾を持つて私等が着物を着る時行でも合す樣に、キユウ〳〵引張りて被入るの、笑ひ坊の私もさすがは兒童の前ですから、可笑しさをしのんで居たもの丶、誰かのスッ！といふ聲を聞きますと、たまりません、やつと舌をかんでてらへました。

神田樣。神田樣と被言るのは勤續二十年の祝賀會もすんだ首席先生ですの、整頓する事のお好なそれはそれは規律正しい方、御自分の机の上の書籍は授業に行く時屹度揃へて被入るのがお極り、滑稽家のH樣つたら神田樣のお靴音が事務室の前に轟くと「さあ君來たよ又やるぞ見給へ」だつて皆が密に注



（入賞）ランプの掃除　芝　村木萩花

意してゐると、いかめしい八字鬚撫で乍ら机の前に來るや否や、今なほして行つたばかりの、整然と並んでゐる本に手をのせられます。

佐野様。「おぞい」とお言ひ遊ばすのが口癖、ある時の茶話會に、K様が「君はよくおぞいつていふよ」と仰有つたら「僕そんなおぞい事いふかへ」とおいひなさつたので大笑ひいたしました。

藤井様。教壇上にお立ちの時は勿論、一寸お立ちなさる時でも、手を腰におとりなさるのが癖、昨年の年賀狀の終りに、「僕は年改ると共に幾度か忠告された下翼直立姿勢の、訂正に苦心最中」だつてそれからはお見受け申した事ありませんわ。（入賞）

學生さん

名古屋　波の花

女から見た男の癖？、オホヽヽ、そりや隨分面白いのが有つてよ、だけど私、いち〳〵覺えちや居ませんから今直ぐお話は出來ないわ。ですがね。何しろ男の方——私の今云ふのはおもに貴方の様な學生——は私達と同席すると、奇妙に堅く成る癖が有るのね、それを何喰はぬ顔で隱さうとするのも一つの癖、オホ隱したつて駄目なんだのに……快活らしうお饒舌りに紛らしたりね、そんな時に限つて大抵は咽に聲を引つ掛らす方が多いわ、そしてまた其の上にごまかさうとて慌てた笑ひ聲の大きい事もホヽヽヽ。

えゝ、そりや私達から見てると隨分をかしいわ、だけどそれは大抵お馴染みの薄い方に多くつて度々お目に掛つて、もうすつかり霜の解けちやつた方にはそんな事は有りませんの、其代りね、細かな癖がずん〳〵露出しに成るのよ、恰度貴方が手持ち無沙汰な時は、何時でも顋をお撫でなさる、と云つたやうに、ホヽ、それがね、あんまり親しく無い中は誰方でも皆さん御自分の癖を出さない様に、一生懸命に隱すんですからね、アラ貴方だつて初めは……オホヽヽ、本當に男の方つて面白いものよ。

私まだをかしいのは其の學校々々で、一つの共通の癖、と云つた様なものが有る事よ。あの八高の方に限つて、ちやんと胸先きをきゆつ〳〵と引合せるんですそのくせ着物の着様つたら何時も〳〵ちつとも締りが無くつて、隨分とヅボランが多いわね、そして、あのイガ栗頭の人達が、彌つちやんだの三ちやんだのと、お酌みたいな呼び方して得意がつてるのも隨分嫌やな

もの…オホヽヽ。醫專の人はね、また着物の襟先きをつん〳〵と引くくせ、そして隨分長く着て居ますよ。洋服ですと屹度上着の兩脇を氣にして引き下げる事と、も一つ目立つのは、お頭髪を分けて被居る方がね、斯う握り拳の小指丈一本を、一寸氣取つた形ちに撥ねて、話の絶え間には必ずちよい〳〵と撫でるんだか抑へるんだかなさいますよ。エ?、貴方の學校の癖?!、知らないわ、だつてうつかり言へば後の祟りが:

ホヽ、怖いわね。

總體に男の方は御機嫌の好い時は、胡床の膝に頬杖突いて、にこ〳〵とお話しなさいますけど、其の反對に心が働いてる時は拳、あの巖丈な拳を堅く握り締めて、ムッチリと默り込んぢやつて、腕組をなさいますよ、そんな時は屹度怖い顔で、手の甲には太い〳〵靜動脈が立々と目立つて居ますよ、(入賞)



ゐさとり　芝　明石浪子

西洋史のS先生。御講義の早い事丁度自動車で走る樣で、私共は時々ぽかんと鳶に油揚を奪られた馬鹿者の樣にしてゐます。夏の反對に冬は七八枚も着込んででろ〳〵遊しながら、口癖の樣に越後の冬は閉口だと、南の國の故郷を御自慢なさいます。そしていつも長い指をバラ〳〵に擴げて大きな口を開けて眼鏡越にジッと生徒の顔を眺めて居れる、私はよだれかけが落ちやしまいかと思ひました、渾名はあんてう、、(紅雨)



帳簿の金文字

秋花

事務室へ這入ると中央のストーブに赫々と石炭が燃えて居る、其周圍を包圍した有象無象がストーブ會議を開いて居る。又かと思ひながら夫等の人には目も呉れずにデスクの前に靠れてホッと吐息をついた。隨分冷たい朝だつた。

渡された鍵を持て脊丈よりも高い、重い金庫の扉を左右に開けると私を苦める大きな帳簿が金文字の目を光らせて睨んで居る。一冊々々と抱つこしまゐらせてデスクの上に安置し、海綿やインクを便利宜く並べた

女中が一輪ざしの水をかへて持つて來て呉れた、白梅の花が三ツ四ツ微笑んで、强烈な香氣を鼻頭に送つて呉れる、終日、殆ど氣の休まる閑とてもない私の心と、頭腦とを慰撫して呉れるものは唯花あるのみ、季節々のやさしい花が來る日〱私の机上に有る限り私は不平、不滿、を打ち忘れて主人の命に維れ從つて行く事が出來る。實に、花の慰安や大なりといふ可し…ではあるまいか。

海外移民取扱と海外回運業と移民宿泊業とを兼ねた此店の簿記全部を女手一つにやつて退けて、可なり忙しい金錢出納を委せられて居た私の責任の重さ、時にはもう一刻も斯る處には勤まらぬと、ホト〱泣き度くなる時もあるけれど、考へて見れば夫が又、何うなり斯うなり私の手一つで切り盛が出來て行けると思へば、內心愉快で耐らない。

朝の九時から午後の五時迄、四角四面な定規的の事務家が、事務の進捗、不進捗に係はらず、時間さへ經てばお尻に帆掛けて歸つて行く、かうした事が何より嫌だ、甚麼に苦しくとも、忙しくとも、活氣のある事務をテキパキとして行き度い、事務の爲ならば時間が遲れようが何うしようが、私は遣れる迄遣るのが好き

まだ三時、まだ四時、と時計と睨みつくらの電話掛を見ると實際癪にさわる。

此店の主人は有名な癇癪持で時には地段駄踏んでボ

ーイを叱りつける、可なり氣を揉んで居る私達にさへ口ぎたなく罵る事もある、烈しい時にはお内儀さんを呼びつけて靴蹴にかけるともある位。さうした主人に仕へて、可成小言を出させぬやうにと心を配るのは實際容易の事ではない。大急ぎで自用車に乘り行く先も告げないで『早く遣れッ』と足踏み鳴らす、『旦那、何方へ』?『馬鹿ッ、海岸通りの戎屋迄だッ』何方が馬鹿だか判りはしない。外出すると皆のものがやれ〳〵命の洗濯と言つたやうにゾロ〳〵と煙草を手に又もやストーブを圍む。

一寸手のすいた間を傳票の整理にかゝるとボーイが『西村さん、電話』といふ『誰から?』『Kさんから』……まあ、嬉しい。急いで電話室へ這入る。

あゝ、切なかつた、男つて、何うしても靈的の戀は出來ぬものと見える、私、肉體の戀は厭だ。抱擁、接吻、握手、情が高潮に達しても、肉に落ちるのは絶體に厭た。



壁ぎは　米澤氷室草子

今日はインボイスが十二通も出たボーイに領事證明を取りにやる。税關へ行つた井上さんから電話で税金を六百五十九圓三十五錢を請求して來る、早速三井銀行の小切手に支拂保證をとつて持たせてやつた。安藝丸の戻税を荷主へ返送する、邊鄙の荷主は取引銀行がないので一一郵便局管轄を調べなければ判らないんだもの、手數のかゝる事夥しい。卜部樣の勘定金が間違つて居

て電話する、之だから出納は厭。

記帳最中に、インクの附着たペンの先で白梅の瓣に一寸惡戯をする、純白に黒點を染めると目や口が出來て可愛い。

『おい、鳥居君、もう、備後丸は出航たかい』

『まだ』

『もう積めなからうか』

『さうだなあ、何を！』

『嘉納の菊正宗』

『何噸位』

『さあ……、調べて來よう』

這麼問答のある間に仲仕が判取に來る、運賃立替だ出納の中で仲仕の運賃立替が一番小面倒だ、何十何錢何十何錢といふ小口が一日の間に二十も三十もあるんだもの。

毎日々々移民が澤山やつて來る、重に九州、廣島、和歌山方面からも盛に渡米する、田舍の百姓が大部分をしめてゐる、大抵は田畑山林を賣却して行く。中には如何はしい女も行く事があるけれど、巧に理由を拵へて居る出稼は女も餘程多いやうだ、此邊の移民周旋屋へ來る女連の風俗の變な事、あんまり感服の出來ぬ御面相を夫とは御存じもなく、濃厚とお化粧して、シューッと堅い木綿縞の衣服の上に海老茶袴を胸高にと云ひ度いが腰高迄にずり下つて、色變りの紋綸子の羽織なんか着込んで未來のハイカラを氣取つてゐる笑止さ、噴き出さずには居られない、大抵かういつた風體の女が多い、中には隨分婆さんも居る、時としては洋服のシックリと似合つたスタイルの中年の女を見る之等は二度目の出稼だとか、兎に角、男にしろ、女にしろ、一目見ればあれは布哇への移民だと直覺が出來るやうになつた。移民は目の檢査が嚴しい、三分の一は目の爲に一船も二船も遲れるのがある、ある夫婦者で良人が合格して妻君が目の爲に一船遲れる事になつた、どうするかと尋ねると、遲れても構はない、一時も早く目的地に進んで呉と云つて居た、健勝な妻君の心を思ひ遣つて、何とかして合格させてやる工夫はないものかとも思つたけれど私の自由には行きはせぬ。

此頃此處の店員に、淋病に惱まされて、來る日も來る日も變な腰付をして居る不景氣千萬な男がある、一體運漕屋の店員等は隨分氣がきいて、ハイカラな、苦味走つた男が多い丈に女なくては夜の明けぬ連中ばつかり、唯の一日として遊里に足を向けぬ人はない相だ

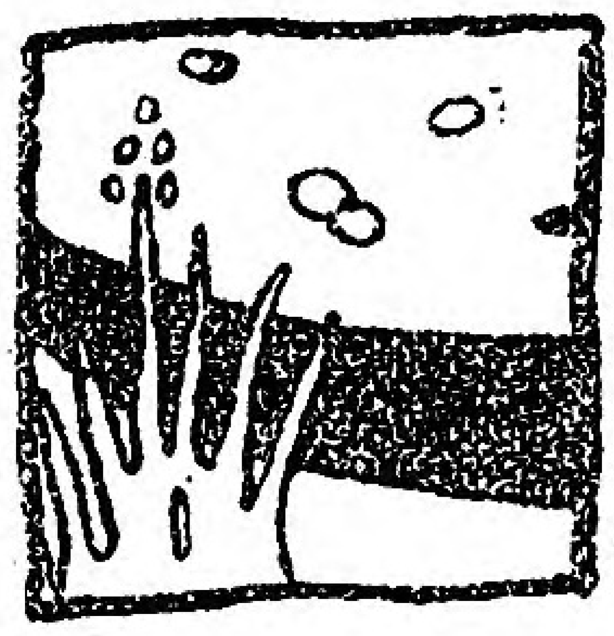
（有妻者は例外）、手さへ止めて居れば女の話ばつかりして居る、人馴れぬ最初の間は之等の人の話が耳に入ると其場に居耐まらないで逃げ出して居た、野卑極れる前夜の惚話に時間を費して耻とは思はぬ之れ等思想の劣等な人達に交つて居る私の行末が思ひ遣られる私は心迄堕落させたくない、生活難と云ふみじめな名の許に斯うした日を送つて居るけれど、前途はまだ遠い、自重せねばならぬ編輯局に忙はしないペンを走らせて被居るKさんの事が頻に私のあたまを往來するあゝ、自重！自重！自重せねばならぬ。



濱の女　本郷星とよ子

移民の競爭で大將の歸店が遲れて七時といふのに漸つと勘定を濟ませた、案じて居た帳尻と現金がピッタりと合つた嬉しさ、「西村」の認印を押捺する力が籠つて居た。金庫の鍵を渡して歸らうとすると『西村さん』また何か臨時の用？と思つて戻ると大將の手から横封筒を渡される、金拾五圓也……『此間中は夜業させて御苦勞でした、コンミッションの歩分けです』

あゝ拾五圓！拾五圓！給料以外の口錢、取るに足らぬ女の身としては此拾五圓、實力によつて得た金だと思ふとどれ丈難有いものぞ。



吾世のうらみ

葛の葉

私の父は、私の母は、なぜ私に男なんかを持たせたであらう、私に何を與へようとて兩親は私を生んだであらう、幼さいうちはならぬ乍らにさへ自らは着なくとも喰はなくとも、子供に子供にせめて子供にと、暑い思ひ寒い思ひもさせなくて成人させ、何をかいゝ事が身の前へふりわいて來ようやうにおいりたてそゝり立て、我がまゝも許して來ながら、此最後に!!此最後に!!何故つらい悲しい男なんかを與へて今迄をてんぷくさせてしまつたらう。此のてんぷく、長太息!!何にもならない長太息。

妹にもうらみがある、父にも母にも世間の人にもうらみがある、而し口端なき世間の人にはそらうそぶきもなるものよ、妹よ、誰もからいつた彼もあゝいふいい加減に身の納まりをつけて下さいと、なぜ私に銑をつきつけたか。

卵から雛鳥にかへり今盛りなるこれからを、一番美味しう御座いますか、と鳥屋がなま〳〵しい血をみせ乍ら狂ひつとびつする鶏を、ぎらつと光るきつさきに咽喉元を一はねはねる處をみて、さぞ美味しからう、とのんどをならすか、可愛さうだと思ふか無情を感ずるか、よせばいゝのにと鳥屋をにくむか、世間の出來事とあきらめてやるか、鶏こそいゝ災難である。

其昔なまじつか世を知り初めし頃一室に書よみ終へて互に陣どりふとんをかつぎ乍らのねものがたりに、二人はいつの日にか別れねばなるまいか、山の奧へでもはひられないものかしら、親人も寄る年波の行末はてゝの家へも他人が這入り、お人形樣のとりあひに聲あげて泣く子供がリボンひらめく頃には……と何とはなしに一番鶏をきく迄も話しつゞけて、まゝよ二人は一緒にいつ迄も〳〵こゝに居ようよ、生れた家だもの誰が何といはうともどうする事も出來やしないからとお前もいつた私もいつたか、あの詞の端はどこで切れたらう。二人はたゞ泣いたつけが……。

赤い椿のきれいな家、山吹の花繁く咲くうち、木蓮の井戸水にうつる家ちり込む家木蓮はまつしろい肉の厚いなめらかない肌を持つた花、無花果のおもしろくほゝゑむ家、柘榴の花赤くさいてみのるうち、つぎ

木しなくて一本の柿に澁きとあまきとみのるそをあらそつて立竿にはねる家、猶まさるにあたゝかい父が母がある、古郷よと別れての三年目を、私はなつかしいと新橋から汽車にゆられ〳〵て、やつとつきつ行つてみれば——此二本線にふくまるゝあまたよ、空漠たる野原をさまよつてかへつて來た。

それ見ろ、と人はいふ、けれど昔の夢は忘られないもの。何かい、物が何かしらめでたきものがあらねばならぬ、あらう、と探りつゝあるにはあるけれど。

この樣にもいふてくれた父、あの樣にも敎へ導いてくれた母、さては思ふがまゝに振舞はせたらんにはと自身に覺えありての姉は其昔父に母にさからふて、唯我味方になりてもくれし姉なればと、それ等の人に柵の中でも苦しかりし出來事を一伍一什をいつはらずに物語つたら、何とか方法もつかぬものかは、と私は胸躍らせて、アルコール分も少しは調合して森の夜をしんみり話したけれど、遂には、効を奏せなかつた。

あらぬ濡れ衣きせられかけての其暫しに外出過多なるハスの此頃などを思ひあまつて、なぜ私は女に生れたらう、なぜ私は男に生れなかつたらう、自らは生れ古郷の空へさへ一本として惡しき使りはとはせなくてやれる丈を一心にやつてるのに此つめたき衣きせようとはと——過ぎし春秋はかうでもなかつたものにといつそ〳〵と剃刀を戲れて咽喉にも押しつけては見たけれど、さうしたら此後を!!?と涙のみあふれてはなれたる一幕も演じかねてと、眼曇る母には只奥齒に物の挾まつてる思ひをまともにはいひ兼ねて、横からちらりと眼鏡越に位でとゞめたが、それ丈をいふ母にさへ父にさへ姉にさへ、一から桐まではあらはにひろげえぬは自身にさへ其心持に於ていくらか、はなれたる——と思はずにはゐられないが、年ふけて世事になれたる人々なれば詞の一句づゝにも我意中はさとりしものならんが、さりとて何とか昔の心になりてすくひ上げても呉れさうなものを、父も母も、かつては我味方なりし姉までが、けつく同情はよせてくれても自由たれよとすゝめてはくれぬ、もろともにとたゞ因果をふくめてくれるまでに止まつて。

泣く日計りもないけれどされど、一擧一動小言いはれて、無理難題をぶつかけられてそれで、口一つも返さずに詫言いはねば納まらぬ姑を戴き、氣まゝいはれても笑つてよけて行かねばならぬそんな道なら、末にどんな花のアーチがあらうとも通りたくはない。



○　神戸市　若松仙子
ひたすらに眼をとぢてゐぬあぢなき思ひでの夜の我をめぐれば

○　廣島縣　片岡さとる
だらしなき手枕すがたわれとわが見つめてゐるが如く淋しき

○
忘らるゝことのはじめにあらずやと都に上る君を送りぬ

○　北海道　角館すゞ
夜となれば園生の薔薇の芽も眠るあでやかに咲く花の夢見て

○　小石川　保科銹子
黒き服に赤きはかまをはきしめて兎狩行く北の春の野

○　深川　矢澤榮子
夕ざれば薄紫のベールにて眞葛ケ原はつゝまれし如

○　日向　優花
いやしくも物皆な死して音もなく手ばことざしぬ靜かなる夜よ

○　埼玉　渡邊積翠
夕暮はこのまゝ我を包めよと暗がりさしてひた走りぬる

○　山口縣　滿須子
灯を中に恥しかりし對ひ居や袂まさぐる指も顫ひぬ

○　山梨　與曾子
花咲きぬ鳥も歌ひぬしかあれど君と別れし心さびしさ

○　石川縣　北明星
僞りの君の言の葉まにうけて泪流しゝ日のなつかしき

○
とらはれの内よりのがれ出る時うぐひすなきて世は春となる

○　愛媛縣　夕凪
雨もなく風なきこゝにあらむより野こえ山こえゆかむと思ふ

○　京都　松浦峰子
棄てられてしたらぬ戀になやむより戀せぬ時がまされどわびし

○　播摩　富香
吾が戀は香のけぶりのそれのごとたゞ一條にたち昇るかな

○　小石川　北島きく
虚勢てふ悲しきものにたよりこし我が身の果てをいま思ひ知る

○　明石　秋海棠
淡路島入日にふけり夕凪のみどりの海にうきし島かな

○　大阪　逢阪映子
あまりにも御文しげく來るほどにひた戀ふ心日に疎みきぬ

○　京都府　田中美子
十二時の終り列車のすぎし後小窓靜かに粉な雪のふる

○　大阪府　宮崎唯代
石うたばなにと響かむわが胸はうつろの如く深くはあれど

○　滋賀縣　綠髮女
黄昏の日の彩りし京の町若き女優の笑ひてぞ行く

○　神奈川　紫雲子
田の水にさす街燈も寂しけれ南風ふく夜の暗さに

○　大阪市・田中登久子
何となく淋しき日なり活動のしるべ女の疲れし瞳

○　靜岡縣　阿部三千世
花をぬけし蝶まひゆきぬ湖の水の面に夕雲の影

○　釜山　手島千枝子
沈丁の花さく國より來しと云ふ漂泊の子の暗き瞳よ

○名古屋　波の花
何れとも捨て得ぬ戀を二つ得て來べき運命にふるへてありぬ

○青森縣　上野禮子
何げなく戯れいひし言の葉のはしなく今となりにけるかな

○麻布　今井千代子
ちる櫻少女の持てる紅糸に重なり合ひて悲しみぞわく

○姫路　九千子
二人をば許さぬ春の細道はにくみても猶あまりあるかな

○三國山下　都香
このまゝに死なばなどふと思ひけり眠らんとする刹那の中に

○秋月すゞ子
をり〳〵に痛みぞ覺ゆ此白き乳房ふくるゝ時としなれば

○伯耆　田村美子
かたくつむ瓶のコルクのあくごとく其たまゆらに力はうせぬ

○新潟縣　河合濤江子
ほろ〳〵と雉子鳴くころに霧はれて大野の原に春風ぞ吹く

○福島縣　稲澤きく代
哀愁と強きうらみのまつはりてわか若き日は早やあしにゆく

○芝區　さゝふね
あけぼのゝ窓に來て啼く海の鳥しろきは我の戀ならまし

○紀伊　林口和歌子
戀すればすべての人のわれを見る眼にうたがひの影をみとめぬ

○宮城　齋藤靜子
空青く晴れ渡りたる春の日の心となりて君が文よむ

○
捨てられし人形の如われもなほ暗き一家にひねもす泣きぬ

○
わが心嬉しきばかり足元に菫の蕾咲く丘に上れば

○
うす紅の貝の葉一つ浮べけり入江の海に月の上れば

○加賀　さがの子
小鳥等は歌ひつかれておぼろ夜の櫻のかげに眠りてやあらん

○函館　濱の女
かなしさとこの欣びといづれかゞ胸にはのこる思出とならむ

○西多摩　笹本夕美子
きられてもきられてもふく桑の芽の生きん力のはては知られず

○對馬　伊藤夕陽子
かにかくに亂るゝ心かき合しかき合しては又も活きぬる

○神奈川　浮草
若き時は華やかなれと母上のみ言葉さへもかなしきものを

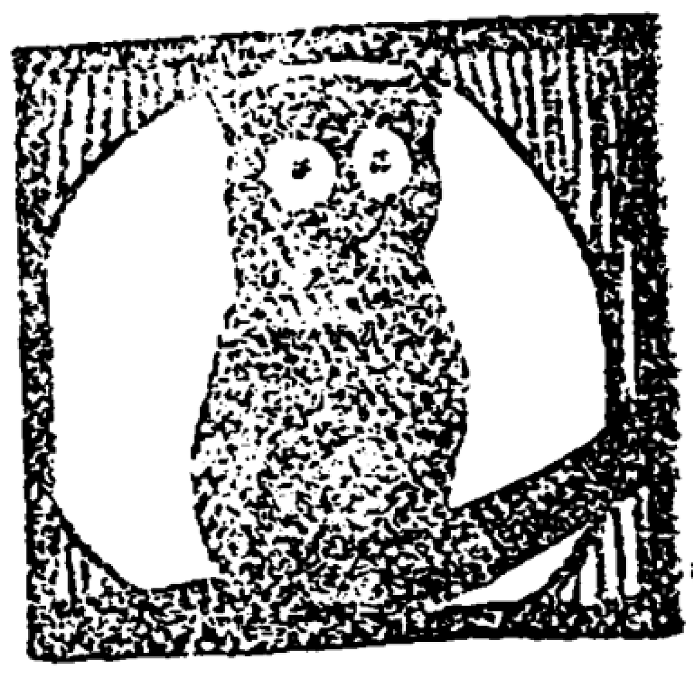
○京都　若藤曉子
風の日は門の戸しめて猜疑しぬ女計りの家の淋しさ

○石川縣　秋露
けしの實の中くりぬきてすきはせむすゝり泣く日の小さき心

○茨城　田村はつ子
あけぼのやかすみのとばりうすれ行けば筑波の峰は紫に見ゆ

○廣島　村上濟子
四季咲の今は春咲く紅薔薇に口あてゝみし露置く朝

○なでしこ
籠さげてもずそかゝげて畑に出で若菜つみけり春の雪降る



夜の永代橋

矢澤榮子

春の夜は靜かに更け行きて、橋畔の柳の新芽が少しのびて夢見る如く川風に吹れて居る。けたゝましい電車のひゞきが消去つた後は、たゞ荒い波の音がザク／＼と聞えるばかり、洲崎へくり込む浮れ男が高笑ひをしながら一群橋を渡て來る、水髮のいてふ返しの藝妓が二三人の客と共に小褄ほら／＼さばきながらさゞめきつゝ行き過る、と若い男が二人で後から何かはやし立てる、叉電車がチン／＼と通り去る、隅田川通ひの汽船が凄い樣な氣笛を鳴して浪を破つて走つて行く、遠く／＼――かすかに月島のほとりが薄明るくポットして見える、洲崎遊廓のあたりは紅色に映えて、赤い燈や桃色の燈が天までうつゝて居る樣だ、俥が音も無く走つてくる、俥上の男は醉つて居るのか心地よさゝうに眠つて居る。

春景色イ――とかすかな三味線の音と共に、風にでも送られてか聞えてくる其の心地よさ………

浮いてかもめの一イ二フ三イ四：三味線の音は叉さえて高く／＼ゆるく聞えてくる。

口笛を吹ながら學生が三人マントの肩をゆすりつゝ通つて行くそれも軈て川岸から川岸へ消てしまつた。

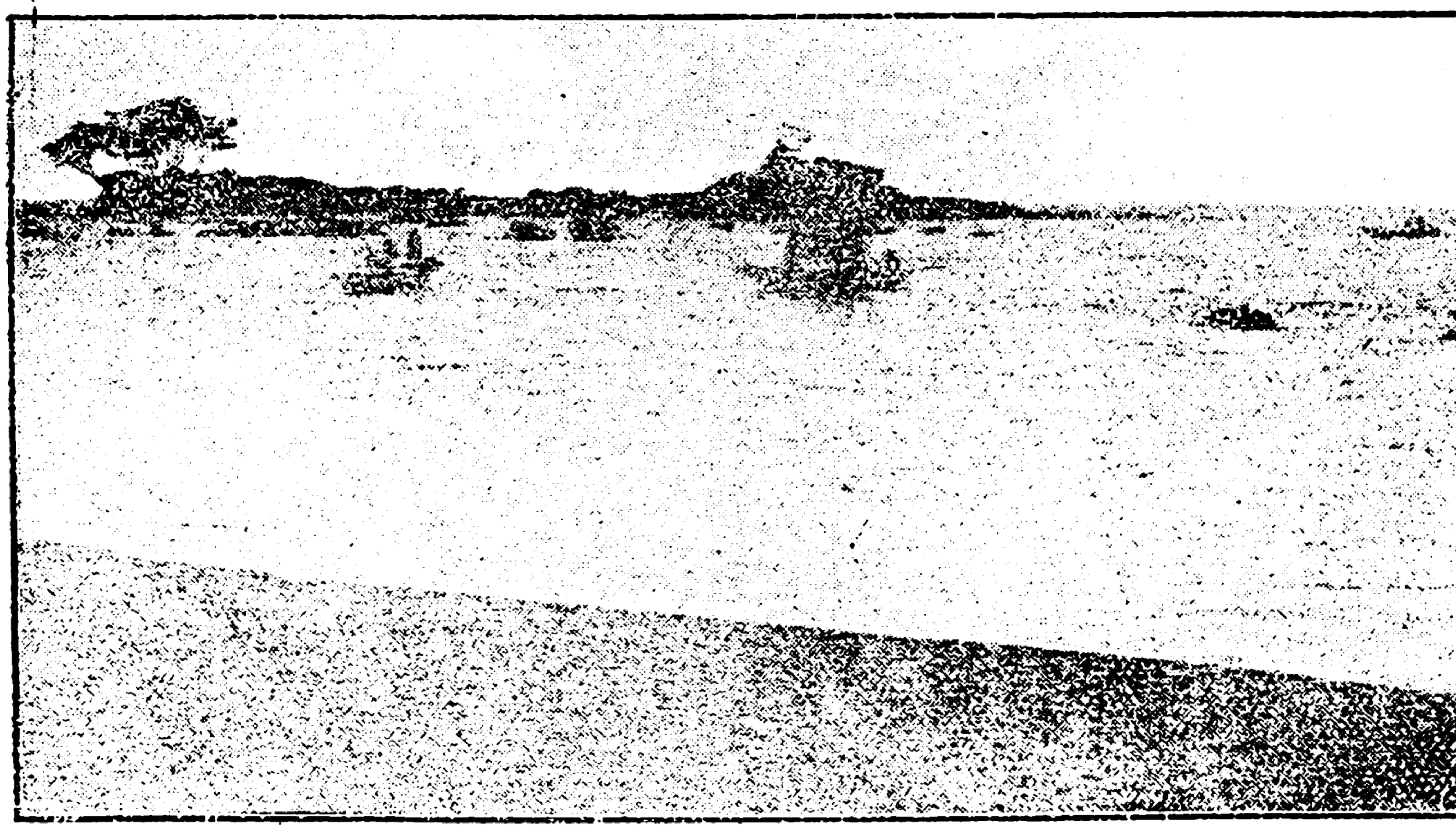
靜かに橋を渡つて行くと、びんの毛がもつれてさゝやく樣に頰にかゝる長い袂も褄先もヒラ／＼ともつれ合つて夢心地になつてしまふ。朧にかすむ沖近くに船の燈がまたゝいて居て、林の樣に立ならんだマストが黑く見える。房州行の汽船が靜かな空氣を破つて高い氣笛を吹鳴したまま浪路をわけて進んで行く、黑い船の影も遠くに見えて春の川口の夜は更けて行く。

ガチヤン／＼とサーベルの音立てて巡査が通つた。火の番小屋のランプがねむさうに薄黑い油煙をはいて暗い海岸通りを照して居る。

籠で行くのはおかるぢやないか――
――私しや賣れて行くわいな――

船員らしい男がドン／＼節を唄ひながら千鳥足で行き過ぎたあとは只風の音か浪の音。

(葉山長者ヶ崎)



春鳥紀行

醉茗　浪之介
みどり　いと　その　合作

新橋停車場

四時うつたのを夢寐に聞いてそれから間もなく起きて直ぐ瓦斯つける。雨戸を一二枚開けたけれど、まだ夜はまるで明けてゐない。灯の下で髪結つたり、物を整へたりしても夜から夜が續かつたやうで明瞭と眼が覺め切らないで可笑なものだと思ふ。五時過ぎて戸を殘らずあけ放したけれどまだ仄暗い、明けきらぬばかりでもないらしいお天氣のわるい加減もある、どんよりと濁つた空合が氣になつてならない。昨夜も何度空を眺めたか知れない。今度こそ今度こそ星が出てゐるかしらと夜更るまで根よく空ばかり眺めてゐた、けれど、依然鈍い色ばかりなので大抵な氣の揉めやうではなかつた。いつそてる／＼坊さん造らへてお頼みしようかと思つて墨濃くして坊さんのお頭まで作つたもの〻、あんまり子供らしいと笑はれるのが厭なので遂々止めた。

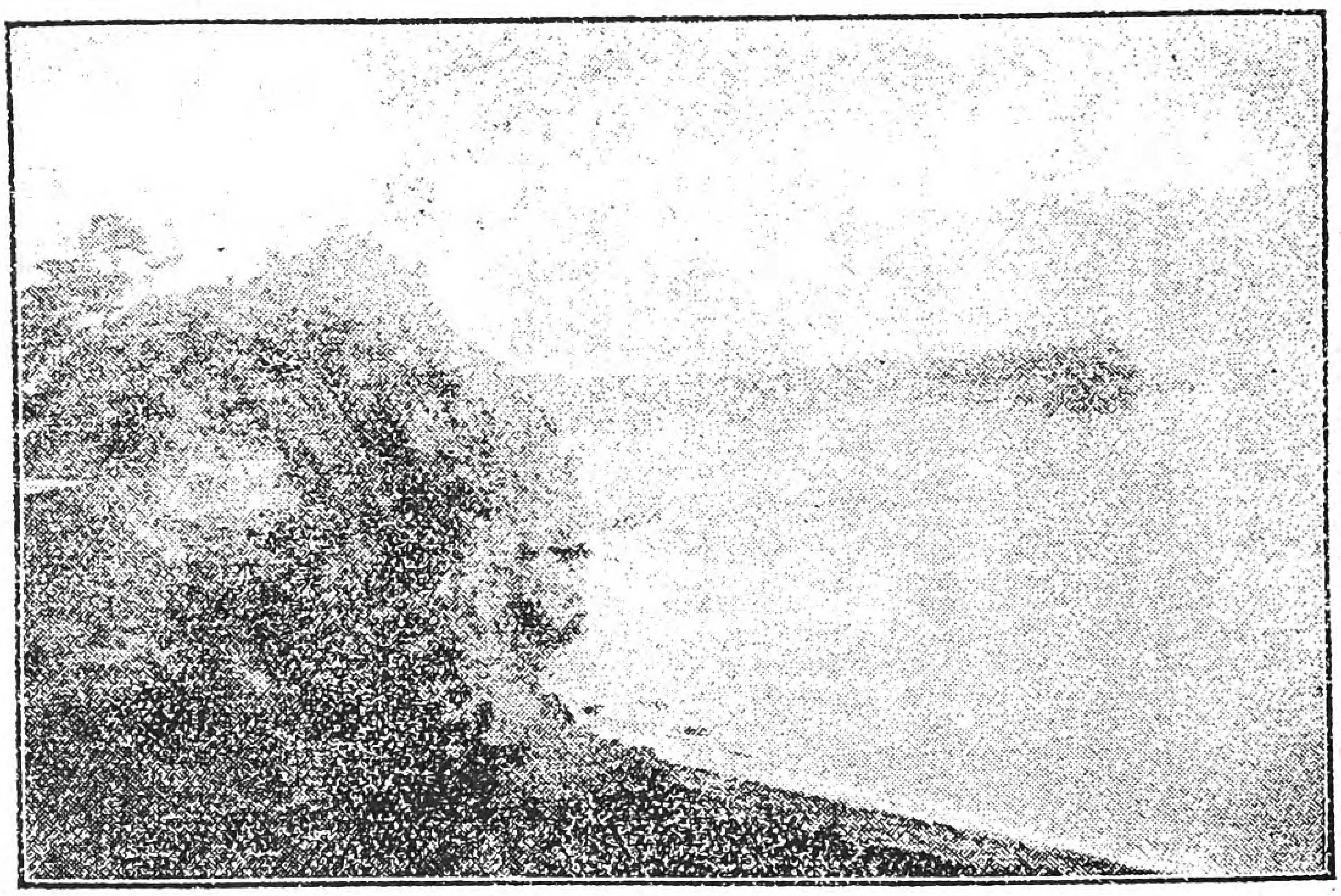
今朝になつて降られゝば、それこそ泣いても追付かない、きのふ揃へておいた着物をきて御飯すまし丁度六時半になつた。けれど空はや

つぱりさきの儘、それに母が『今頃はもう本來ならよく日が當る時分なのに……今日はどうも怪しいネ、雨用意をしていらつしやい』などいふので尙と心細い氣がしてきた。雨さへ降らなければ曇つてゐても私は平氣、一體餘り日照の時に外へ出ると、きつと頭痛がしてくるので雨が降らない限り、曇り日が好きなのだ、姉が『染ちやんは一體曇り勝ちな人だからそれで曇り日が好きなのだ』といつてゐた事を思ひ出す。

兎角、二番列車に間に合ふやう出掛ける。八時十五分なのだから六時四十分では一時間も待たなければならないけれど、次ぎのではあまり忙しいからこれにする。今は學生が休暇なので停車場がすいてゐてうれしい、赤切符でも大丈夫らしいので三等にする。

けふはお幾人位お出で遊ばすのかしら、河井先生の仰つた方々皆樣がきつと〳〵いらつしやつたら眞實に嬉しいのに、西崎樣も平塚樣も一年ぶりにお目に懸れる……。品川の泥海通りこしてやがて新橋へ着いたのが七時五分。新橋の停車場は相變らずの雜沓で騷々しい事おびたゞしい、大分田舍なれてきた私は偶にこゝへくると目が廻りさう、すぐに婦人待合室へくるとまだ誰もゐない。私だけの氣樂さにゆつたり椅子に寄つてゐると間もなく、盛裝した夫人、令孃、御隱居樣などぞろ〳〵這入つて被入しやる。時計見に行くとまだ三十分もあるので何か讀むものを買ひに行く。汽車へのる時はどうせ捨てゝ行かなければならないのだから、しきりに勸める雜誌をよして時事新報とゼムを買ふ。少し落ついて待遠しいのを紛らさうと思つて、新聞擴げても周圍のどよめきと出入する方に氣を付けるので何にもならない、暫くすると、二十五六位な方で何となしに誌友らしく思はれる方が被入しやつたので、私は幾度も、伺つて見ようと思つたけれどつひ口でもつていひ出せないでゐると、又お一方奧樣らしいお美しい方で格好のよい洋髮の方がいらつしやつた。そしてしきりに室内を見廻したり、又外へ出て被出しやつたりお連れを探がしてゐらつしやるらしいので、あの方ももしやと思ふと胸がどき〳〵してきた。

もしかうなると來る人〳〵が皆、さう見えてしまふ。それにしても河井先生はまだお見えにならない、先生がお出でがない事には何が何やらちつともわからない、もう時間もほんの僅なのに、困つてしまふ。私獨り待ちぼけだつたら大變だ、室内にゐるのも厭やになつたので室外へ出て立つてゐる。樣々な人が皆、右往左往してゐる中にじつと立つてゐるのはさきの洋髪の美しい婦人と私それから青黄ろい色したやつれた樣な支那婦人だけ、そのうちやう〳〵河井先生がお見えになつたので急いで御挨拶すると洋髪の方もすぐに御挨拶*



葉山長者ヶ崎遠望

*遊ばす、やつぱりさうだつたのだと思ふ。それから今度は日本髪にお上げになつたお優しさうな方がお見えになる。

河井先生が『では紹介して置きませうこの方が白木絲子樣でこちらが杉浦さんです』。日本髪のお方がいと子樣、洋髪のお方が翠樣、私は嬉しいと思ふと同時に此處にゐるのが辛らくてならなかつた。女子文壇中歴々の方方を控へて私はまだ生れたての赤坊同樣、無事に人並に育つやらどうやら覺束かない今なのだから

『花世さんはまだ見えませんか』つて河井先生仰しやる『お見えになりません』と申上げると、すぐ切符賣場へお行きになる。皆樣と少しお話してゐる所へ又お戻りになつて、『もう待つて居

ると間に合はなくなりますから乘つてしまひませう』と仰しやる。三人ぎり、私びつくりしてしまふ。皆様もやつぱり驚いていらつしやる。平塚様と西崎様、どう遊ばしたのかしら、邦江様もきつとお出で遊ばすことゝ思つてゐたのに。少くとも五人位はお出でになることゝ思つてゐたのに、……『後から來るかも知れませんからとにかく行きませう』と仰しやるので改札口へ行くと、いつの間にか外島先生お出遊ばして……、列車へ乘り込んでからも、車外通る人に氣をつけて見てゐても、それらしい方は、さつぱりお出でにならない。汽車は遂々停車場を離れた。（染子）

春の葉山

滑革のやうな坦々たる砂利道路は、夜來の春雨にしつとりとおちついた濕ひを持つてゐる。左に山、右に海を抱いた三浦半島の海岸線は、極めて自然な曲線を劃いて、逗子から三崎、浦賀の方にまで延びて居る。町になり、里になり、村になり、海岸になり、道路は何處までも續いて、別邸あり、漁家あり、農家あり、料理家あり、藁家の陰には紅の桃あり、別莊の塀越には滿開の櫻あり、山の裾には菜の花あり、風は無く、塵は立たず、浪は靜かに、山は默して居る逗子葉山の沿岸を、長者ケ崎さして走る自動車の面白さ、僕は此時から心持が一新して了つた。

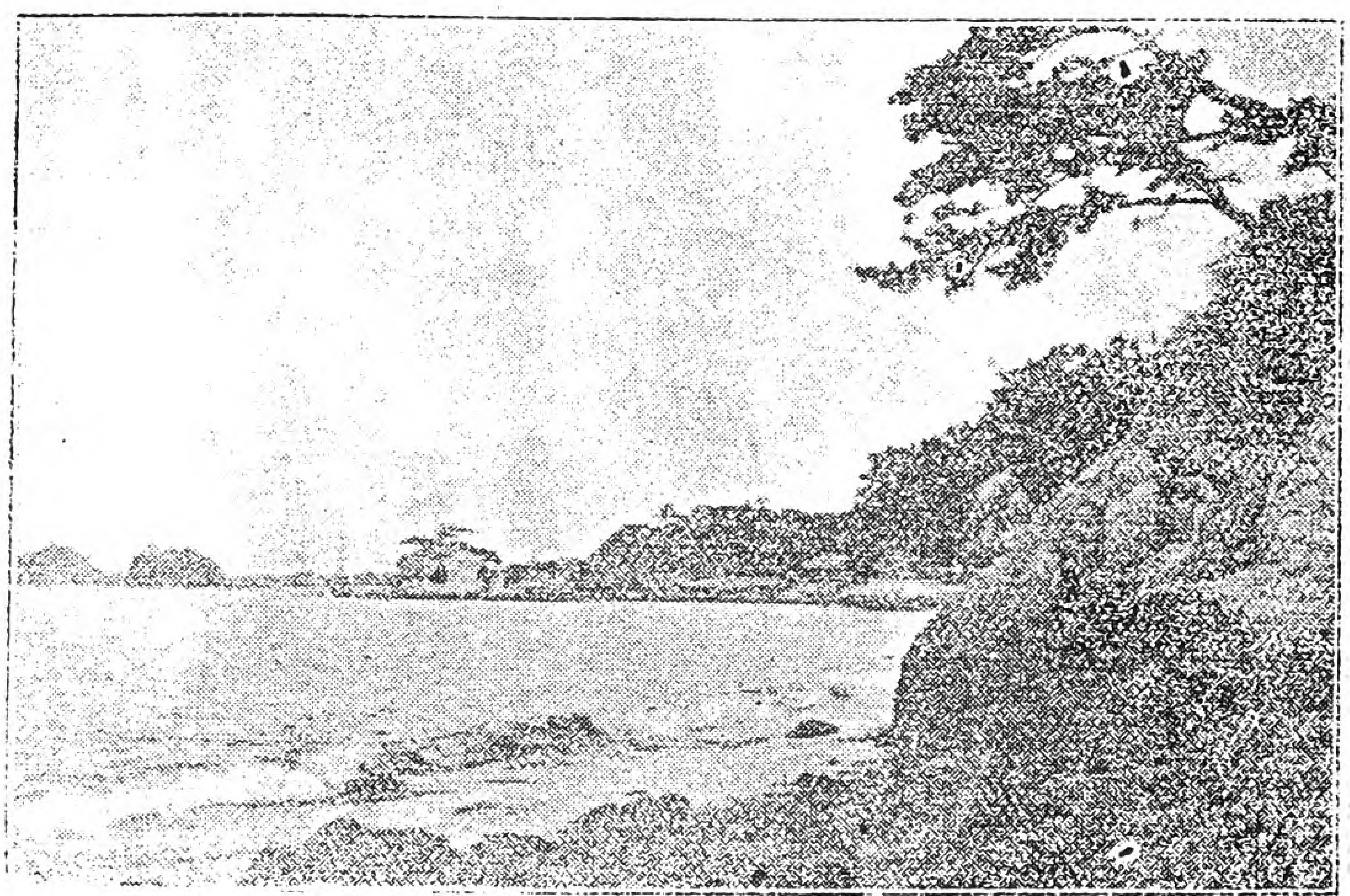
長者崎は化石して前世紀の動物が永劫の浪に洗はれて骨許になつた樣に、灰色の稜々した岩が長く突出して居る。それが丁度長者園前の濱の防波堤になつて居る。其の濱に西洋人の姉弟が覺束な氣に和船を漕いで居ると、若いマヽさんは岸の岩に腰かけて莞爾して見て居る。僕は小船に乘る事を勸めたけれど、僕の手腕を信じない人許りでだめであつた。和服ならば浪打際に跣足でしたく／＼と浸りたいと思つて居たら、たまらなくなつたと見えて履物を片手に杉浦

婦人は浪の引いた跡の濕れた砂を踏んで居た。白木夫人は遠く地平線上に富士を見よう〳〵として居るらしく、美馬孃は貝でも拾つて居るらしく、河井さんは石を拾つては海に投げて居る。何れを見てものんきなものだ。（浪之介）

長者ヶ崎

長者園で私等の通されたのは十疊と六疊の續いた新築の可成りの座敷で床の間には滿開の山櫻が活けてあつた。

今朝から氣に懸かるのは空模樣である。それに河井先生の御旅行の時はいつも雨癖だと緣起の惡い事を被仰るので猶々心*配だが、今日は先生お一人の旅ではない。平塚さんに云はせれば太陽は女性だそうだから、今日は婦人連の方が多數を占めてるのだから屹度晴れるなど丶私等は不安に唆されながらも、強い自信をつけて居ると、好い具合にも空の曇は漸く薄らいで來た。層を重ねた深い雲に、どんよりと盲いたやうだつた空が、漸くにして徐々に一枚〳〵と雲が剝がれて、もう後の僅かな布の布目から包みきれない太陽の光りがこぼれるやうに、空には淡い輝きが見え出した。鈍い色した浪は、あまり良い凪ぎで海としては物足りない位の靜かさであつた。『春の海ひねもすのたりのたりかな』ね蕪村の句でしたね、と外島さんが被仰る。砂濱を



葉山の海岸

歩行ながら私も先刻から、この句を心に描いて蕪村はうまい事を云つたものだ、もうこの十七字に、ようくこの海をいひ盡して居ると思つてた處だつたのだ。

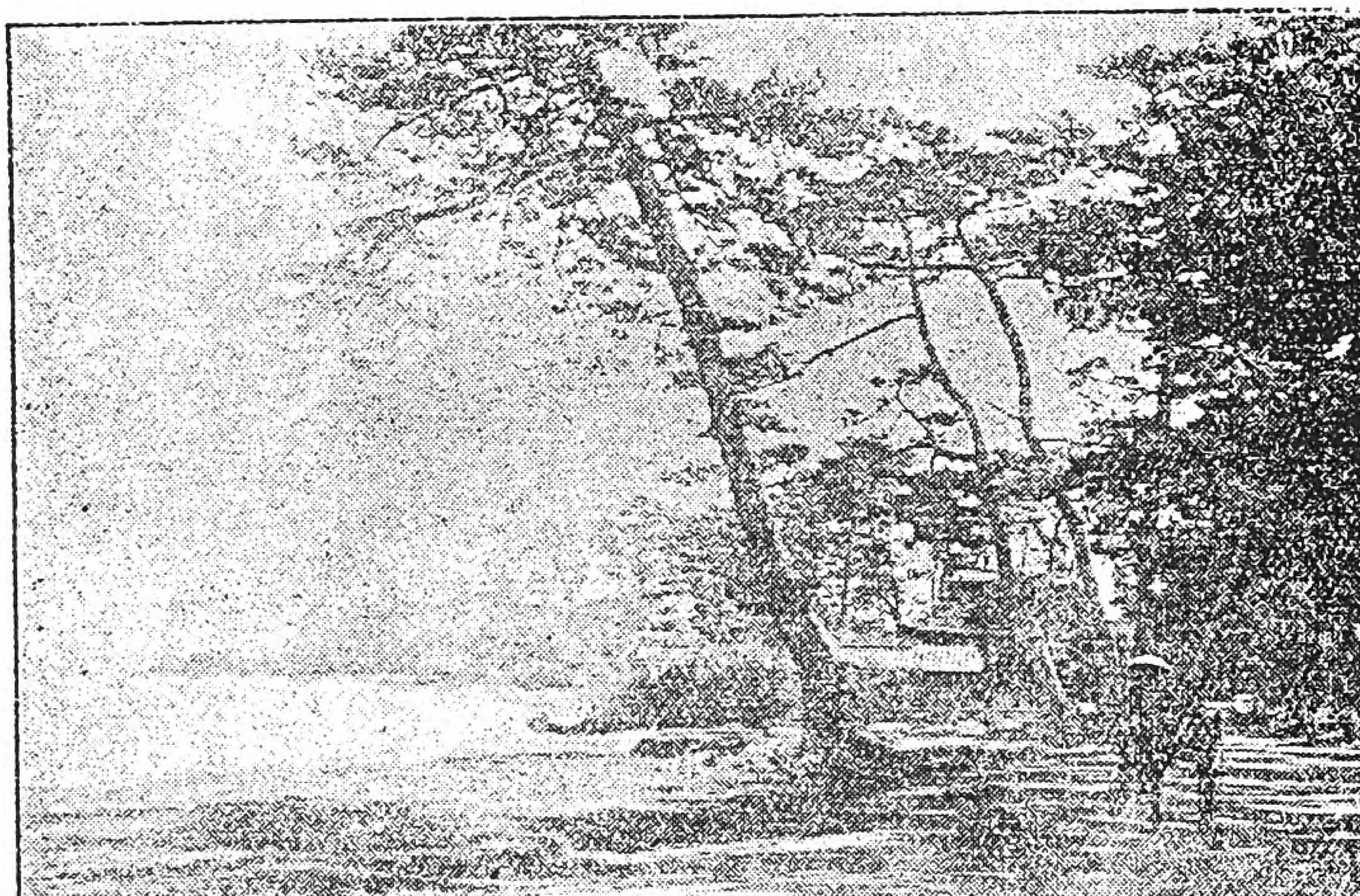
親子でもない兄弟でもない。たゞほんの淺い交際に過ぎない外島さんと私を、計らずも一致させたのはこの蕪村の句。所謂詩の國に憧がるゝ者の心と心とであつた。この得難い廻合は別の世界に住む人と握手することを許さないのだと思へば、こゝに被入る河井先生も白木さんも美馬さんも、みんな同じ趣味に親しむ懷しい人ばかりだから、何隔があらうかと、私はもう心ゆくばかり深くもない胸の内を開放して、肩の張るやうな氣詰もなく無邪氣に遊ぶのであつた

海岸から磯に上がると、菫や蒲公英や外に名しらぬ春の花々が綺麗なこと、私は手を出さずに居られなかつた。見上げるやうな崖を微かの土が肉迫して居る、そこに種々珍らしい植物が生えてるのを、外島さんは植物學者の積で一々説明なさる。河井先生は多く撫子の芽生えを。白木さんは菫の花束を作つて被仰る。杉浦さんそんなに澤山お家まで持つて行かれますか。と皆樣に訊かれた程。私の家づとは量を増した。もう摘んだ花は手には持ち切れないで胸にかゝへて居る。然し今日の紀念にはこれが唯一の物である。學生の頃遠足の日を指折つて待つたと同じ期待で迎へた今日の旅が、幸ひ雨も降らずに豫定通りに行はれた嬉しさは、一通りではないが、さうかと云つて、筆の力言葉の彩を借りればともかく、さもなくば、今かうしてその場に臨んで居る場合。嬉しいからとて特別な現象がある譯でもないが、これが今日を過ぎ明日となり明後日となり、漸々日數を重ねる毎に、單調な日常生活の倦怠の中から、今日の行樂の印象が濃い酒のやうに強烈に湧き出づるのを、期待して居る私は、その時の追憶のよすがにこい花を自分の庭に移し植ゑて、年々の春に咲くのを見ながら、この懷かしい人達を思ひ辿ることにしようと目論みるのであつた『ね、この撫子が咲きましたら御馳走をしますから被入つて下さい』と云つて笑はれた。

本統に春は人が懷しい。春逢つた人は皆戀人のやうに永久に忘られないやうな氣がする。

大崩れと云ふ名の通つた、見上げる斷崖が崩れて漸く支へて、出來たと見える路は、海に臨む側に欄干が出來て居る、其處から瞰下す海の面までは何十丈の深さであらう土をえぐつて削りとられたやうなその側面に、こぼれ咲きの菜の花が、彼方に一株此方に一株と明るい繪の具の滴りを赤い土に垂して居るのを見ながら、もう御飯に間もなからうと宿へと引返す。もう十疊の座敷には御膳が五つ私達の爲に並べてあつた。

＊



磯邊づたひ

＊程良い散策は、平常運動不足で縮まつた私の體に油を注がれたやうに、四肢の脉管が活潑に勢づいて、快よい疲勞を覺え、思はず壁に脊をもたせて膝を崩すのであつた平目の刺身。鬼から燒。春の野菜の匂のするお汁など。空腹の身には此上ない佳肴珍味であつた。家庭にあつては、嫦が心盡しの料理にと義理に箸とる位しか食慾のない私が今日の御飯は心からおいしい。噛み碎く一粒々から甘い濃漿が舌に流れ出るやうな氣がする。咽喉を過ぎ胃に滿ちる食物が今日ばかりはよく消化れて滓とはならず。悉く血になり肉と成りゆくやうに思はれて私は恥しい樣に椀を重ね皿を平げると『どうぞ御遠慮なくね』と外島さんは

私の貪に稍驚いたやうなお顏をなさる。給仕盆に茶碗を渡してる間また海の方を眺めると嬉しい事、雲は遂に破れて裂目から映く太陽が覗き出した。海には金波を漂はし初めた。キラキラと。皆樣が口を揃へて勝利を喜んだ。日が射すと宿の庭の芝生が俄に蒸されるやうな暖氣を反射して、緣に近い私等の頰にぬくみを感じさせる。繪葉書を女中に出させて皆樣が合筆なさるのであつた。（翠子）

磯邊づたひ

御緣があつたら又と計り、御機嫌よう有難う存じますの聲を後にして長者園を出たのは三時頃でもあつたらうか。下へ降りて濱邊の砂路をざく〳〵と、歩き難いので駒下駄の足の重いこと、翠さんは云ふ『跣足で一度味を占めたら又跣足になり度い』。

來た時には薄ぐろく濁つて見えた海の色がすつかり變つて了つた。太陽をうけた波面がちかちかと輝いて明るくなつた沖の方には漁船だらうか小さい船影がいくつも見える。遠凪の海はまるで湖水のやうな穩やかさ。

三宮式部官の別莊の横手から上の道へ上ると、農家の納屋のやうな處へ出た。大きな椿の木に紅い花が澤山咲いて居る。本通りへ出る。先刻宿の女中に聞いたお饅頭屋は何處だらうとゆくと直きに左側にあつた。菓子箱の中に一口に食べられ相な位のお饅頭が二つ宛、重なつて入れてある。葉山名物女夫まんぢうと云ふんですつて。銘々一袋づゝ買込んだが包むものゝない私は袂の中へ入れた。歩くたんびにブラ〳〵と肩に覺える重さ。

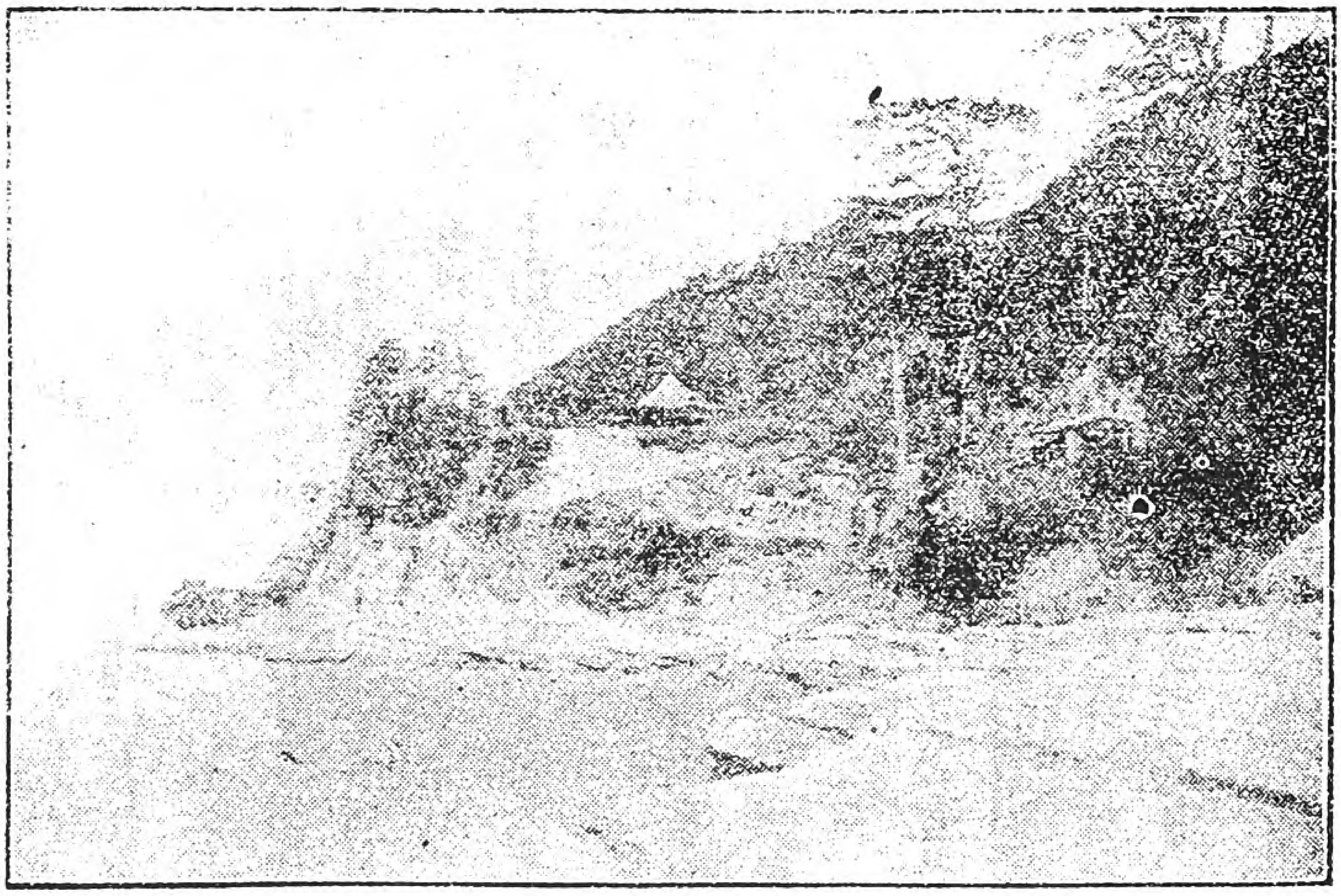
道は些の凸凹もなく砥のやうに平かであつた。東京の場末の道路なんかより遙かに好い。全く宮樣のお蔭なんであらうと語り合ふ。

有栖川宮邸の高い生垣の上にも御用邸の白い石塀の中にも、咲いた咲いた櫻は今滿開である

御用邸の門は黒かつた。昔やうの屋敷門、門衛の屯所は空しく立つて靜かな門外に色の黒い子供達が遊んでゐた。

目の下につゞく磯傳ひ長者ヶ崎は遥か後になつた。海沿ひの道をゆく同行五人、急がぬ足どりは散歩でもしてゐるやうな長閑なる春の旅や。

背後からブヽーと自働車の音、避けた道を走つてゆく車の上には一緒に長者園に居た支那人の連中が乘つて居る。まるで丹波ほうづきを白くしたやうな格好にヴヱールを被つた二人のチヤンメンさん。一緒にゐた時も變な洋服で成つてないスタイルを盛に活動させるも*



逗子海岸浪子不動

*のだから、外島さんに玉乘々々と罵倒された。遠くなつてゆく自働車を見送り乍ら『玉乘に道をよけたのは惜しかつたね』と外島さんは云ふ。

別莊の風雅な構へがあるかと思へば桃咲く古びた農家があり、萱葺の漁家らしい家の周圍に船の干してある處や、菜花黄に豌豆の花白い處を通つたり、蜒々とした道をゆくほどに時に自轉車に逢ひガタ馬車に逢ふ。

『如何です皆さんのお好きな物がありますよ』と途の曲つた處で外島さんが云ふので、見ると傍の家に目につく燒芋の竈、皆が笑ひ出す。

『いくら好でももう持てやしませんもの、お預けにしませう』翠さんのお言葉はご尤も。片手

に信玄袋、片手に大事な新聞包みを抱へこ。新聞包みの中はそりやいろ〳〵な物がありますの菫、蒲公英、撫子の芽生、豌豆の根こぎ、それに磯に園つてあつた和布まで。『世帶持の方は違つたものですね、明日のお味噌汁の實まであるんですから』とこれは誰方かの惡口。ゆきに乘つた自働車屋は逗子と長者ケ崎間二里といつたけれど中々歩きでのある事よ。河井先生と外島さんと先へ、後から行く女三人の足は少し疲れを見せて來た。殊に寢足にして了つた私は何處かで休み度くてたまらない。森戸神社の石の鳥居を見つけた時は嬉しかつた。古びて堂の色と岩の色と同じ樣になつてゐる社に似合ず入口に立つた一對の石燈籠は新しかつた。境内の松は海からの風に吹つけられて皆一樣に曲つて居る。社の後に廻つて見ると大きな岩がいくつも散らばつて、眼前に展けた海の眺望は實に佳かつた。有名な千貫松は海に對つた一角に聳えてゐる。私等が遊んだ下山口の磯邊、長者ケ崎なんかもう全然見えなくなつて了つた。私たちは突出た岩端に腰かけた。

霞んだ水平線の上に淡い遠山の影が夢のやう、眩しい程でない夕日が和かく海の上を照らして、靜かに動く波は高い音も立てない。岩と岩との間を寄せては返す波の穗頭の白さ、淺い處には藻の生えてゐるのも見えて砂地に下立つて遊ぶ人の影も二三ある。河井先生と外島さんと岩を傳つて下の水際に下りられた。餘り急な岩の傾斜に有繫に私達にはゆけない。

右手の方に近く葉山の格好よい姿が迫つてゐる。何處いらからが葉山と逗子との別れ目なのやら、初見參の身には丸で判らない。

森戸神社を出てゆくと、街らしい風をした一部分を通り過ぎ、又海が見え磯が見え、目ざしにした生魚を家の前に干してあるのなんかに出會ふ。

夕日の色が段々赤味を帶びて來て、光の反射する海の美しさ、曇つてゐた爲見えなかつた富士が白金のやうな雲の傍にいつかぼうつと淡墨で描いたやうに現はれた。遙かに黑く江の島も見

える。

富士が〳〵と一様に足が停まつて了つた。富士が見えないかな〳〵と長者園を出る前から云つてらしつた河井先生の願望は成就したわけ、是を見てゆかないのは嘘ですよと一行は休む場所を探す。

日かげの茶屋を過ぎてすこし行くと、藤棚を前にした茶店がある。煙草を買ふとてはひつていつた男の方達が腰を下したので女連も腰かけに足を休めた。

『不如歸』で名高くなつた浪子不動までの道程を内儀さんにきくと此處から二十町あると云ふ水を隔てゝ對ふに見る山の裾のお堂がそれだと内儀さんは指さして敎へる。茶店からは眞正面船でも行けるんでせうと云へば、えゝ、船でよくいらつしやいます。

船でゆけると聞て一同大賛成、船を賴んで貰ふ事にして茶店のお婆さんが下の家の方へチヨコ〳〵走りに馳けていつた。

富士はいつのまにか見えなくなつて了つた。やがて海に隱れやうとする太陽が水平線上に赭く大きく……それを見乍ら先刻買つたお饅頭を出して食べる。

『何卒いらしつて下さい』とお婆さんの呼ぶ聲に一行立上る。

よく凪いだ薄暮の海を船で渡る……詩的な情趣に胸を躍らせ乍ら私達は茶店の前から濱邊へ下りた。（いと子）

浪子不動

一棹ぐつと押すと船は春波洋々たる海上に乘り出した、船頭は直ぐに櫓に變へて樂々と漕ぎ出した『此んなに好い凪は珍しいことでがす』と云ふ、誠に船頭の言ふ通り、渚に寄せて居る波はあるが、打つて居る波はない、海上といふには餘りに靜かで、圍まれたる山の方を見て居

ると湖水の上を行くに異ならぬ。顧みて鎌倉、腰越の邊りを見やると、暮靄漸く山を染めて、それも頓て船の進むに連れて、近き小坪浦の崖の向ふに隱れて行く。江の島は春靜かなる夕の眠りに就かんとするもの丶如く、今し太陽は富士近く鼠色の雲に沈み、空の色、海の色、山の色は見る〳〵藤紫の色に變つて行く、漫々たる水平線の上に物あり、點の如し、忽ち隱れ、忽ち顯る『こんな所に鵜が居るだらうか』と聞くと、『鵜でがす』と船頭は答へた。又近く眼の前に一つの鳥が浮いた、水上に羽ばたきしては、隱れ、又顯はれる、『あれも鵜か』と聞けば、『いや海雀です』と云ふ。海にもさま〴〵な鳥が居る。何處に休み、何處に眠るのであらう、淋しい鳥よ。

ざあー、ざあーといふ響が時を刻んで聞えて來る、今船を着けようとする山の方は、巖石になつてゐるから流石に靜かな波も打ち返すのであらう、その波の音が圍まれたる低い山に反響して、自分等の魂を淋しい波の音に誘ひ入れようとする。船は危うい一つの巖石に着いた。其處は小坪の浦といふのであつた。

『此處からお上りなさい』と云ふが、なか〳〵鳥渡では上れない、殊に婦人方は大惱みであつたが辛うじて巖に上つて、大磐石に乘つたやうな氣になつて、身も輕々と不動堂の方へ上つて行く。

小說『不如歸』以來、有名になつた此浪子不動は、元浪切不動と云つたさうだ、いつのまにか浪子不動となつて、門の懸額にも麗々しく浪子不動とある。成程と點頭いて堂に入つた、堂は小さな巖窟に添つて建つてあるので、堂守の語る處に依ると、不動尊の本體は巖石に刻みつけてあるのださうだ。形ばかりの萱葺の堂はいつかの暴風雨の時に一度海中へ吹き飛ばされて了つた、其時堂の前にあつた大きな松の樹も二つに折れて海へ落ちた、幸ひにも堂守は其不動尊を安置せる巖窟の中に免れて居たので一命を拾つたのだと云ふ。堂守は東京より來る『不如

歸』の信者を扱ふことに熟れてゐるらしく、短冊を並べ、歌を語り、俳句を語り、繪葉書を見せ、且『此處の前では幾度も活動寫眞を取りました』と云つて聞かせる。浪子さんも好からう活動寫眞も好からう、それで人はわざ〳〵此の路ばなれのした崖の上まで來ては、美しい海を見ることが出來るのであらう。

堂守の語ることはなか〳〵盡きない、聞きたいことも盡きないが、崖の下を見下すと、今乘つて來た船までの路にも、はや黄昏の色が漂ふてゐる。心焦かれて又の日を約し、急いで崖を下り、待たして置いた船に乘つた。

船が岸を離るゝに從ひて、不動堂の屋根も、巖も、石も、後ろに聳えてゐる山の樹立も、凡て暮れ行く薄闇の裡に包まれ、其間より微に洩れ來る一點の火光は、吾等の爲に不動尊の前へ捧げてくれた蠟燭の光明であらう。火光は此方の岸に下り立つまで見えてゐたさうだが、私の眼には見えなかつた。

女三人と男二人を乘せた船は、現代の傳説を作つた悲劇の舞臺を後にして、逗子の方へ歸つて行く、山も暮れた、海も暮れた、もう鳥も居なくなつたらう、暮れても水明りと、空明りに暗いとは思はれぬ。默つて居る染子さんが『星が只た一つ見えて居ます』と云ふ、美しい寂寥に捉へられて、舟中又更に一語もない。（醉茗）

歸り途

船から飛下りたのは浪之介君一人だつた、後の四人とも船頭の爺さんにおんぶされて砂の上へ下して貰つた。但し私だけは恐かつたのではない、濡れるのが嫌だつたからだ、敢て斷つて置く。

東京の郊外に見るやうな、けば〴〵しい別莊町を拔け、停車場前の小綺麗な茶店へ上つて晩

の支度をしながら汽車の來るのを待合した。
八時十幾分かに逗子を發車して大船乘換、それからは又賑かな汽車に乘つて、大森で染子さんと別れた。
新橋へ着いて今更ならぬ都會の夜の明るさを眩しく感じて、停車場前でいと子さんと別れ、櫻田本郷町では翠さんに別れ、赤坂表町で外島君に別れ、靑山まで一人になつた。
歸つたのが十一時二十分。
今日は如何にも嬉しい遊樂の日であつた、初め曇つて居た空が、晴れて來た嬉しさもあらう時間に逐はれず足に任せてゆる〳〵と歩いて來た長閑さもあらう。一緒に行つた人達の心持が能く融和されて、少しの隔りもなかつた欣びもあらう。例へ一日の旅行とは云へ、斯んなに快い感じを與へた旅行は、永く好い思ひ出となつて殘るであらう。（醉茗）

☆

いと子

▲朝の汽車が新橋を後に川崎附近に掛つた時、淡紅の霞が地に曳くと思つたのは桃畑の花の色であつた。六郷川のほとり殊に其淡紅の彩霞がなつかしく私の胸に映つた。曇つた日乍ら春の色は何處にも動く。一日の行の最初にうけたよろこびは此時であつた。

▲暗くなつた小坪の浦を船で停車場の方指して渡つた時、私は幽玄な感じに搏たれてゐた。艪を叩く靜かな浪の音月のない空には金星が一つ瞬いてゐる。彼方に遠く漂渺とつゞいた海、漁火の影もみえない其海原の果は夢の裡に消えて――見返れば不動堂の灯が眞黒な山の影にぽつと一つ赤い。なんといふ靜けさ。私は涙ぐましいまで情緒を動かさずにゐられなかつた。

▲目覺時計をかけておいて五時に起きたのも近來にない事そして八時迄に停車場へとの事だつたので、初めて割引電車といふものに乘つた。逗子驛に下車してから乘つた自働車、耻かし乍ら是も初めてなのであつた。歸宅したのは大抵の店家は締て了つた十一時半頃、こんなに晩く一人で戸外から歸つた事はないので是も初めて、お前のライフには大分記錄破りのことが出來たねと翌日家の者に笑はれた

▲妙だつたのは葉山の郵便函が赤い丸いのだつたこと、東

京にはまだ四角い黒いのが殘つてゐるのに。然し東京から二時間で行ける處ですものね。それにしては逗子の停車場の中に去年の秋の白木屋の廣告が麗々しく張つてあつたつけが。長者園の屋上運動場へ上る階段の昇降口に御宮樣お出の節は此上へお昇りの事を禁ずとか書いてあつた。御宮樣とある處に東京離れがしたやうな氣持がした。

▲翠樣、お持歸の草はどう遊ばして。私のは駄目、菫は根のあるのだけ選出して二坪の庭の一隅に植ゑましたが澁い色の花も萎れて地の上にぐた〳〵と、豌豆は花だけ摘んで小さい花瓶にいくつもさし、小さく出來てる莢は惜しいので甘煮にしたもの、中へ一緒に入れました。可愛い莢が僅十ばかり。中で大き相なのを二つ毎日働きに出る弟のお辨當のお菜の上へのせてやりました。七十五日生延びるけれど弟は必度妙な顏をしたでせう。これは葉山の豆なんですよと斷つておきませんでしたから。

☆

淡子

▲私はお恥しい事にまだ一度も自働車に乘つた事は有りませんでした、けふ乘れるとは夢にも思ひませんでした。乘合にしろ何にしろ自働車といふものゝ味をおぼえたのは惡くありませんでして。

▲私はけふは大分默り込んでしまひました。一日坐つた儘の時は割合にお話も出きますが乘物したり、歩いたりの時はどうも口の方がお留守になります。一體家にばかり引込みがちなので偶の外出にはいつもこんなです。

▲河井先生と外島先生は去年の櫻草つみ以來、私をすつかり足弱のくたびれやと思つておらつしやる。實際さうには違ひないけれど、然し特に足が疲れるわけでもないのです。只危ない道だの岩のやうな崖のやうなところへくると險のんで〳〵いつも後になつてしまつて、それでまだ獨りでは歩けなくつて、度々先生に手を引いて頂くのです、まるでお婆さんのやうだと思つて自分ながら苦笑されました。否此邊のお婆さんは私よりよほど強いでせう、足に坐りが附かないといふのか、腰が坐らないといふのか、只フラ〳〵して轉びさうでなりません。自分ではどこまでも歩きたい氣ですが、私の弱蟲の爲めに、皆樣にお世話をかけるのでお氣の毒で〳〵なりませんでした。こんな事では實に困ります、これからちと歩み癖をつけませう。

▲翠樣のお元氣な事、初めから歸りまで少しもお疲れにならないで晴れ〴〵したお顏色をしておらつしやるのには感心致しました。私はうらやましいと思ひました。

▲いと子樣も大分お疲れのやうでしたけれど、私程目立たないのがやつぱり羨ましう御ざいました。沈着な、それは〳〵お靜な方お口數も少なくておらつしやいます。私は日頃から敬ひ申上げて居りました方、お目もじの叶ふたけふは幸福で御ざいました。

▲翠樣は蒲公英やら撫子の發生やら、豆の花やら菫などいろ〳〵を根ごとお掘りになつて、『家へ持つて行つて植ゑますの』つて嬉しさうに一生懸命に摘んでおらつしやいます。いと子樣もかなりお摘みになりましたし、先生方も澤

山おとりになつたのに、私だけが一輪も摘みませんでした。何故か自分にもわかりません、花が嫌ひなのでもありません、美しい花を見ればやつぱり美しいと思ひ綺麗とも思ひます、それでゐながら少しも摘みたいと思ひません。私獨りだけ何もしないで立つてゐるのも隨分間が拔けてゐますが私は海さへ見れてをればうれしいので御座います。不精なのかも知れませぬ。

▲落陽美しい夕に、岸邊の船へ乘り移る時の氣持は忘られませぬ。年老いた船頭が擢取つて靜かに海面を辷る情趣は忘れませぬ。岸を離れる時船を押した宿のお婆さんが砂濱に腰ついて、こけた形は滑稽ながらこれも又云ひ得ぬ味がありました。

▲浪子不動堂に、不如歸の狂言で俳優の名前麗々たる繪はがきを賣つて居たには驚きました。白瀧不動の名は退けられて、何から何まで浪子づくめには興醒めました。

▲船から上つてから、つんぼの男に道尋ねたるも可笑う御ざいました、翠樣が精一杯の大きなお聲なさつたのがいつまでもをかしう御ざいました。

浪之介

☆

▲長者園の晝食はうまかつた。御婦人で二食分位たべた人もあり。海老を二人前平げた人もある。食後バルコニーに登つた、見晴がいゝ、伊豆半島が夢の樣に見え出した。

▲三宮の別邸の邊迄海濱を歩行たがあるきにくいので皆が困つた。併し困つたらしい顏をしないので、誰かゞ美馬さんが苦しさうだから」と罪を一行中の足弱と見なされた美馬さんに着せて本街道へ出る。此邊は鎌倉海老と、相州芋と、夫婦饅頭が名高い。第一は食た、第二を皆樣が買つた。就中第三は半數以上の人が大好だらうと思つたがとう買ひ得なかつたのは惜しかつた。

▲此邊の地名は北條、足利時代の武人の名が多い。

▲浪切不動、今の名、浪子不動を祠つてある小坪の山は、畠山次郎重忠と、和田小太郎義成と戰つた處である。

▲白く見えたものは、橋の欄干と、沖の白帆と、夕方の斷崖の巖と、婦人の顏。嬉しかつたのは、杉浦さんが蜜柑を持つて來たのと、富士が現れたのと、船に乘つたのと。嫌だつたのは、支那人の妾らしい女の厚化粧と、洋館の多かつたのと、歸りの汽車に乘つた時と。氣の毒なことは、來なかつた人と、美馬さんが疲勞たらうと思はれる事と。

▲今度の旅行は女ばかりで少くも七八人は集る豫定であつたが其前夜までに大抵は行けないことになつた、聞いてみると一々尤もな理由があるので、何ともいたし方はない。

▲併し汽車の時間が早かつたので、乘後れが三人出來た、花世さん、邪子さん、よし子さんの三人である。而かも三人とも逗子まで後を逐ふて來ながら合ふことが出來なかつた。後でひどく氣の毒に思はれたが、之も亦仕方のないことであつた。

▲最後に此紀行は大正二年四月三日の旅行記であることを一言して置く。（醉茗）

雜報

○今年の櫻　今年のさくらも初春の寒かつた割には早く咲いた、咲くと例の如く、雨が降つたり、風が吹いたりして、好い花見日和は全く少かつた、諒闇中のことゝて、大げさな花見の催ふしは殆ど無かつた。

○雨中尉の死　木村、徳田雨中尉が飛行機から墜落して死んだことは、名譽の戰死以上の國民の同情を得た吾國では飛行界最初の尊ぶべき犠牲である、同情は然もあるべき事だ。

○各女學校の新學期　學習院女學部を初め、日本女子大學其他の學校では例の通り前月より今月に渉りて卒業式があつた。女子美術では卒業式の翌日から生徒の成績品が陳列された、年々此學校は盛んになつて行く又今年は各地いづれの實科女學校も新入生徒が多いらしい。

◉寫眞募集

諸孃のお寫眞は勿論、風景、風俗各種の寫眞を募集します、掲載の雜誌は必ず贈呈し、寫眞は御入用ならお返しいたします。猶ほ全國寫眞業者諸君にも、同好の方は御寄贈を願ふ

◉文藝欄投稿規定

▲文藝欄の投稿は女子に限る ▲原稿は自今振りがなを要せず ▲二十一字詰小品文は三十行乃至五十行以内 ▲小説は二十四字詰百行以内 ▲詩は長短隨意 ▲群星欄も長短隨意二十一字詰 ▲和歌俳句は一人一首限り ▲圖畫は必ず方二寸以内
▲投稿は毎月十五日、嚴に締切る。

▲贈賞　▲小説は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢 ▲小品文は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢、▲詩は天賞金一圓、地賞金七十錢、人賞金三十錢 ▲和歌は天賞金一圓、地賞金五十錢、人賞金三十錢 ▲俳句は天賞女子文壇叢書一冊、地、人賞は本誌一部宛 ▲圖畫は天賞金七十錢、地賞金五十錢、人賞金三十錢 ▲群星欄は平素優秀なる投稿を送る人に三箇月毎に金一圓の特賞を呈す ▲以上贈賞は金一圓以上は物品一圓以下は圖書切符にて贈るものとす。

改正定價表（毎月一回一日外年四回増刊）定期號増刊號同額	
△一冊分（送料とも）	前金拾九錢五厘
△三月分（増刊共四冊）	前金七拾參錢
△半年分（同八冊）	前金壹圓四拾錢
△壹年分（同十六冊）	前金貳圓七拾錢

◁申込注意▷

注文は總て前金のこと◎振替貯金（口座東京一七二九番です）にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと（用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます）◎郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと◎郵劵代用は必ず壹割增のこと（收入印紙は絶謝）◎最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ本社への照會は返信料添付なければ回答せず

◉廣告締切期限……毎月十五日の事
廣告掲載料金は御照會次第御報す
取扱所　博報堂、電報通信社、各報社、文明廣告社

大正二年四月十五日第九年第六號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　女子文壇社
東京市京橋區大鋸町十一番地
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣
東京堂　北隆館　上田屋　至誠堂　東海堂　永久堂　東明堂　大阪盛文館

大正二年四月十三日印刷納本

女子文壇（婦人文藝）

四月十五日増刊
第九年第六號
（毎月一回一日）

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

講談世界春季増刊

あづま男

四月十日發行 正價金廿錢 送料二錢

長講

夕立勘五郎（神田伯山）

花のお江戸の男伊達、伊勢屋勘五郎が遊女高窓の哀れなる物語りに同情して身受せんとし、はからずも血の雨を降らすに至るお物語り意氣で艶っぽい春に持って來いの讀物。

柳川庄八（桃川如燕）

お馴染の如燕子が得意の長講『柳川庄八』を口演。面白くなかろう筈が無し。仙臺の浪士柳川庄八が義に依って孝子孝女を助ける物語りは江戸ッ子をして思はず快哉を叫ばしめるべし。

佃の漁火（蓁々齋葉柳）

葉柳子得意の艶物、深川藝者美の吉が、戀のため身を佃の漁火と共に消えゆく物語り。昨夏歌舞伎座に於て『巽巳藝者美の吉殺』と題し歌右衛門等に依って演ぜられし物なれば、皆樣先刻御承知の筈なり。

六席

多古の伊兵衛（一龍齋貞山）

義賊多古の伊兵衛が、義理と人情に責められて惡事を働き、屢々人の難義を助けしが、やがて改心して佛門に入るまでの波瀾多き物語り。貞山子の流暢なる快辯に依って、宛然として誌上に活躍すべし。

喜劇 **浮れ盗人**（二幕物）（檜山朝夢作）

お馴染の朝夢氏が新作喜劇、頗るお陽氣に、お賑やかにお臍の宿換へを始めさうな物なり。少々お目出度い御亭主が女房に責められて泥棒を開業し、初日早々うっかり躍り出すと云ふ筋、多くは云はぬが花なり。穴賢

落語 **百年目**（小三治改め）（柳家つばめ）

柳派の若手中での利者、小三治子が柳家つばめと目出度く改名して初めてのお話、先づその縁起の好いのを御景物として、こゝにも愉快に賑やかな御意を得べし。讀みゆく内に一緒に浮れ出さない樣御用心の物なり。

發行元 東京神田旅籠町一 文光堂

振替東京一九一五五 電話下谷四八一九

▲女子文壇第二増刊 定價金拾八錢 送料壹錢五厘